

福岡市

有田・小田部

第10集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第212集

1989

福岡市教育委員会

有田・小田部第10集正誤表

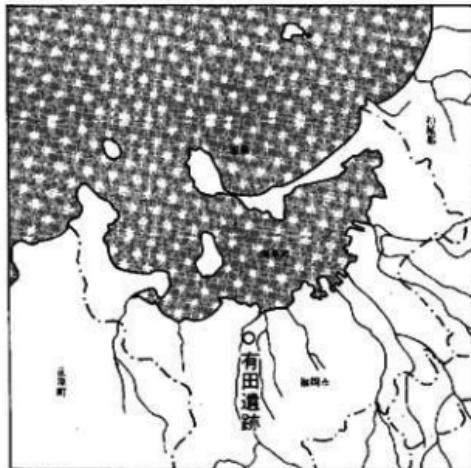
頁	位置	誤	正
II	Fig.16	1~3 棚列	1~3号構列
III	Fig.50	第134次造構配置図	第134次調査造構配置図
4	11行	近世の	近年の
26	14行	2×4間の	2×3間の
31	表の5号建物	4×?	5×?
31	表の5号建物	西面庇	(削除)
35	32行	直接的な	直線的な
40	8行	調にするか、	調にするが、
42	4行	剣切	剣先
46	9行	磨滅は	磨滅が
52	1行	113・114とともに	117・118とともに
58	註2	古文化論改	古文化論巧
PL13	(2)~(4)	(追加)	南から

NO.16808

有田・小田部

〈福岡市早良区有田・小田部における遺跡群の発掘調査報告〉

第10集



1989

福岡市教育委員会

序 文

福岡市は古くから大陸への門戸として繁栄しており、特に本市の西南部に位置する早良平野は埋蔵文化財が数多く包蔵されている地域として知られています。この平野の中で、有田・小田部を含む有田遺跡群は、先土器時代から近世にわたる重要な遺跡です。昭和41～43年に九州大学考古学研究室が区画整理にともなう発掘調査を行ない、弥生時代初頭の環濠集落や奈良時代の建物が確認されて以来、学会の注目するところとなりました。本市では昭和52年度から開発行為に先行して発掘調査を実施し、今年度迄に148ヶ所を数えています。その結果縄文時代の貯蔵穴群、弥生時代の集落や墓地、古墳時代の集落、奈良時代の官衙建物、中世の館跡など、数多くの成果が得られています。

今回報告する4ヶ所の調査は弥生時代から近世にわたるもので、弥生時代の集落や、中世の居館跡などを検出し、有田・小田部の歴史の一端を明らかにすることができます。

発掘調査から報告書の作成まで、指導員の先生はじめ地元の皆様方、作業員、整理補助員など関係者の方々にご理解とご協力をいただきしたことに対し、深く感謝の意を表すものです。

本書が埋蔵文化財保護の理解と認識を深める一助となり、あわせて研究資料としても活用いただけることを願うものです。

平成元年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例 言

- (1) 本書は福岡市早良区有田・小田部・南庄地域内における開発に伴い、福岡市教育委員会が昭和63年度の国庫補助を得て実施した緊急発掘調査の報告書である。
- (2) 本書には昭和60年度の第100次・第103次調査、昭和62年度の第130次・第134次調査を収録する。
- (3) 本書では有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見なし広義の有田遺跡と呼称する。
- (4) 本書に収録した発掘調査は、第100次・第103次調査を山崎龍雄・米倉秀紀が、第130次・第134次を山崎・小林義彦が担当した。
- (5) 本書に掲載した遺物実測、写真撮影、遺構・遺物の製図については以下のとおりである。
(遺物実測) 第100次—山崎・米倉・平川敬治、第103次～第134次—山崎、(遺構写真撮影)
第100次・第103次—山崎・米倉、第130次・第134次—山崎・小林、(遺物写真撮影) 平川、(遺物・遺構製図)—山崎・米倉・岡根なおみ
- (6) 本書に使用している方位は磁北である。
- (7) 本書の執筆は以下のとおりである。

第1章（はじめに）	山崎
第2章—1（立地）	井沢洋一
—2（調査の概要）	山崎
第3章—1（第100次）	山崎・米倉（各担当のおわりに名記）
—2～4（第130次～第134次）	山崎

- (8) 本書の編集は山崎・米倉が行った。

本文目次

本文頁

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査の組織	2
第2章 遺跡の立地と調査の概要	4
1. 立地	4
2. 63年度調査の概要	6
第3章 調査の記録	11
1. 第100次調査	11
1) 調査地区的地形と概要	11
2) 検出遺構	11
3) 出土遺物	35
4) まとめ	53
2. 第103次調査	59
1) 調査地区的地形と概要	59
2) 検出遺構	59
3) 出土遺物	65
4) まとめ	73
3. 第130次調査	75
1) 調査地区的地形と概要	75
2) 検出遺構	75
3) 出土遺物	79
4) まとめ	83
4. 第134次調査	84
1) 調査地区的地形と概要	84
2) 検出遺構	84
3) 出土遺物	89
4) まとめ	90

挿 図 目 次

本文頁

Fig. 1	有田・小田部周辺の遺跡（縮尺1/25,000）	5
Fig. 2	有出・小田部台地と発掘調査地点（縮尺1/5,000）	折込1
Fig. 3	有田・小田部台地の旧地形図（縮尺1/5,000）	折込2
Fig. 4	第100次調査遺構配置図（縮尺1/200）	12
Fig. 5	1号住居跡（縮尺1/60）	13
Fig. 6	2・4号住居跡（縮尺1/60）	14
Fig. 7	3号住居跡（縮尺1/60）	15
Fig. 8	1～6号土坑（縮尺1/40）	17
Fig. 9	7～12号土坑（縮尺1/40）	19
Fig. 10	16～22号土坑（縮尺1/40）	21
Fig. 11	1号貯蔵穴・1号井戸（縮尺1/40）	22
Fig. 12	1～5号建物（縮尺1/100）	24
Fig. 13	6～9号建物（縮尺1/100）	25
Fig. 14	11～16号建物（縮尺1/100）	27
Fig. 15	17～21号建物（縮尺1/100）	28
Fig. 16	1～3構列（縮尺1/100）	30
Fig. 17	1～9号溝上層断面図（縮尺1/40）	33
Fig. 18	1号住居跡出土遺物(1)（縮尺1/3, 1/2）	36
Fig. 19	1号住居跡出土遺物(2)（縮尺1/3）	37
Fig. 20	2～3号住居跡出土遺物（縮尺1/3）	39
Fig. 21	3号住居跡出土石器（縮尺1/3, 1/2, 2/3）	41
Fig. 22	土坑, 1号貯蔵穴出土遺物（縮尺1/3, 1/2, 2/3）	43
Fig. 23	1号井戸出土遺物（縮尺1/4, 1/3）	45
Fig. 24	建物出土遺物（縮尺1/3, 1/2）	46
Fig. 25	1号溝出土遺物（縮尺1/3）	48
Fig. 26	5・8・9号溝出土遺物（縮尺1/3, 1/2）	50
Fig. 27	ピット・敷石・遺構面出土遺物（縮尺1/3, 1/2）	51
Fig. 28	ピットNo. 018出土遺物（縮尺1/1）	52
Fig. 29	環溝周辺の弥生時代遺構配置図（縮尺1/2,500）	54
Fig. 30	2号住居推定復元図（縮尺1/80）	55

Fig. 31	第100次・134次建物類型図(1) (縮尺1/600)	56
Fig. 32	第100次・134次建物類型図(2) (縮尺1/600)	57
Fig. 33	第103次調査遺構配置図 (縮尺1/300)	60
Fig. 34	1号建物、1～3号横列 (縮尺1/100)	61
Fig. 35	1～3号、5・6号土坑 (縮尺1/40)	62
Fig. 36	1・2号井戸 (縮尺1/60)	63
Fig. 37	1・2号溝西壁土層図 (縮尺1/40)	64
Fig. 38	1号井戸出土遺物 (縮尺1/3)	65
Fig. 39	2号井戸出土遺物 (縮尺1/3, 1/4)	67
Fig. 40	1号溝出土遺物 (縮尺1/2, 1/3, 1/4)	68
Fig. 41	2号溝出土遺物 (縮尺1/3)	70
Fig. 42	1号建物・2号横列・3号土坑・ピット・表土・攪乱出土遺物 (縮尺1/5, 1/3, 1/2, 1/1)	71
Fig. 43	攪乱出土遺物 (縮尺1/4)	72
Fig. 44	第103・117次調査主要遺構配置図 (縮尺1/300)	74
Fig. 45	第130次調査遺構配置図 (縮尺1/200)	76
Fig. 46	1～3号焼土坑 (縮尺1/30)	77
Fig. 47	1～3号防空壕 (縮尺1/50)	78
Fig. 48	2号防空壕出土遺物 (縮尺1/4, 1/3)	80
Fig. 49	2号焼土坑・2号井戸・ピット・遺構面出土遺物 (縮尺1/6, 1/3, 1/1)	81
Fig. 50	第134次遺構配置図 (縮尺1/200)	84
Fig. 51	1～4号建物 (縮尺1/100)	85
Fig. 52	1～5号溝土層図 (縮尺1/40)	87
Fig. 53	出土遺物 (縮尺1/3, 1/2, 2/3)	88

図版目次

PL. 1	有田・小田部周辺航空写真 (昭和50年撮影)	
PL. 2	有田・小田部周辺航空写真 (昭和21年米軍撮影)	
PL. 3	(1)調査区全景 (北から)	(2)調査区全景 (東から)
PL. 4	(1)1号住居跡 (南から)	(2)1号住居跡遺物出土状況

	(3) 2・4号住居跡 (東から)	(4) 2・4号住居跡遺物出土状況
PL. 5	(1) 3号住居跡 (東から) (3) 3号住居跡遺物出土状況	(2) 3号住居跡内中央土坑 (東から) (4) 3号住居跡遺物出土状況
PL. 6	(1) 1号土坑 (西から) (3) 3号土坑 (南東から)	(2) 2号土坑 (東から) (4) 4号土坑 (南から)
PL. 7	(1) 6号土坑 (北から) (3) 8号土坑 (南から)	(2) 7号土坑 (東から) (4) 9号土坑 (南から)
PL. 8	(1) 10号土坑 (南から) (3) 16号土坑 (南東から)	(2) 12号土坑 (東から) (4) 18号土坑 (南西から)
PL. 9	(1) 19号土坑 (西から) (3) 1号貯蔵穴 (西から)	(2) 22号土坑 (北から) (4) 1号貯蔵穴断ら割り状況
PL. 10	(1) 1号井戸 (西から) (3) 1号井戸井筒 (西から)	(2) 1号井戸土壙断面 (4) 1号井戸井筒内の状況
PL. 11	(1) 中世の溝と建物群 (北から)	(2) 調査区北側建物群 (南東から)
PL. 12	(1) 調査区中央建物群 (南から) (3) 2号・3号建物 (南から)	(2) 1号建物 (東から)
PL. 13	(1) 8号・9号建物 (南から) (3) 14号・15号建物 (南から)	(2) 13号建物 (南から) (4) 16号建物 (南から)
PL. 14	(1) 5号・6号・8号溝 (南から) (3) 9号溝 (北から)	(2) 1号溝土層断面 (4) 7・8号溝 (西から)
PL. 15	1号住居跡出土遺物	
PL. 16	3号住居跡出土遺物	
PL. 17	2~4号住居跡、土坑、貯蔵穴出土遺物	
PL. 18	1号井戸、建物、1号溝出土遺物	
PL. 19	1~9号溝出土遺物	
PL. 20	ピット、敷石遺構、遺構面出土遺物	
PL. 21	(1) 第103次調査全景 (南東から) (3) 1・2号溝 (東から)	(2) 3号櫛列礫石 (東から)
PL. 22	(1) 5号土坑 (南西から) (3) 1号井戸	(2) 6号土坑 (東から) (4) 2号井戸 (東から)
PL. 23	出土遺物 I	
PL. 24	出土遺物 II	
PL. 25	(1) 第130次西側調査区全景 (東から)	(2) 第130次西側調査区全景 (北から)

PL. 26	(1) 1号溝（東から） (3) 2号防空壕（東から）	(2) 1号防空壕（東から） (4) 3号防空壕（南から）
PL. 27	(1) 1号井戸（北から） (3) 出土遺物	(2) 2号井戸（北から）
PL. 28	(1) 調査区全景（西から） (3) 1号溝（北西から）	(2) 1号建物（北から）
PL. 29	(1) 2号溝（東から） (3) 出土遺物	(2) 4号溝（北から）

表 目 次

	本文頁
tab. 1 昭和60~63年度発掘調査一覧表	9・10
tab. 2 第100次調査掘立柱建物・櫛列一覧表	31
tab. 3 第134次調査掘立柱建物一覧表	86

付 図 目 次

- I 有田・小田部地区各調査地点配置図 No. V (1/1,000)
 II 第100次・134次調査周辺の調査地点構造配置図 (1/300)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市近郊の農村地帯であった有田・小田部の台地上には、有田地区、小田部地区、南庄地区の3つの集落が存在している。近年、202号線バイパスが西へ延長した事と、昭和57年の市営地下鉄の開通等の影響を受け、専用住宅地帯から高層住宅地帯へと変貌しつつあり、過日の農村の面影はない。

有田遺跡の発掘調査は昭和50年度から国庫補助事業として出発したが、昭和52年度からは1,000m²以下の小規模開発に対処している。昭和50年度～昭和56年度までの開発傾向は、専用住宅が圧倒的に多かったが、昭和57年～昭和60年度迄の開発傾向は専用住宅が減少し、高層の共同住宅、賃貸倉庫、店舗、分譲住宅などの大規模化の傾向を示している。昭和61年から63年度は金利の低下に伴い、全体的に開発件数が増加している。昭和63年度までの調査件数は148件である。この内には学校建設、下水道事業、市営住宅建設などの公共事業も含まれている。

昭和63年度の発掘件数は12件で、昭和63年4月11日～平成元年3月31日まで行った。

本書では、昭和60年度の第100次、103次調査、昭和62年度の第130次、134次調査を報告する。

(昭和60年度発掘調査) 頃の数字は各年度の調査順位を示す。

- | | | |
|--------------------------------|-------------------------|-----------|
| 1. 第100次 福岡市早良区有田2丁目13-2, 13-4 | 面積 671m ² | 申請者 松尾 熊夫 |
| 4. 第103次 福岡市早良区小田部3丁目3-14 | 面積 501.76m ² | 申請者 毛利 保人 |

(昭和62年度発掘調査地)

- | | | |
|---------------------------------|-------------------------|-----------|
| 12. 第130次 福岡市早良区小田部2丁目18, 5-2 | 面積 345.44m ² | 申請者 吉田 泰三 |
| 16. 第134次 福岡市早良区有田2丁目12-3, 12-4 | 面積 433.44m ² | 申請者 坂口 征機 |

(昭和63年度発掘調査地)

- | | | |
|----------------------------|-------------------------|-----------|
| 1. 第136次 福岡市早良区有田2丁目22-31 | 面積 500m ² | 申請者 坂口 充 |
| 2. 第137次 福岡市早良区有田1丁目8-4 | 面積 162m ² | 申請者 東島 一也 |
| 3. 第138次 福岡市早良区小田部1丁目20-4 | 面積 826.32m ² | 申請者 真鍋 栄一 |
| 4. 第140次 福岡市早良区有田1丁目29-10 | 面積 155m ² | 申請者 三苦 健太 |
| 5. 第141次 福岡市早良区有田1丁目33-6 | 面積 260m ² | 申請者 高田 政美 |
| 6. 第142次 福岡市早良区小田部5丁目17-10 | 面積 795m ² | 申請者 毛利 三男 |
| 7. 第143次 福岡市早良区小田部5丁目73-74 | 面積 568m ² | 申請者 守田 敏行 |
| 8. 第144次 福岡市早良区有田1丁目25-4 | 面積 429m ² | 申請者 牧谷 廣子 |
| 9. 第145次 福岡市早良区小田部2丁目90 | 面積 682m ² | 申請者 坂下 良一 |
| 10. 第146次 福岡市早良区有田1丁目32-6 | 面積 237m ² | 申請者 川野 俊彦 |

11. 第147次 福岡市早良区有田2丁目7-7 面積 739.60m² 申請者 高田 潔
12. 第148次 福岡市早良区有田1丁目18-4 面積 441m² 申請者 堀 正剛

2. 発掘調査の組織

(1) 昭和60年度発掘調査の組織 (100・103次)

調査主体 福岡市教育委員会
調査担当 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第2係
事務担当 埋蔵文化財課第2係長 飛高憲雄, (庶務) 岸田隆
発掘担当 山崎龍雄, 米倉秀紀
調査補助員 谷沢 仁 (現夜須町教育委員会)
調査協力者 合屋龍介, 深堀雅基, 馬場寿男, 明野隆, 藤岡毅雄, 高橋正弘, 松尾和雄, 高浜謙一, 神尾順次, 吉村哲美, 井上真寿美, 北原ヒサ子, 三島博子, 萩原幸江, 有富いつ子, 板倉文子, 井上紀世子, 緒方マサヨ, 金子由利子, 清原ユリ子, 後藤ミサヲ, 坂口フミ子, 佐藤テル子, 柴田勝子, 庄野崎ヒデ子, 土斐崎初栄, 徳永ノブヨ, 西尾たつよ, 平井和子, 堀川ヒロ子, 松井フユ子, 松井邦子, 松尾玲子, 宮原邦江, 萬スミヨ, 吉岡田鶴子

(2) 昭和61年度発掘調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会
調査担当 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第2係
事務担当 埋蔵文化財課第2係長 飛高憲雄, (庶務) 岸田隆
発掘担当 山崎龍雄, 米倉秀紀
調査補助員 大内士郎 (現今宿公民館主事), 平川敬治 (九州大学)
調査協力者 合屋龍介, 馬場寿男, 三浦義隆, 本多育夫, 松尾司, 穴井欽哉, 松尾和雄, 高浜謙一, 神尾順次, 吉村哲美, 有富いつ子, 板倉文子, 井上紀世子, 緒方マサヨ, 金子由利子, 清原ユリ子, 後藤ミサヲ, 坂口フミ子, 佐藤テル子, 柴田勝子, 庄野崎ヒデ子, 土斐崎初栄, 徳永ノブヨ, 西尾たつよ, 平井和子, 堀川ヒロ子, 松井フユ子, 松井邦子, 松尾玲子, 宮原邦江, 萬スミヨ, 吉岡田鶴子, 井上真寿美, 北原ヒサ子, 萩原幸江, 山田サヨ子, 青柳フミ子

(3) 昭和62年度発掘調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第2係
事務担当 埋蔵文化財課第2係長 飛高憲雄, (庶務) 岸田隆
発掘担当 山崎龍雄, 米倉秀紀, 小林義彦
調査補助員 平川敬治
調査協力者 松尾和雄, 高浜謙一, 神尾順次, 三浦義隆, 松尾司, 田中克昌, 金田英夫, 重光保宏, 真先修, 桃崎祐輔, 吉村哲美, 有富いつ子, 板倉文子, 井上紀世子, 諸方マサヨ, 金子由利子, 清原ユリ子, 後藤ミサヲ, 坂口フミ子, 佐藤テル子, 柴田勝子, 庄野崎ヒデ子, 土斐崎初栄, 德永ノブヨ, 西尾たつよ, 平井和子, 堀川ヒロ子, 松井フユ子, 松井邦子, 松尾玲子, 宮原邦江, 萬スミヨ, 吉岡田鶴子, 河津玉枝, 外本亜希, 織加知子, 田中智子, 德永亜希, 青柳フミ子

(4)昭和63年度発掘調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会
調査担当 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第2係
事務担当 埋蔵文化財課第2係長 飛高憲雄, (庶務) 岸田隆
発掘担当 山崎龍雄, 小林義彦, 加藤良彦
調査補助員 平川敬治, 梶村嘉長
調査協力者 松尾和雄, 高浜謙一, 神尾順次, 三浦義隆, 吉村哲美, 佐伯鐵志, 原田圭助, 黒田和生, 清口武司, 潤戸啓治, 百武義隆, 英豪之, 青柳フミ子, 有富いつ子, 板倉文子, 井上紀世子, 諸方マサヨ, 金子由利子, 清原ユリ子, 後藤ミサヲ, 佐藤テル子, 坂口フミ子, 柴田勝子, 庄野崎ヒデ子, 德永ノブヨ, 土斐崎初栄, 西尾タツヨ, 平井和子, 堀川ヒロ子, 松井フユ子, 松井邦子, 松尾玲子, 宮原邦江, 山田サヨ子, 吉岡田鶴子, 萬スミヨ, 坂田セイ子, 柴田常人, 舎川春江, 松尾キミ子, 松尾鈴子
資料整理 平川敬治, 池田礼子, 井上マツミ, 内尾トミ子, 岡根なおみ, 小金丸わかば, 永井和子, 仲前智江子, 松下節子, 吉田祝子, 外本亜希(熊本大学), 野田純子(熊本大学)

以上のはか、発掘調査、資料整理期間中、土地所有者の方々あるいは多くの地元の方々から多大な援助をいただいた。これらの方々に、末筆ながら深くお礼申し上げる次第です。

第2章 遺跡の立地と調査の概要

1. 立 地

福岡市早良区有田・小田部・南庄の位置する台地は、室見川の開折によって形成された早良平野のはば中央に位置し、標高15m前後を測る独立中位段丘である。台地の形成は洪積世に位置づけられ、八女粘土・鳥栖・新期ロームの層序をなしている。台地は主軸を南北方向に向いて、南北の長さ約1km、最大幅約0.7kmを測り、北へ穏やかに傾斜している。旧地形では有田1～2丁目を最高所にして標高15mを測り、周辺水田面との比高差は約10mを測っていたが、現在では沖積化のため5～7mの比高差を測る。台地の西側に室見川が、東側に金屑川が北流しているため台地の縁辺は浸蝕を受け、小断崖を形成している。また、台地内に深く切り込んだ比較的浅く、穏やかな谷も幾つか存在するため台地は北方向に八ツ手状に分岐している。この台地上には有田・小田部・南庄の3つの集落が形成されているが、近世の住宅化はその界線を失くしつつある。有田・小田部両地区は昭和40年代の初めに区画整理事業が行われ、著しい現状変更が行われている。

有田遺跡は台地上に分布する旧石器時代から近世までの複合遺跡である。旧石器のナイフ・ポイントは第6次調査などで検出されている。縄文時代には有田地区の西側に偏して中期～晚期の貯蔵穴群を検出している。弥生時代初頭のV字溝は第2次調査で検出しているが、その後の第45次・54次・77次・95次調査によって、この溝が西側の深い谷を取り巻くように巡るもので、長径300m、短径200mを測る楕円形の環濠になる可能性をもつてることがわかった。西端の七田前遺跡では縄文晚期の土器に大陸系の無文土器を伴っており、既に水出経営のあったことを示唆している。前期後半の集落は台地中央上に検出できる。この時期の溝は有田地区では台地縁辺をとり巻くように巡るが規模は不明である。この時期の甕棺墓の内、西福岡高校校庭内の甕棺より細形銅劍1本が出土している。その他には小田部地区から細形銅矛の出土も伝えられる。中期は前代を踏襲し、後半には第3次調査で検出した大型の円形住居跡群が出現する。青銅利器の鎧范片の出土や広形銅戈の出土も伝えられることから拠点的な集落の存在が考えられる。古墳時代の住居跡は台地上に広く検出しており、長期間に亘った集落が各所に存在しているが、4～5軒の単位集落を把握することが可能である。この時期には小田部地区に古墳が形成され、筑紫殿塚・松浦殿塚などの大円墳が存在する。石棺墓や粘土塚も検出しており、弥生時代からつづいた在地勢力の集約化が認められる。又、原遺跡は金屑川を挟んで有田台地の東側に位置しており、弥生時代から古墳時代の遺跡であるが、位置関係から考えて有田遺跡とは共同体的な機能を果たしていたものと思われる。律令時代はこの地区は早良郡田部郷に北定されるが、大型の柱穴をもつ建物群は有田地区に集中し、第56次・第57次・第77次・第78次・



1.西新町道路 2.藤崎通跡 3.坂道跡 4.原鉄橋遺跡 5.坂立遺跡
6.坂合橋遺跡 7.T字道跡 8.毛利港跡 9.原深町遺跡 10.名田七田前遺跡

Fig. 1 有田・小田部周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)

第82次・第101次・第107次調査では倉庫や居宅的な建物を検出した。更に、有田地区から連続する小田部の旧集落内からは第105・102次調査によって3本柱の構に囲まれた掘立柱建物の倉庫群を検出している。これらの建物群は古代官道に付設された額田駅が西方約2kmに位置することを考慮すれば郡衙規模の建物群と考えて良く、円面鏡や石帯・越州窯・長沙窯などの出土遺物を考え併せると、早良郡衙を推定することが可能である。古代・中世には西に下山門荘、南に野芥荘が存在するが、中世には在地領主の成長とともに名田や名屋敷が開発され、当該地域にも中園屋敷、淀姫屋敷などの名屋敷が形成される。中世後半には大内氏の早良郡代大村興景の知行地や、大友氏の被官であった小田部氏の里城一小田辺城などがある。有田地区にて検出した幅5mを測る空濠は「L字形」又は「コの字形」の郭を形成しており、範囲は約200m四方に及ぶ。大内氏関係の遺物や中国明代、李朝の陶磁器が出土しており、16世紀前～中頃の築城を考えることができる。中世の遺物には博多湾が貿易の良港として栄えたことや大内氏の朝鮮貿易とも関わっており、中国陶磁器や朝鮮陶磁器の出土が著しい。

(井沢)

2. 63年度調査の概要

昭和63年事業では弥生時代以降の遺構、遺物を検出した。発掘調査は昭和63年4月11日～平成元年3月31日まで行った。調査次数は第136次から第148次までで、第139次調査は有田・小田部地区の下水道建設に伴う調査である。以下第136次から146次迄の調査概要について述べる。

第136次調査 有田の集落地内の調査で、台地の西側縁辺に位置している。周辺の調査例は少なく、北東側100m程離れて第45次、南東側200m離れて第68次調査区があるにすぎない。今回の調査では弥生時代から近代迄の遺構、遺物が検出された。

遺構 弥生時代中期住居跡1棟、古墳時代

前期住居跡2棟、平安時代井戸1基、

中世末濠2条、防空壕1基

遺物 弥生時代中期土器から近世、近代の

日常雑器迄出土



第136次調査

第137次調査 有田1丁目地内の調査である。

周辺の調査例は多い。今回の調査区の両側は

第88次、132次調査が行われ、奈良時代の堅

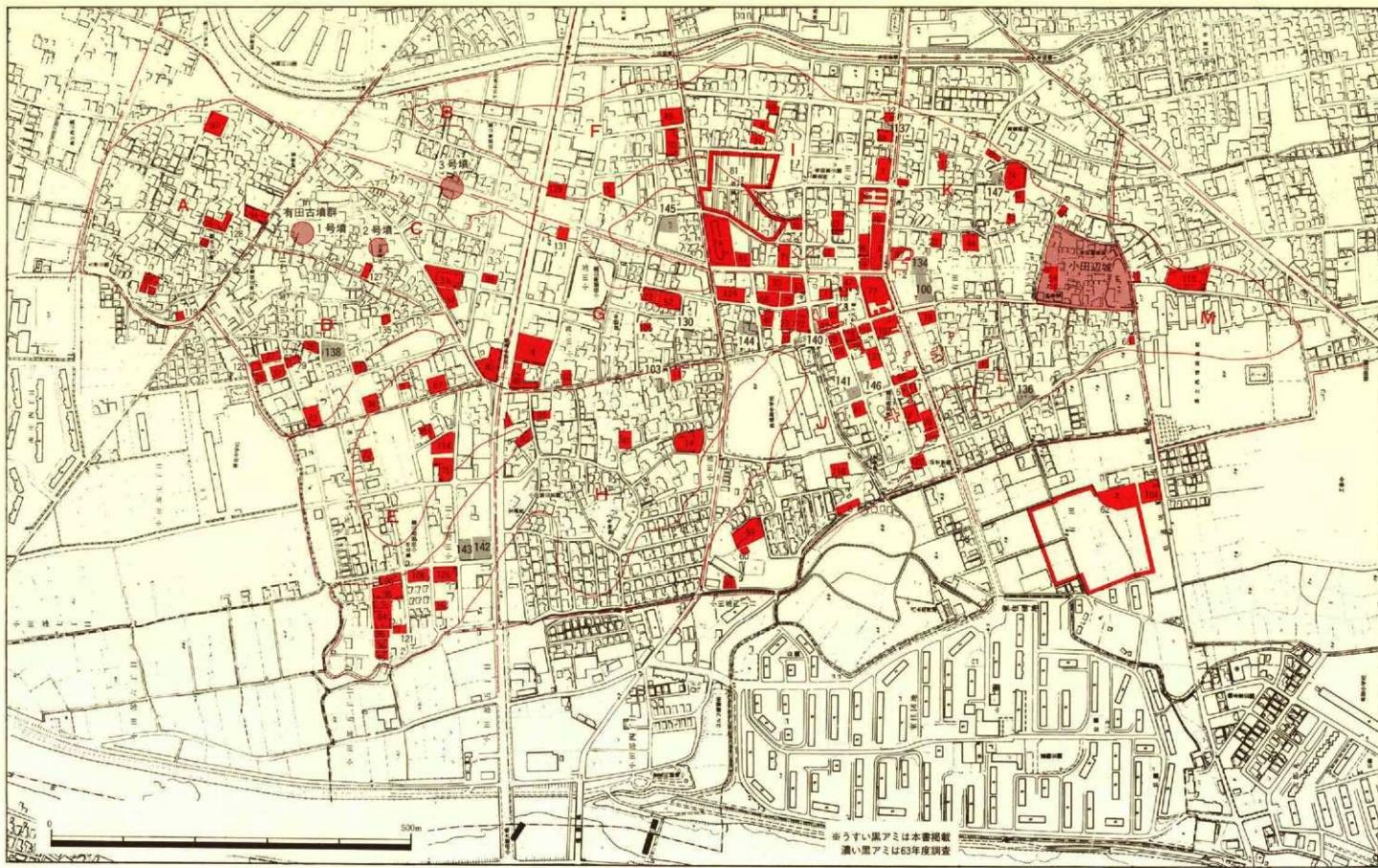


Fig. 2 有田・小田辺台地と発掘調査地点 (縮尺1/5000)

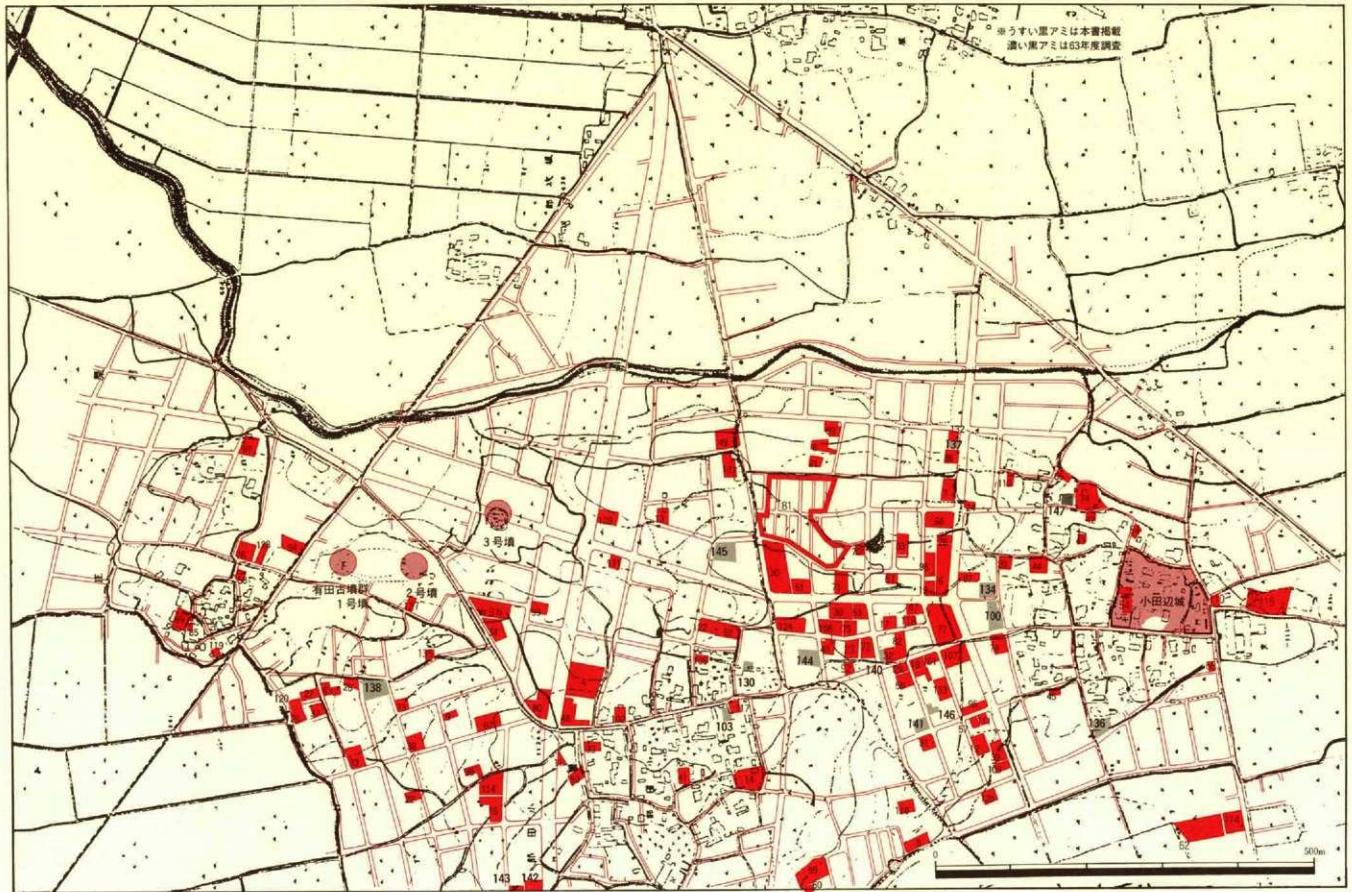


Fig. 3 有田・小田部台地の旧地形図 (縮尺1/5000)

穴住居跡や掘立柱建物が検出されている。今回の調査では弥生時代中期の遺物包含層や中世の柱穴、土坑を検出した。

遺構 弥生時代包含層、古墳時代から中世の掘立柱建物、土坑、柵列 2 条

遺物 弥生時代土器、石器、古墳時代土師器、須恵器、中世土師器、輸入陶磁器



第137次調査

第138次調査 小田部地区の調査である。周辺では比較的調査が行なわれておらず、弥生時代前半から中期初の豪棺墓群や集落、中世の掘立柱建物等が検出されている。今回の調査では弥生時代から中世にかけての遺構、遺物を検出した。

遺構 弥生時代住居跡 1 棟、土坑 1 基、古墳時代住居跡 2 棟、掘立柱建物 7 棟

遺物 弥生式土器、古墳時代土師器、須恵器、中世輸入陶磁器、土師器



第138次調査

第139次調査 有田・小田部地区下水道の調査。1 m 幅で、延長 2,800 m の部分を調査した。小田部 3 丁目、有田 2 丁目地区で、古墳時代から中世にかけての遺構を検出した。

遺構 古墳時代住居跡、柱穴、土坑、奈良時代から中世迄の柱穴、溝、土坑

遺物 弥生時代土器、古墳時代土師器、須恵器、中世土師器、陶磁器



第139次調査

第140次調査 有田地区の調査である。有田台地で最も調査が行われている地区で、今調査区の南北両側も調査されている。今回は南側の第32次調査区で検出した溝の続きを調査した。



第140次調査

遺構 中世末溝 2 条、土坑 1 基、井戸 1 基
遺物 非常に少ない。古墳時代から中世の
陶磁器



第141次調査

第141次調査 有田地区の調査である。調査区西側の第31次調査区では古墳時代後期の堅穴住居跡が検出されている。今回の調査では古墳時代の住居跡、柱穴、土坑を検出した。

遺構 古墳時代前期から後期住居跡 6 棟、
掘立柱建物 1 棟
遺物 古墳時代土師器、須恵器



第142次調査

第142次調査 小田部 5 丁目地内の調査である。周辺の調査では台地の縁辺にそって古墳時代前期から後期にかけての集落が検出されている。今回の調査でも古墳時代前期から後期にかけての住居跡、中世末の濠を検出した。

遺構 古墳時代住居跡 5 棟、溝 1 条、中世
末溝 2 条、土坑
遺物 古墳時代土師器、須恵器、滑石製玉
類、中世土師器、須恵器、輸入陶磁器



第143次調査

第143次調査 第142次調査の北側である。台地の縁辺にそって弥生時代堅穴住居跡、古墳時代堅穴住居跡、第142次地点から続く濠を検出した。

遺構 弥生時代中期円形住居跡 2 棟、土坑
4 基、古墳時代前期住居跡 5 棟、後期
住居跡 4 棟、溝 1 条、土坑 1、中世末
溝 3 条、土坑 7 基
遺物 弥生式土器、石器、古墳時代土師器、
須恵器、滑石製玉類、鉄劍、中世土師
器、輸入陶磁器

第144次調査 有田1丁目の調査である。周辺は調査がよく行われており、古墳時代の竪穴住居跡群や、奈良時代の溝、中世末の濠などが調査されている。今回の調査では柵列や柱穴が検出された。

遺構 柵列1条、掘立柱建物1棟

遺物 古墳時代土師器、須恵器

第145次調査 小田部地区の調査である。台地の先端にあり、両側には谷が入り込む。第3次調査の北側にあたる。第3次調査では弥生時代から古墳時代にかけての住居跡群や、平安時代の大溝などを調査している。今回の調査地点でも弥生時代前期から古墳時代にかけての集落が検出された。遺物は弥生時代から近代迄の各時代のものが出土したが、量は少ない。

遺構 弥生時代前期から中期後半竪穴住居跡2棟、古墳時代竪穴住居跡1棟、掘立柱建物5棟

第146次調査 有田地区の調査で、台地の最高部に位置する。この一帯周辺は最も調査が行われている地域で、弥生時代前期の環溝や古墳時代全般による集落跡、律令時代の大型建物群が検出されている。今回の調査区は全体に削平によって遺構の残りは悪かったが、古墳時代後半頃と思われる柵列を1条と近代の農道と畝状遺構を検出した。遺物は古墳時代から近代迄のものが少量出土した。

遺構 古墳時代後期頃の柵列1条

tab. 1. 昭和60~63年度発掘調査一覧表

区域名	測量番号	地点名	調査場所(地番)	調査面積	調査期間	特 標	文 献
第100次	8530	K	平良田庄原3丁目8~2	67.4m ²	昭和60年8月23日~10月21日	多段階の複雑な竪穴、柱穴4基。佐佐木氏代、中村義則の柱穴跡1基。古墳時代初期の住居跡2基、土手の柱穴跡複数個。李家の遺構1基。井戸1基。中村家1戸、土屋家1戸	参考
+101+	8531	J	+ 各田1丁目32~3	23.5m ²	+ 9月4日~10月1日	古墳時代の竪穴住居跡1基。中村義則の柱穴跡1基、中村山田洋蔵3基、福永義徳1基、土屋義徳1基	③
+102+	8532	G	+ 小田町2丁目54	330m ²	+ 9月26日~11月7日	繩文時代の竪穴住居跡1基、櫛1本	—
+103+	8533	H	+ + 3丁目3~14	50.0m ²	+ 10月4日~10月22日	古墳時代の竪穴住居跡1基、溝2本。近藤洋介1基	参考
+104+	8534	L区外	+ 葉原町6番地180~1	544m ²	+ 10月1日~10月30日	竪穴式住居跡の柱穴跡	—
+105+	8535	G	+ 小田町2丁目18~8	660m ²	+ 11月26日~11月29日	古墳時代後期柱穴跡1基。浜大通塚1基	③
+106+	8536	E	+ + + 168	20.0m ²	+ 11月6日~11月24日	古墳時代後期柱穴跡1基。中村源三1基	—
+107+	8537	J	+ 有田1丁目31~1号	99.5m ²	+ 61年4月24日~8月1日	古墳時代後期柱穴跡1基。中村源三1基。中村義徳1基	—
+108+	8538	J	+ + + 22~194	78.7m ²	+ 5月8日~6月3日	古墳時代後期柱穴跡1基。中村源三1基。中村義徳1基。益川利行1基。中村義徳1基。中村義徳2基。近北川義徳5基	参考
+109+	8539	J	+ + + 32~8	29.0m ²	+ 5月30日~5月15日	古墳時代ビット跡	③
+110+	8540	M	+ + + 3丁目71	23.0m ²	+ 5月28日~6月3日	古墳時代柱穴	—
+111+	8541	J	+ + 1丁目32~3	13.0m ²	+ 7月11日~2月29日	古墳時代柱穴跡1基	③
+112+	8542	K	+ + 2丁目5~2	26.4m ²	+ 10月21日~11月23日	竪穴柱跡3基(うち2基)。平安時代後期	—
						宇世七四四	

113	8646	J	* * 1丁目25-9	166m ²	* 11月5日～11月29日	中世後半2条
114	8654	E	* 小田原5丁目51-2外	1,028m ²	* 11月27日～62年1月26日	奈生時代中期小住居跡1軒、古墳時代中期六 角2軒跡7棟、土塁2基
115	8655	M	* 七至3丁目8-53	860m ²	* 62年2月4日～5月27日	奈生時代土塁、井戸、土塁施設遺構
116	8656	J	* 小田原3丁目198-1内	560m ²	* 2月9日～3月25日	古墳時代初期窓穴柱孔跡1、同時期窓穴柱孔 跡1、複合施設立柱跡1
117	8657	H	* * + 3-14	218m ²	* 3月2日～3月25日	井戸3基、墓1ヶ
118	8659	(下水道)	* 有田1-2丁目	2,423m ²	* 9月28日～3月31日	
119	8701	A	* 東至3丁目26-1外	202m ²	* 4月21日～5月19日	奈生時代の櫛状施設、土塁施設、江戸時代土 塁跡
120	8705	J	* 有田1丁目38-3外	77m ²	* 5月14日～5月21日	奈生時代初期窓穴柱孔跡2条、奈三時代後期横 窓1、柱1本、中世窓2条、 複合施設物1棟
121	8706	E	* 小田原5丁目54-2	165m ²	* 5月20日～6月13日	古墳時代後期窓穴柱孔跡1、中世窓2条、 複合施設物1棟
122	8707	G	* * 2丁目11-16	375m ²	* 5月25日～6月26日	古墳時代後期の柱跡、奈良時代の板瓦施設 2棟
123	872	(下水道)	* 有田・小田原	11,600m ²	* 5月20日～63年3月31日	
124	8713	J	* 有田1丁目34-4	650m ²	* 6月23日～9月26日	奈生時代・古墳時代の窓穴柱孔跡7棟、古墳 時代・中世の墓1基跡、奈良時代の窓孔、 平安時代の窓1本、井戸2ヶ
125	8716	E	* 小田原5丁目172外	722m ²	* 6月29日～10月7日	奈生時代後期土塁1、古墳時代中期窓穴柱 孔跡1、複合施設物2棟
126	8724	D	* * 1丁目34-9	111m ²	* 8月4日～8月26日	奈生時代後期・中世窓跡4ヶ、中世窓2条 奈生時代後期・中世窓跡1軒、古墳時代後期窓1軒、 窓2条
127	8725	C	* * 418-1	180m ²	* 9月17日～10月9日	
128	8730	A	* 有田3丁目115	213m ²	* 9月28日～10月25日	奈生時代後期土塁1軒、古墳時代後期横窓1 軒1基、柱2条
129	8735	F	* 小田原2丁目38	386m ²	* 10月27日～11月26日	古墳時代窓の柱孔2条
130	8739	G	* * 185-2	292m ²	* 11月23日～12月24日	中世窓2条、近世柱跡の柱孔1、櫻井1
131	8745	G	* * 131	138m ²	* 12月16日～1月6日	古墳時代後期窓穴柱孔跡1棟
132	8749	I	* 有田1丁目8-3	200m ²	* 63年1月25日～2月5日	奈良時代平安時代の窓穴柱孔跡1、土塁1
133	8750	J	* * 32-4	439m ²	* 1月26日～2月31日	奈生時代初期窓2条、中世窓
134	8752	D	* 有田2丁目15-3-4	433m ²	* 3月3日～3月24日	古墳時代前窓2条、屋2軒跡
135	8753	K	* 小田原1丁目361	290m ²	* 3月7日～3月24日	
136	8830	L	* 有田2丁目22-31	460m ²	* 4月11日～5月30日	奈生時代包糞層、古墳時代から中世の窓穴柱 孔跡、柱2条
137	8834	I	* 有田1丁目8-4	162m ²	* 4月25日～5月6日	奈生時代包糞層、古墳時代から中世の窓穴柱 孔跡、柱2条
138	881	D	* 小田原1丁目204	811m ²	* 5月20日～6月29日	奈生時代中期窓穴柱孔跡1軒、中世 古墳時代後期窓穴柱孔跡2軒、複合施設物7棟
139	8812	(下水道)	* 有田・小田原2点	2,800m ²	* 4月27日～6月3日	
140	8813	J	* 有田1丁目29-10	540m ²	* 5月25日～6月16日	古墳時代後期から後期竪窓6条、横窓 2条、土塁
141	8822	J	* * + 35-6	230m ²	* 6月20日～7月16日	古墳時代後期から後期窓穴柱孔跡1軒、横窓1条、 中世窓2条、土塁
142	8836	E	* 小田原5丁目17-10	759m ²	* 9月14日～11月	古墳時代後期から後期窓穴柱孔跡1軒、横窓1条、 中世窓2条、土塁
143	8836	E	* * + 73-74	568m ²	* 9月12日～11月25日	奈生時代窓1条、土塁
144	8844	J	* 有田1丁目25-4	459m ²	* 12月8日～64年1月	奈生時代前窓1条、土塁
145	8844	E	* 小田原2丁目190	662m ²	* 1月13日～3月13日	奈生時代前窓から中期後半窓穴柱孔跡2軒、奈生 時代から古墳時代の窓穴柱孔跡2条
146	8853	J	* 有田1丁目2-6	227m ²	* 1月24日～3月3日	古墳時代後期から古式の櫛孔1条
147	8854	J	* * 2丁目7-7	781.66m ²	* 1月24日～3月15日	古墳時代後期から古代の櫛孔2条、中世窓2条
148	8861	I	* * 1丁目8-4	441m ²	* 2月22日～3月13日	中世窓1条と柱、土塁

文献

- ① 福岡市教育委員会「有田・小田部」第7集 1986
- ② 福岡市教育委員会「有田・小田部」第8集 1987
- ③ 福岡市教育委員会「有田・小田部」第9集 1988

第3章 調査の記録

1. 第100次調査 (調査番号 8510)

1) 調査地区の地形と概要

調査地は早良区有田2丁目8番2号に所在し、対象面積は671m²、調査面積は650m²である。

当該地は有田台地の最高所に位置し、標高約13mを測る。地内はほぼ平坦で、東・北・西方向へ50m前後行くと下り坂になる。調査前は畠で、共同住宅の建設に伴って、昭和60年8月23日から10月27日まで発掘調査を実施した。

周辺は第77次、107次、134次、78次を始め多くの調査が行なわれ、重要な遺構群が検出されている。検出されている主な遺構群は、弥生時代初頭の環濠集落、古墳時代の竪穴住居跡群、古墳時代後期から奈良時代の大形掘立柱建物、多くの濠を伴なう中世末の城跡などで、今回の調査でもこれらに間連する遺構群を検出した。

遺構面は橙色ローム（鳥栖ローム）で、表上下20~80cmで検出した。遺構の残存状況から、1m近くは既に削平されているものと推定できる。検出した遺構は弥生時代の円形竪穴住居跡1軒と貯蔵穴1基、古墳時代の方形竪穴住居跡3軒、各時期の土坑・土壙16基と掘立柱建物20棟、中世の井戸1基、中世を主とする溝8条などである。その他に多くのピット群と、近世か近代頃と思われる暗渠状の跡をつめた狭い溝（敷石遺構）2条を検出した。これらの時期の遺物の他に、先土器時代と古代の遺物がごく少量出土した。
(米倉)

2) 検出遺構

住居跡 (SC)

弥生時代前期の円形竪穴住居跡1軒と、古墳時代前期の方形竪穴住居跡3軒を検出した。古墳時代の住居はいずれも全形は不明である。

1号住居跡 (Fig. 5, PL. 4)

調査区北西側の境界で検出した。北半は調査区外に伸びる。南壁の長さ3.84m、壁の残存高10cmを測る。東側壁面沿いにベッド状遺構がある。ベッドの平面形は二段に曲がり、従来にならぬ形態であるが、壁とベッドに沿って検出された壁溝がベッドの一段目のコーナー部分までしかないことから、掘りまちがいの可能性もある。ベッドは遺構検出面とほぼ同じ高さで、床面からベッドまでの高さ約10cmを測る。壁溝は西壁沿い、住居の南東角からベッドの南辺部分にあり、幅6~9cm、深さ3~5cmを測る。住居の中央西側に焼土がある。主柱穴は全形がわから

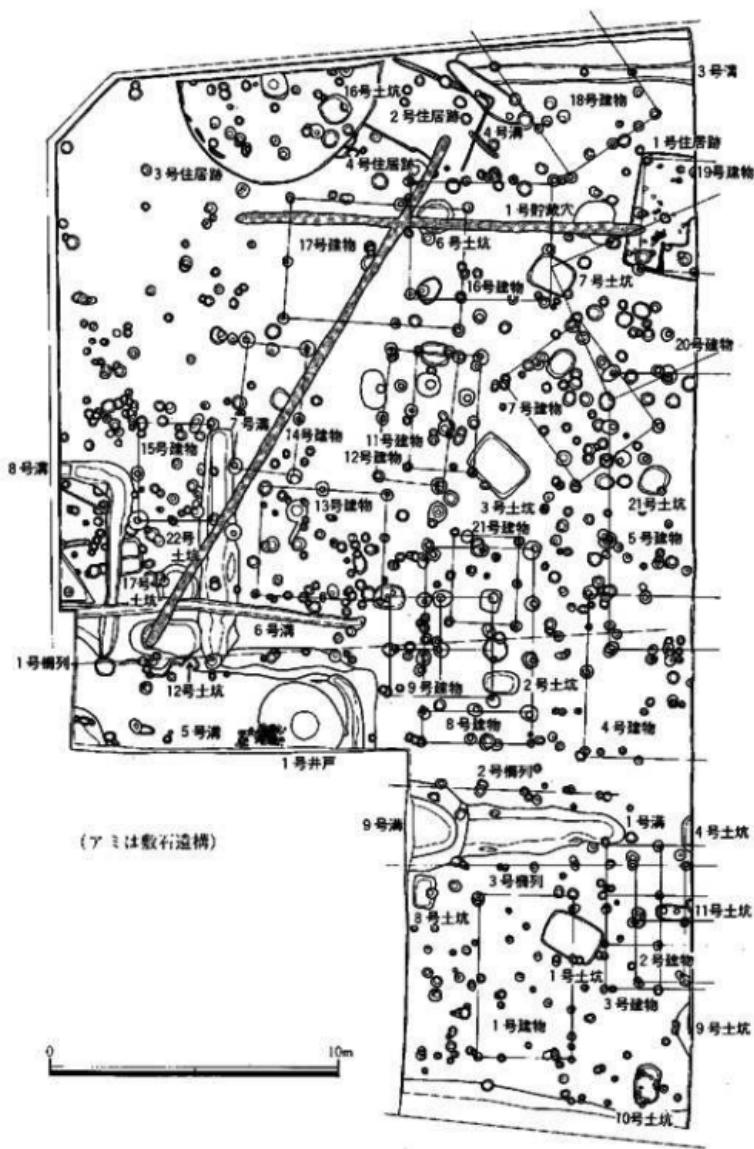


Fig. 4 第100次調査遺構配置図 (縮尺1/200)

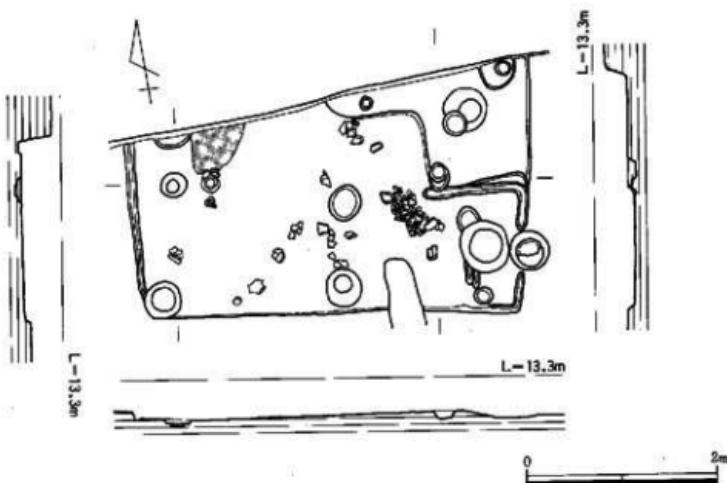


Fig. 5 1号住居跡 (縮尺1/60)

らないため不明である。住居内からは弥生時代前期と古墳時代前期の遺物が出土し、床面直上で布留式期の甕・壺・高杯などが出上した。

2号住居跡 (Fig. 6, PL. 4)

調査区西壁近くで検出した。壁溝・焼土などのみが遺存し、住居の壁は削平のため消滅している。壁溝も約半分が残っているのみで住居の全形はわからないが、入り口の部分を除いてベッドが全周し、入り口部分に小土坑を有するタイプと推定した。推定の規模は6.2m×5.0mを測る。壁溝の幅は3~18cm、深さ2~5cm、入り口部分と思われる土坑の長さ約70cm、幅約65cm、深さ52cmを測る。西側壁溝近くには焼土が認められた。主柱穴は焼土の南北にある2つのピットと思われ、ピットの径29~36cm、深さ38~50cmを測る。明確に伴う遺物はほとんどなく、3号住居跡内から出土した古墳時代の遺物が2号住居と後述する4号住居に伴なうものと考えられるが、どちらに伴なうかはわからないものが多い。

3号住居跡 (Fig. 7, PL. 5)

調査区西壁近くの2号住居跡の南で検出した。弥生時代の円形竪穴住居で、調査区外に続く。南北方向の直径7.13m、残存の壁高約17cmを測る。住居の中央には0.9×0.97m、深さ55cmの土坑がある。そのまわりに3つの小ピットがあり、調査区外にもう1つある可能性も考えられる。土坑内には焼土や炭化物はなかった。柱穴は中央の土坑を中心に円形に配置される。二列

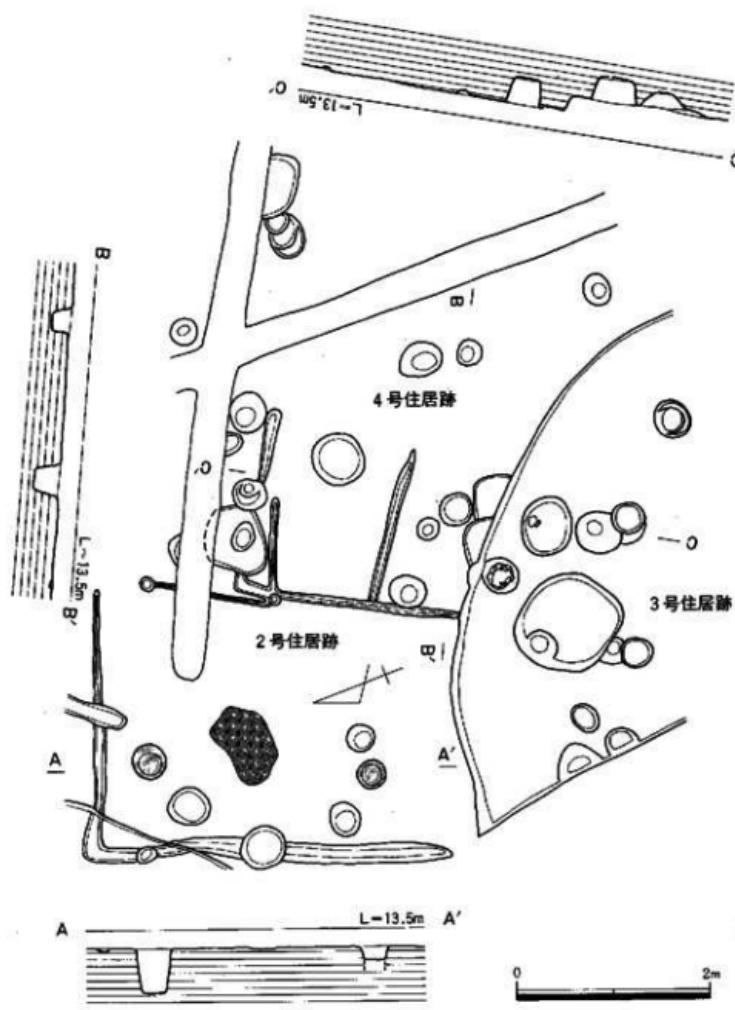


Fig. 6 2・4号住居跡 (縮尺1/60)

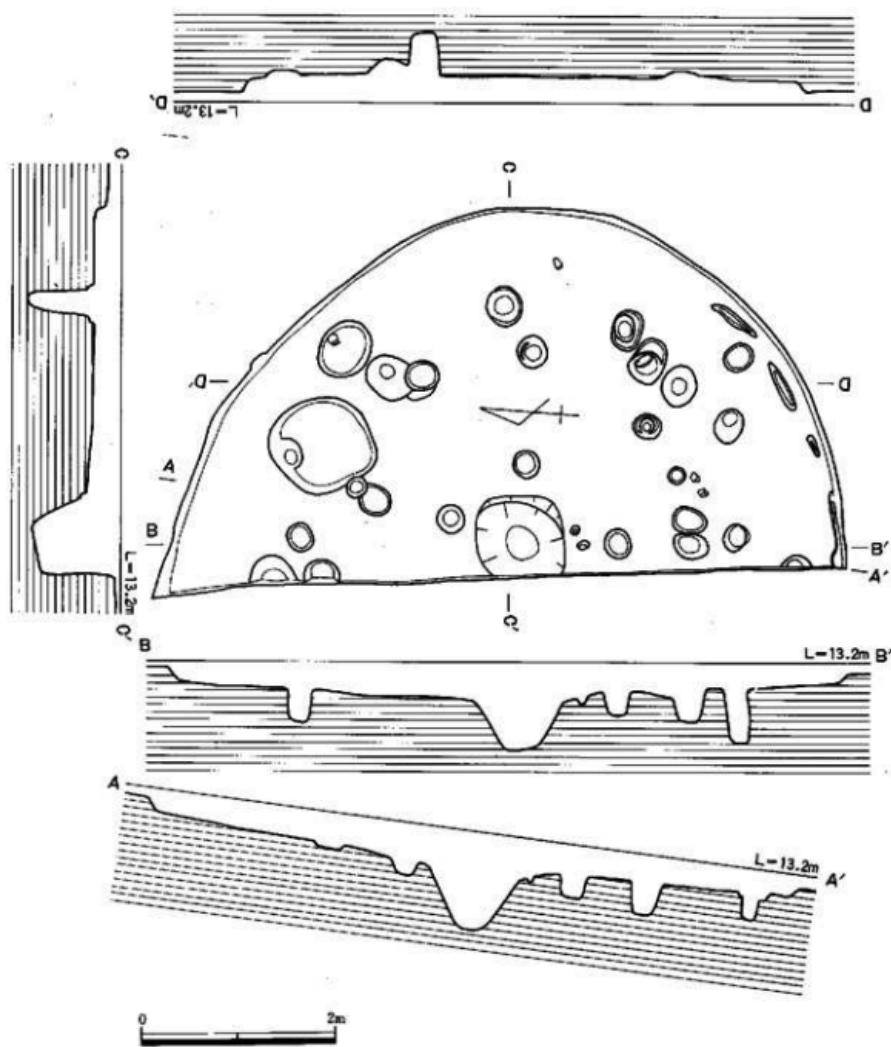


Fig. 7 3号住居跡 (縮尺1/60)

あるものと思われ、建て替えの可能性がある。住居の北側の壁が直線的になっているのは建て替えの結果かも知れない。柱穴間の直線距離は内側列が1.25~1.32m、外側列が1.32~1.62m、柱穴の直径30~42cm、深さ30~56cmを測る。南側の壁面沿いで、断続的に焼溝らしき小溝を検出した。出土遺物は弥生式土器・石器などがコンテナ3箱程度出土したが、土器片は小片が多く、復元できるものは少ない。

4号住居跡 (Fig. 6, PL. 4)

2号住居と重複するように検出したが、2号住居と同様、壁溝のみ検出のため、切り合い関係はわからなかった。検出した壁溝は東西方向の二本の壁溝と、北側の壁溝の西端から南に伸びる壁溝のみで、全形は不明である。焼土もなく、主柱穴は可能性があるビットはあるものの、どれとは決めがたい。壁溝の幅5~15cm、深さ3~7cmを測る。16号土坑は4号住居に伴なう可能性もある（入り口部の小土坑か？）。出土遺物はほとんどないが、2号住居同様3号住居内から出土した古墳時代遺物が2、4号住居に伴なうと考えられ、特にFig. 20~38の小形丸底壺は4号住居に伴なうものと考えられる。

(米倉)

土坑 (SK)

土坑は1号~22号の番号をつけたが、5号、13・14号、18・20号は、擾乱や柱穴であったこと、15号は3号住居に伴なうことから、欠番とした。

1号土坑 (Fig. 8, PL. 6)

調査区東側で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ1.92m、幅1.46mを測る。床面は東側に下がり、最深部の深さ15cm、最浅部の深さ5cmを測る。覆土は黒褐色粘質土で、遺物はビニール袋1袋程出土し、すべて弥生時代の遺物である。

2号土坑 (Fig. 8, PL. 6)

調査区中央付近で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ1.24m、幅0.79mを測る。断面形はⅢ状を呈すが、東壁のみは垂直に落ちる。深さ10cmを測る。覆土はレンズ状の堆積を成し、黒褐色粘質土を主体とする。土師器の高环片、黒曜石などが少量出土した。

3号土坑 (Fig. 8, PL. 6)

調査区中央付近で検出した。平面形は長方形を呈し、長さ2.05m、幅1.5mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ68cmを測る。覆土は3層に分かれ、暗褐色から黒褐色粘質土を主体とする。壁ぎわのみレンズ状堆積で、全体的には水平に近い堆積である。遺物は弥生時代前期の土器、黒曜石がビニール袋1袋程出土したが、小片が多い。

4号土坑 (Fig. 8, PL. 6)

調査区東側の北壁部分で検出した。半分以上は調査区外に伸び、最長部の長さ1.3mを測る。掘り方は二段掘りで、東側に小さい段がつく。深さ23cmを測る。弥生式土器の細片と黒曜石が

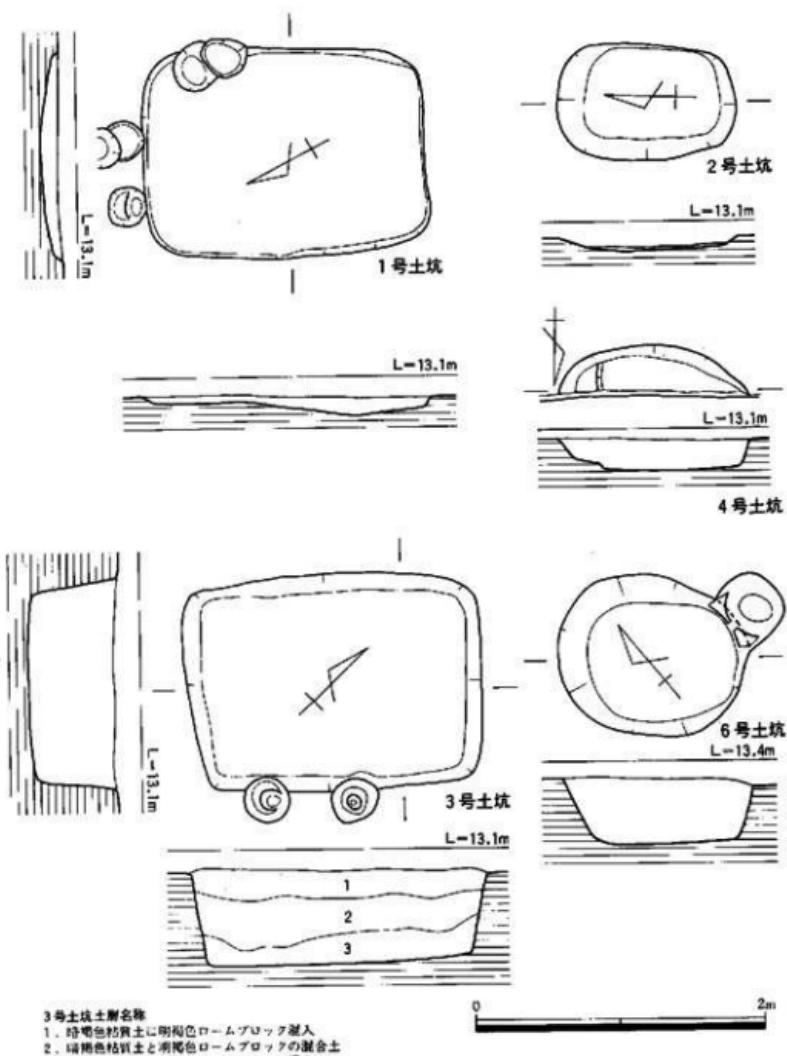


Fig. 8 1~6号土坑 (縮尺1/40)

少量出土した。

6号土坑 (Fig. 8, PL. 7)

調査区西側の2本の敷石造構が交差する付近で検出した。平面形は円形に近い梢円形を呈し、東側の一部をピットが切っている。長さ1.29m、幅1.02mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ47cmを測る。出土遺物は弥生式土器の小片と黒曜石が少量あるだけである。

7号土坑 (Fig. 9, PL. 7)

調査区北西側で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、長さ1.55m、幅1.23mを測る。断面形は箱形を呈し、深さ48cmを測る。北東隅をピットに切られる。覆土は黒褐色粘質土を主体に3層に分かれ、レンズ状堆積を成す。弥生式土器、黒曜石片がビニール袋1袋出土した。

8号土坑 (Fig. 9, PL. 7)

調査区東側の南壁近くで検出した。平面形は略長方形を呈し、北側壁面の一部をピットが切っている。長さ1.13m、幅0.74mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ26cmを測る。覆土は黒褐色粘質土を主体に2層に分かれ、上層はレンズ状の堆積を成している。出土遺物は少ない。

9号土坑 (Fig. 9, PL. 7)

調査区北東隅で検出し、大部分は調査区外に伸びる。調査北壁に接する部分の長さは1.95m、深さは72cmを測りさらに深くなる。覆土は暗茶褐色粘質土を主体にしている。出土遺物は土器片などが少量出土したのみである。全体の形状などから漆の立ち上がり部分の可能性がある。

10号土坑 (Fig. 9, PL. 8)

調査区東側で検出した。平面形はやや歪んだ隅丸長方形を呈し、長さ1.4m、幅0.9mを測る。ほぼ壁に沿った状態で人頭大の碟が配されている。断面形は浅い皿状を呈し、深さ28cmを測る。中世の土壤墓の可能性があると思われるが、削平がひどく、碟も動いているものもあり、明確ではない。出土遺物は土器片が少量出土しただけである。

11号土坑 (Fig. 9)

調査区北東隅で検出し、さらに調査区外に伸びる。現存部の平面形は隅丸長方形を呈し、現存長1.16m、幅0.53m、深さ21cmを測る。床面にピットが2つあり、直径15~21cm、深さ5~10cmを測る。覆土は暗茶褐色土で、少量の土器片が出土したのみである。

12号土坑 (Fig. 9, PL. 8)

5号溝西側で検出し、東壁を5号溝に切られる。平面形は長梢円形に近く、長さ2.6m、幅1.33m、深さ34cmを測る。覆土は暗茶褐色土で、弥生式土器片などがごく少量出土した。

16号土坑 (Fig. 10, PL. 8)

3号住居内で検出した。平面形は円形に近い隅丸方形を呈し、長さ1.14m、幅1.01m、深さ28cmを測る。北壁部分で径33cm、深さ25cmのピットがある。覆土は茶褐色粘質土で、出土遺物は土器片などが少量あるだけである。

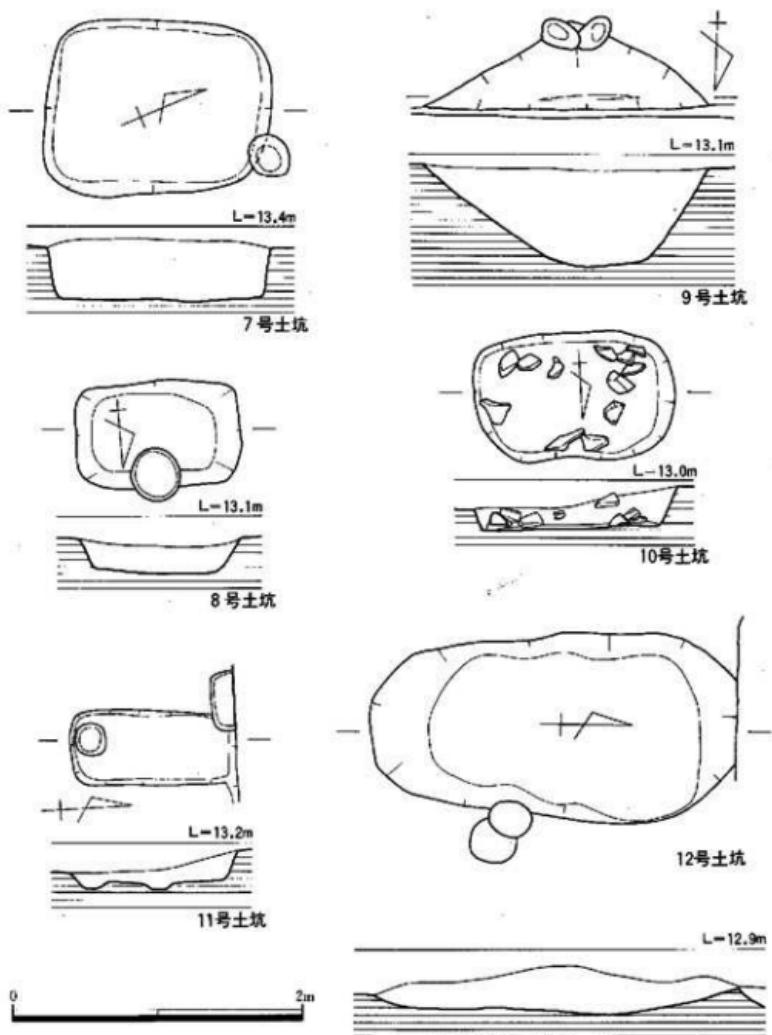


Fig. 9 7 ~ 12号土坑 (縮尺1/40)

17号土坑 (Fig. 10, PL. 8)

調査区北西側の7号土坑東側で検出した。平面形は楕円形、断面形は箱形を呈し、長さ1.04m、幅0.81m、深さ56cmを測る。覆土は3層に分かれ、暗褐色粘質土を主体にする。出土遺物は、土器片、黒曜石などが少量出土した。

19号土坑 (Fig. 10, PL. 9)

調査区北壁近くの3号土坑北側で検出した。南西隅をピットが切っている。平面形は隅丸長方形に近い形で、長さ1.02m、幅0.8mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ28cmを測る。遺物はごく少量の土器片などがある。

21号土坑 (Fig. 10)

調査区東南側で検出し、8号溝に切られている。現存長1.24m、幅0.84mを測る。二段掘りで、一段目の深さ16cm、二段目の深さ42cmを測る。覆土は褐色粘質土を主体とし、遺物は弥生式土器・黒曜石などが少量出土した。

22号土坑 (Fig. 10, PL. 9)

調査区南東側で検出した。6号溝と敷石連携に切られている。平面形は略楕円形を呈し、長径1.64m、短径1.45mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ53cmを測る。遺物は、少量の土器片などだけである。

(米倉)

貯蔵穴 (S U) {

1号貯蔵穴 (Fig. 11, PL. 9)

調査区北西側、1号住居跡の南で検出した袋状堅穴である。検出面の平面形は楕円形を呈し、長径1.44m、短径0.97mを測る。掘り方は途中でわずかに折れ曲がり、18~53cmオーバーハングする。床面はわずかに中央部分が低く、深さ1.26mを測る。床面は円形に近く、直径約2.15mを測る。覆土は黒褐色粘質土を主体とし、レンズ状の堆積を成す。出土遺物は弥生時代前期の土器・石器・黒曜石などがコンテナ1箱程出土した。

(米倉)

井戸 (S E)

1号井戸 (Fig. 11, PL. 10)

調査区東壁境界地にあり、一部分が境界外である。5号溝底面で検出し、5号溝より古い時期のものである。井戸掘方の平面形状は円形で、直徑は上面で2.88m、下面で2.10m、深さは3.1m以上で、湧水や壁の崩落の危険があったため完掘していない。掘方の中心よりやや北側に、直徑が上面で88cm、下面で85cmを測る円形の桶組の井筒が残っていた。桶組は3段迄確認したが、余り残りは良くない。1段30cmで、上面に行くにつれて外側に積み上げており、接合部には粘土で目張りを行っていた。井筒内と掘方の埋土はまったく異なっており、上面から井筒部

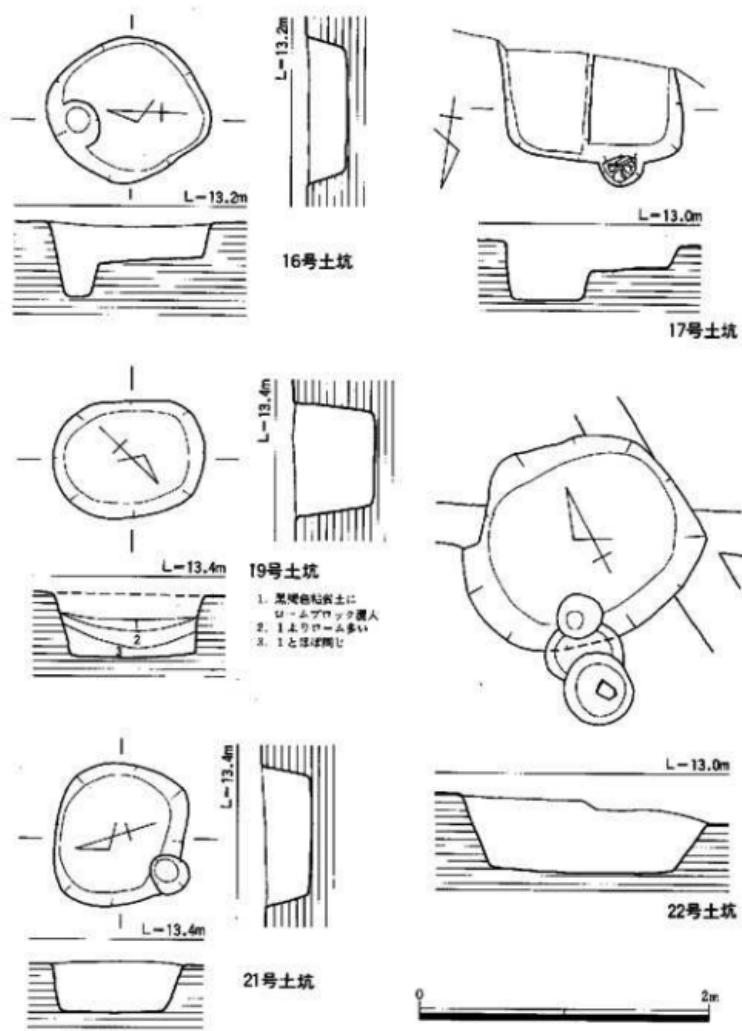


Fig. 10 16~22号土坑 (縮尺1/40)

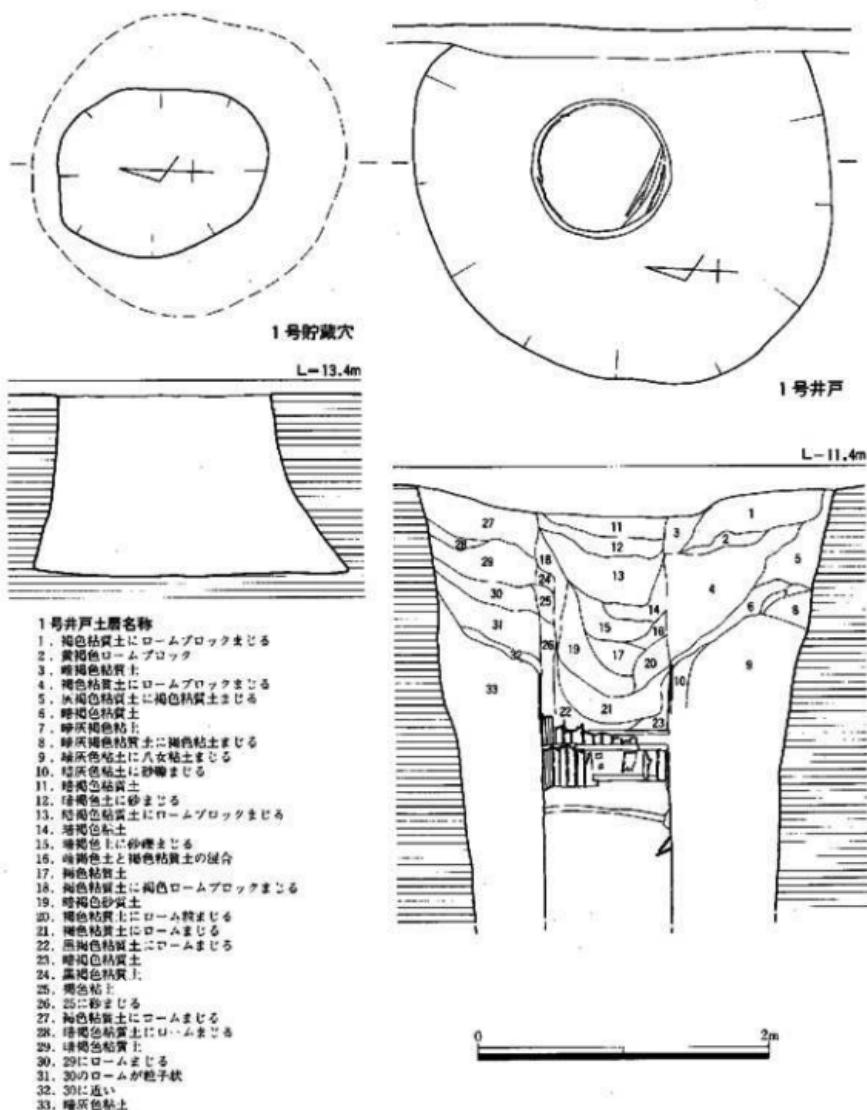


Fig. 11 1号貯藏穴・1号井戸 (縮尺1/40)

分が確認できる。井筒埋土は暗褐色から褐色粘質土で、下ほど粘性が強くなる。掘方は上面が暗褐色粘質土で地山ローム土を多く混入し、下層は暗灰色粘質土である。遺物は少なく、弦生式土器、土師器、須恵器、瓦質の摺鉢などの細片が出土している。井筒内からは木器や漆器碗が出土した。井戸上面の南側で検出された砾群は、井戸を埋めた後、軟弱な地盤を補強するために入れこんだものであろう。

(山崎)

掘立柱建物 (S B)

現場及び図上復元も含めて全部で20棟検出した。10号建物は欠番である。

1号建物 (Fig. 12, PL. 12)

調査区東側で検出した東西方向の主軸をN-88°30'-Eに取る1×2間の建物である。梁間全長3.3m(11尺)、桁行全長5.7m(19尺)を測る。柱穴はいずれも円形で、径20~40cm、深さ20~50cmを測る。埋土は黒色ローム混り土、又は暗褐色ローム粒子混り土で、遺物は焼上ブロックのみで、上器片はない。

2号建物 (Fig. 12, PL. 12)

主軸をN-86°-Eに取る東西方向の1×2間の建物である。梁間全長1.8m(6尺)、桁行全長4.05m(13.5尺)を測る。柱穴はいずれも円形で、径30~45cm、深さ20~40cmを測る。又根石をもつものもある。埋土はローム混り土、又は暗褐色ローム粒子混り土で、遺物は鉄滓が10点出土した。

3号建物 (Fig. 12, PL. 12)

調査区北壁ぎわで検出した主軸をN-88°-Eに取る、東西方向の3×1間以上の総柱の建物である。梁間全長4.95m(16.5尺)、桁行全長1.95m(6.5尺)以上を測る。柱穴は円形で、直径25~40cm、深さ8~50cmとバラツキがある。埋土は暗褐色ローム粒子混り土が主体で、遺物は上師皿片と思われるものが1点出土した。

4号建物 (Fig. 12, PL. 12)

北側境界地にかかる主軸を磁北に取る、南北(?)方向の2×2間以上の建物である。梁間全長5.70m(19尺)、桁行全長1.95m(6.5尺)以上を測る。柱穴はいずれも円形で、一部根石を持つ。柱穴径は30~45cmで深さは10~35cm位である。柱径は柱痕跡から20cm位と思われる。埋土は黒色ローム混り土又は暗褐色ローム粒子混り土である。土器の細片が出土した。

5号建物 (Fig. 12, PL. 12)

北側境界地で確認した大形の建物である。東西方向で主軸をN-88°-Eに取る。4号建物と重複する。調査区北側に伸びており、1以上×5間で、梁間全長1.65m(5.5尺)、桁行全長9.6m(32尺)を測る。柱穴はいずれも円形で、根石を持つものもある。直径は35~70cmと比較的大きく、深さも30~60cmを測り、柱径も柱痕跡から15~20cm位と思われる。埋土は黒色ロ-

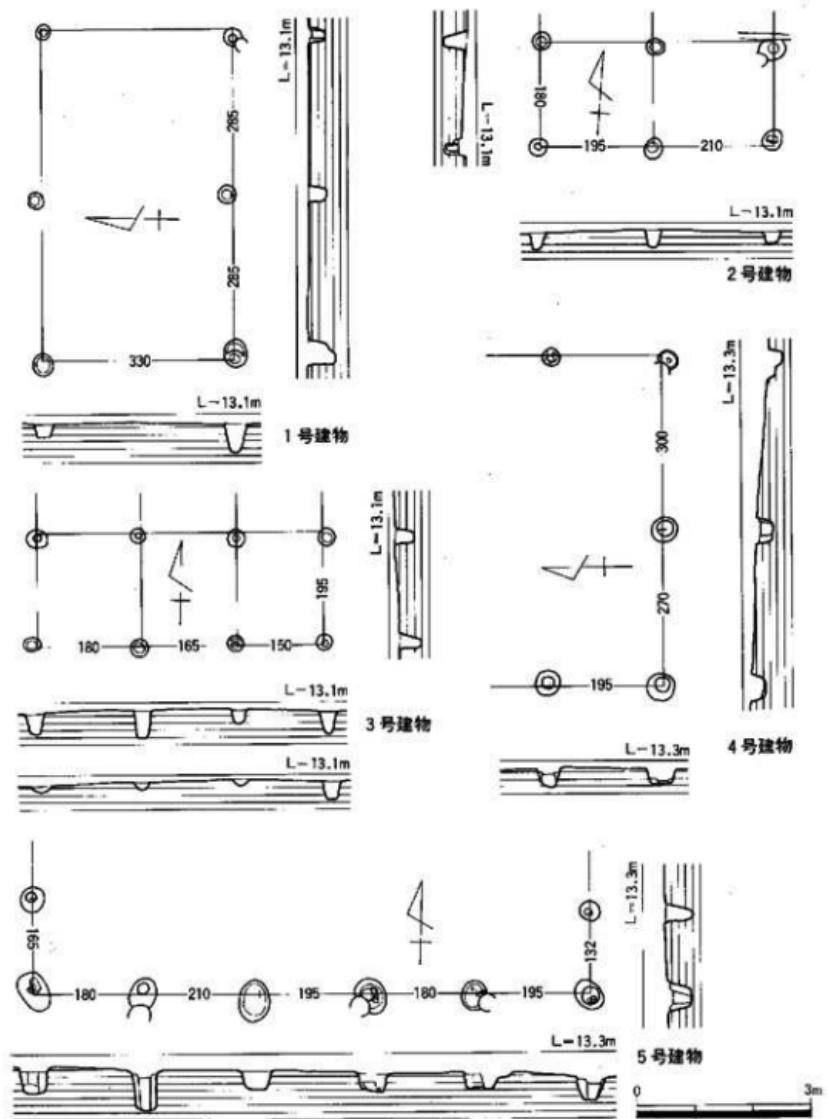


Fig. 12 1~5号建物 (縮尺1/100)

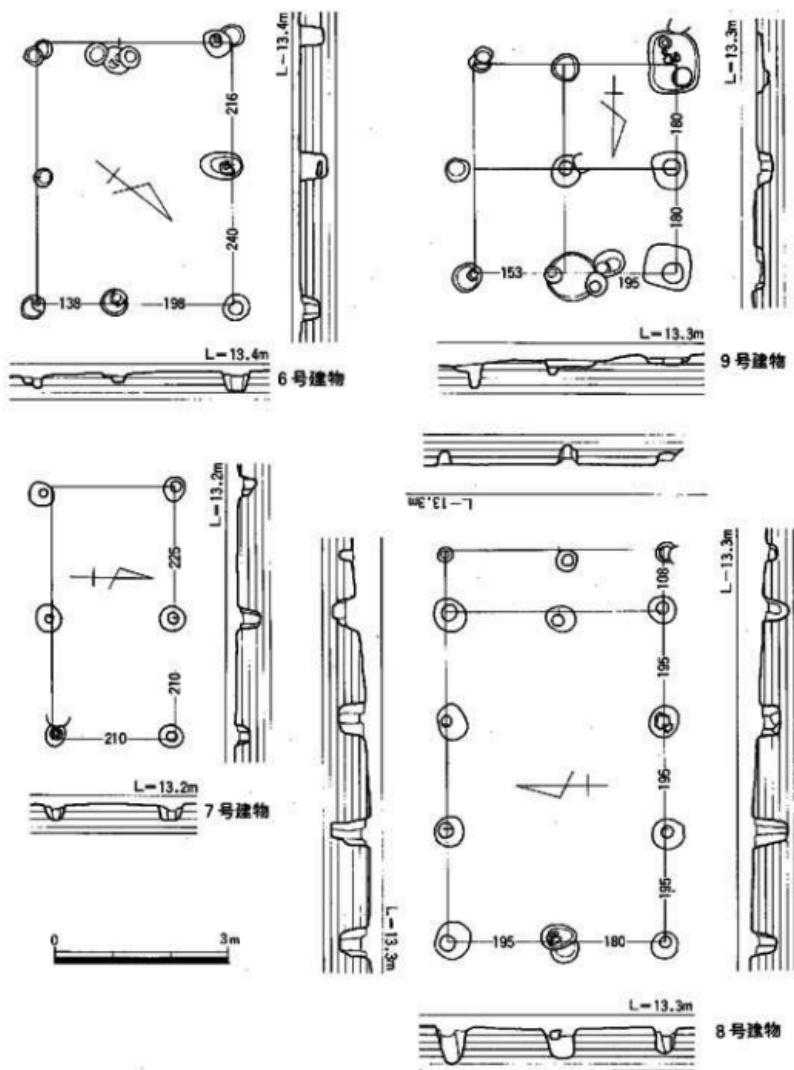


Fig. 13 6 ~ 9号建物 (縮尺1/100)

ム混土を主体とする。遺物は弥生式土器、土師器、土師皿や青磁、染付・陶器の細片など合せて41点出土した。

6号建物 (Fig. 13, PL. 12)

北東方向に主軸をN-52°-Eに取る1×2間の建物である。梁間全長3.36m (11.2尺), 衍行全長4.5m (15.2尺) を測り、柱穴内には一部根石を持つものもある。5号建物と柱穴が一部重複する。柱穴は円形で直徑20~50cm, 深さ5~50cmとバラツキがある。埋土は黒色ローム混り土を主体とし、糸切りの土師皿や瓦器塊片、焼土ブロック、炭化物など60点程出土した。

7号建物 (Fig. 13, PL. 12)

5・6号の建物と重なる東西方向の建物で、主軸N-88°-Eに取る1×2間の建物である。梁間全長2.1m (7尺), 衍行全長4.35m (14.5尺) を測る。柱穴は円形で、直徑は35~50cm, 深さは15~60cmを測る。柱径は柱痕跡から12~20cm位と思われる。埋土は黒色ローム混り土を主体とし、弥生式土器から土師器、黒曜石片など合せて31点出土した。

8号建物 (Fig. 13, PL. 13)

9・21号と重なる。東西方向の主軸をN-89°30'-Eに取る、2×4間の東に廻がつく建物である。梁間全長3.75m (12.5尺), 衍行全長6.75m (12.5尺) を測る。柱穴は円形で、径50~60cm, 深さ40~70cmを測るが、廻の柱は直徑20~30cm, 深さが20~33cmと柱穴よりひとまわり以上小さい。柱径は20cm前後、根石を持つものもある。埋土は黒色ローム混り土を主体とし、遺物は弥生式土器や糸切りの土師皿、明代と思われる青磁碗底部片など、合せて12点出土した。

9号建物 (Fig. 14, PL. 13)

8号建物と重なる2×2間の総柱の建物である。主軸をN-30°-Wに取る。梁間全長3.45m (11.5尺), 衍行全長3.6m (12尺) を測る。柱穴は円または方形で、直徑30cm~1m以上、深さは20~40cmを測る。柱径は柱痕跡から20cm前後である。埋土は8号建物とはほぼ同じで、遺物は古墳時代土師器、須恵器、瓦器塊の細片50数点が出土した。

11号建物 (Fig. 14, PL. 12)

12号建物と重複する東西方向の主軸をN-88°30'-Eに取る1×2間の建物である。梁間全長2.25m (7.5尺), 衍行全長4.05m (13.5尺) を測る。柱穴はいずれも円形で、直徑30~50cm, 深さ15~55cmを測る。柱径は柱痕跡から14~16cmと考えられる。埋土は黒色ローム混り土を主体とし、弥生時代前期の壺形土器片や、土師質土器の鍋、木炭片など20数点が出土した。

12号建物 (Fig. 14, PL. 15)

東西方向の主軸をN-85°-Wに取る1×2間の建物である。梁間全長2.4m (8尺), 衍行全長4.5m (15尺) を測る。柱穴は略円形で、径40~50cm, 深さ30~65cmを測り、根石を持つものもある。柱径は柱痕跡から12~20cmと思われる。埋土は黒色ローム混土を主体とする。遺物は弥生式土器や土師器、須恵器・糸切りの土師皿の小片、鉄滓2など合せて19点出土した。

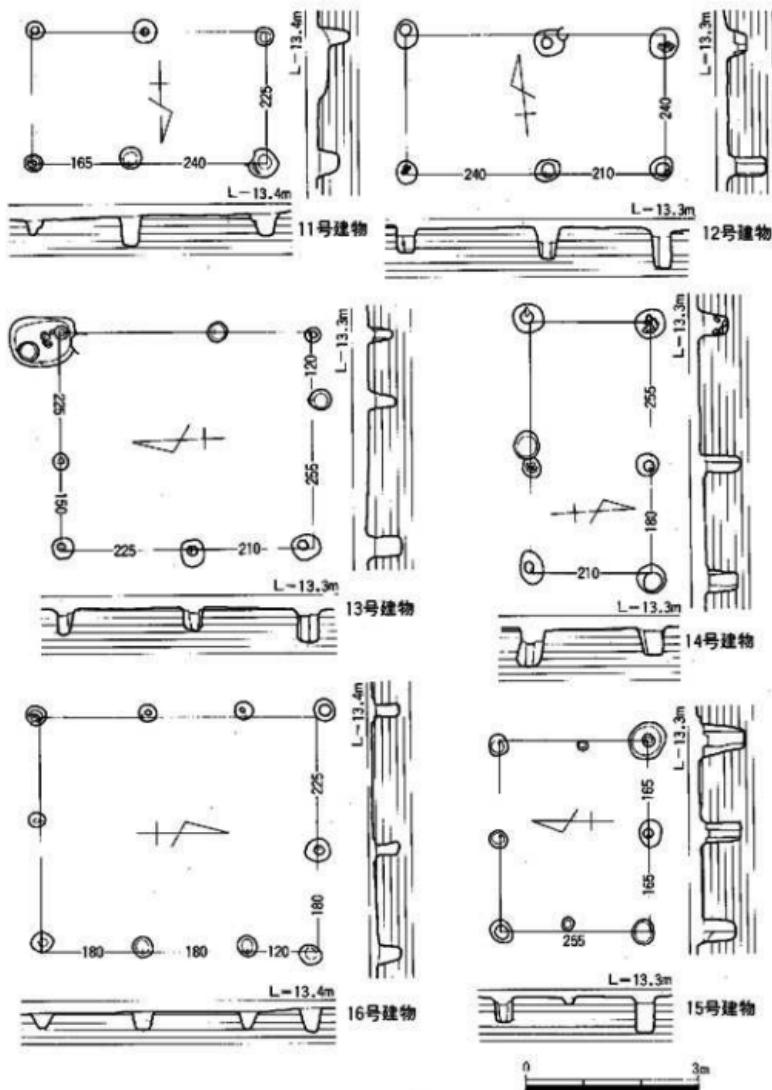


Fig. 14 11~16号建物 (縮尺1/100)

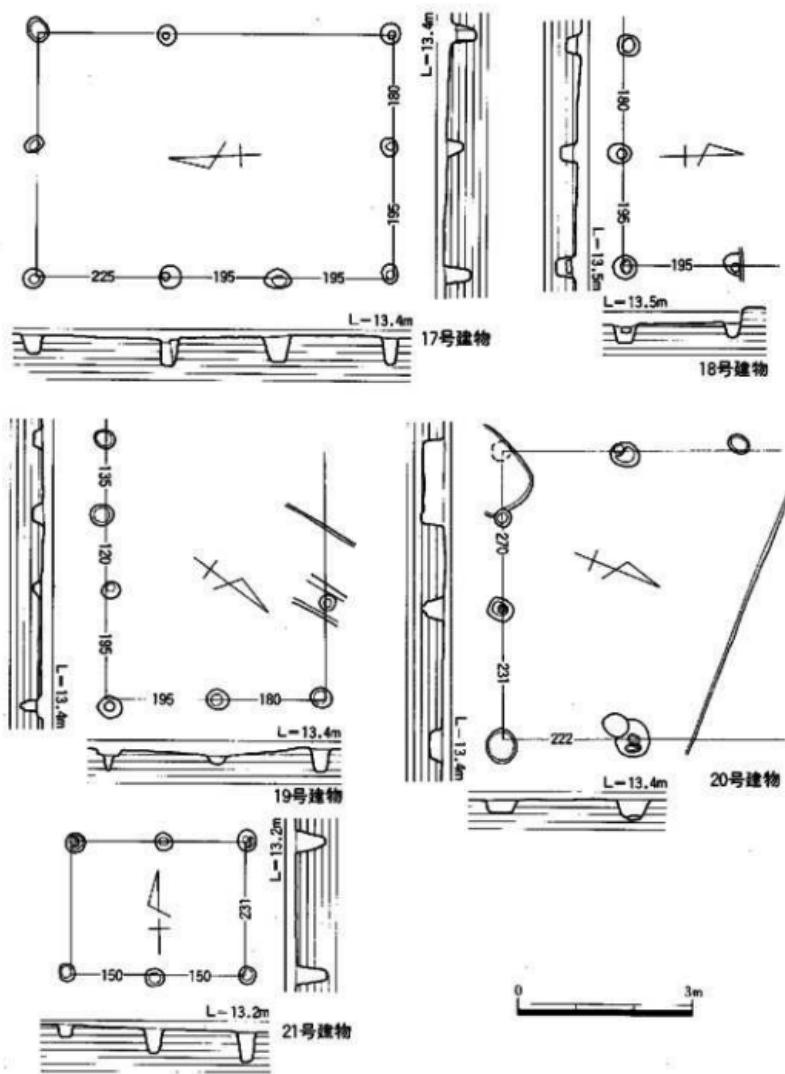


Fig. 15 17~21号建物 (縮尺1/100)

13号建物 (Fig. 14, PL. 13)

南北棟で9号建物と柱穴を共有する。主軸はN-2°-Eに取る。梁間全長3.75m (12.5尺), 桁行全長4.35m (14.5尺) を測る。柱穴は円形もしくは略方形で、直径は30~50cm, 深さは30~60cmを測る。柱径は柱痕跡から15cm前後である。埋土は黒色ロームブロックを混入する。遺物は糸切りの土師皿と管状の土錐が合せて3点出土した。

14号建物 (Fig. 14, PL. 13)

東西棟で主軸をN-86°-Wに取る1×2間の建物である。梁間全長2.1m (7尺), 桁行全長4.35m (14.5尺) を測る。柱穴は円形で、直径40~55cm, 深さ45~70cmを測り、根石を持つものもある。柱径は柱痕跡から20cm前後と思われる。埋土は黒色ロームブロックが混る。遺物は須恵器、土師皿を含む土師器片や土師質土器の鍋など、鎬蓮弁の青磁碗片・白磁片、おはじき状の石製品などを合せて19点出土した。

15号建物 (Fig. 14, PL. 13)

東西方向の主軸をN-89°-Eに取る2×2間の建物である。柱穴は一部7号溝下より検出した。梁間全長2.55m (8.5尺), 桁行全長3.30m (11尺) を測る。柱穴はほぼ円形で、直径は15~65cm, 深さは8~80cmとバラツキがあり、梁間の間柱は桁行に比べて極めて小さい。柱径は柱痕跡より15cm程である。埋土は暗褐色土で、土師器及び須恵器の細片が5点出土した。

16号建物 (Fig. 15, PL. 13)

南北方向の主軸を磁北に取る2×3間の建物である。梁間全長4.05m (13.5尺), 桁行全長4.8m (16尺) を測る。柱穴はほぼ円形で、直径は30~40cm前後、深さは13~45cmを測る。柱穴径は柱痕跡から10~20cm位である。埋土は暗褐色土である。遺物は土師皿を含む土師器、瓦器塊、土師質土器の細片8点が出土した。

17号建物 (Fig. 15, PL. 11)

16号建物と重なる南北方向の主軸をN-2°-Eに取る2×3間の建物である。梁間全長4.2m (14尺), 桁行全長6.15m (20.5尺) を測る。柱穴は略円形で、直径30~40cm, 深さ10~40cmを測り、梁間中央の2穴が浅い。埋土は黒色土を主体とする。土師皿を含む土師器や、奈良時代の須恵器、瓦器塊・土師質土器・陶器・端反りの白磁碗の細片が48点程出土した。

18号建物 (Fig. 15, PL. 11)

調査区北西境界地で検出した。主軸をN-54°-Eに取る2×3間以上の建物である。梁間全長3.75m (12.5尺), 桁行全長4.5m以上 (15尺) を測る。柱穴はいずれも円形で、径35~40cm, 深さ13~40cmを測る。埋土は黒色土でロームブロックが混る。遺物は弥生式土器又は土師器片が30点出土した。婧壺の口縁部片らしきものもあった。

19号建物 (Fig. 15, PL. 11)

1号住居を切り、一部北側調査区外にかかる。主軸はN-2°-Eに取り、2×1間以上で

ある。梁間全長3.75m (12.5尺), 衍行全長1.95m以上を測る。柱穴は円形で、直径30~40cm, 深さは25~35cmを測る。柱径は柱痕跡から16~20cmと思われる。一部根石を持つ。埋土は黒色土でロームブロックが混る。遺物は弥生式土器・土師皿を含む土師器、須恵器の細片が22点、土鍬が1点出土した。

20号建物 (Fig. 15, PL. 11)

北側境界地にかかる、主軸をN-22°-Wに取る2×3間以上の建物である。梁間全長5.01m (16.7尺), 衍行全長4.8m以上 (16尺) を測る。柱穴は略円形で、直径35~60cm, 深さ22~52cm

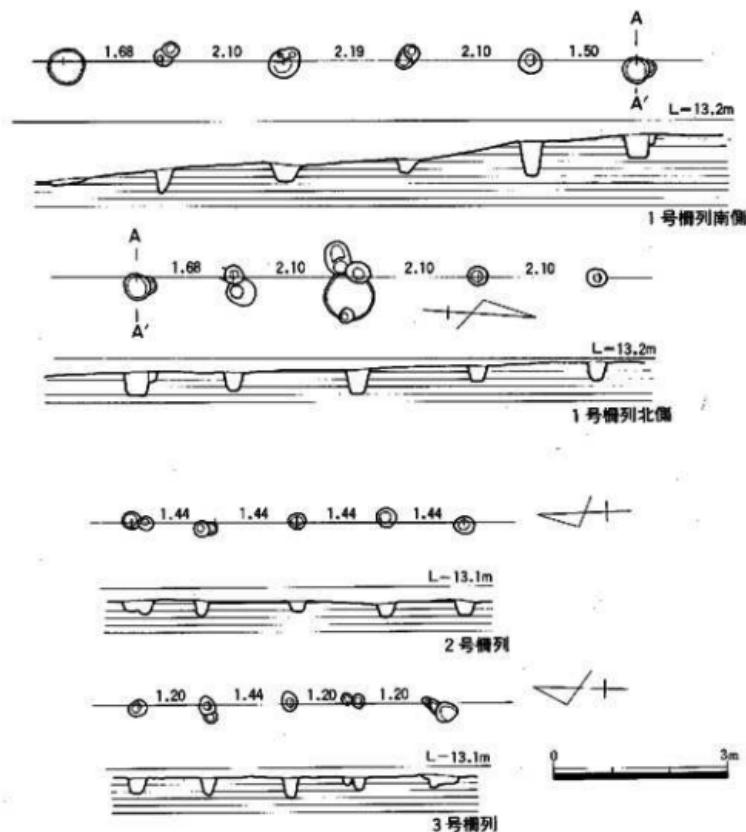


Fig. 16 1~3号横列 (縮尺1/100)

を測り、柱径は柱痕跡から14cm位と思われる。根石を底に置くものもある。埋土は黒色土を主体とする。遺物は土器器細片が3点出土した。

21号建物 (Fig. 15, PL. 12)

8号建物と重複する、主軸をN-88°Wに取る1×2間の建物である。梁間全長2.31m (7.7

建物 番号	規模 (間数)	方向	桁 行		梁 間		床面積 (m ²)	方 位	備 考
			実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			
1号	2×1	東西	5.7 (19)	9.5, 9.5	3.3 (11)	11	18.81	N-88°30' E	
2号	2×?	東西	4.2 (14)	7, 7	1.8 (6)	6	7.56	N-88° E	総柱?
3号	3×?	東西	4.95 (16.5)	6, 5.5, 5	1.95 (6.5) + α	6.5	9.66 + α	N-88° E	総柱?
4号	2×?	東西	5.7 (19)	9, 10	1.95 (6.5) + α	6.5	11.1 + α	N-90° E	
5号	4×?	東西	13.8 (46)	6.5, 6, 6.5, 7.6	1.65 (5.5) + α	5.5	22.7 + α	N-88° E	西面窓
6号	2×2	北東	4.5 (15.2)	8, 7.2	3.36 (11.2)	4.6, 6.6	15.12	N-52° E	
7号	2×1	東西	4.35 (14.5)	7.5, 7	2.1 (7)	7	91.3	N-88° E	
8号	3×2	東西	6.93 (23.1)	6.5, 6.5, 6.5, 3.6	3.9 (13)	6.5, 6.5	45.1	N-89°30' E	東面窓
9号	2×2	東西	3.6 (12)	6, 6	2.45 (11.5)	6.5, 5	8.82	N-30° W	総柱
11号	2×1	東西	4.05 (13.5)	8, 5.5	2.25 (7.5)	7.5	9.11	N-88°30' E	
12号	2×1	東西	4.5 (15)	8, 7	2.4 (8)	8	10.8	N-85° E	
13号	2×2	南北	4.35 (14.5)	7.5, 7	3.75 (12.5)	7.5, 5 8.5, 4	16.3	N-2° E	
14号	2×1	東西	4.35 (14.5)	8.5, 6	2.1 + α (7 + α)	7	9.13	N-86° W	
15号	2×1	東西	3.3 (11)	5.5, 5.5	2.55 (8.5)	8.5	8.41	N-89° E	
16号	3×2	南北	4.8 (16)	6, 6, 4	4.05 (13.5)	7.5, 6	19.44	N-0°	
17号	3×2	南北	4.5 (15)	4.5, 4, 6.5	3.75 (12.5)	6	16.87	N-2° E	
18号	3?×2	北東	4.5 (15) + α	4.5, 4, 6.5	3.75 (12.5)	6.5, 6	16.87 + α	N-54° E	
19号	2×?	東西	3.75 (12.5)	6.5, 6	1.95 (6.5) + α	6.5	7.31 + α	N-2° E	
20号	?×2	北西	5.0 (16.7) + α	9, 7.7	4.08 (13.6)	6.8, 6.8	20.44 + α	N-22° W	
21号	2×1	東西	3.00 (10)	5, 5	2.31 (7.7)	7.7	6.93	N-88° W	

(掘立柱建物)

櫛列 番号	規模 (間数)	方向	実長(尺)	柱間寸法(尺)		方 位	備 考
				柱間寸法(尺)	柱間寸法(尺)		
1号	9 + α	南北	17.55 (58.5) + α	7, 7, 7, 5.6, 5, 7, 7.3, 7, 5.6		N-4° W	5号溝西側
2号	4 - α	南北	5.76 (19.2) - α	7.2, 7.2, 7.2, 7.2		N-130° E	1号溝西側
3号	4 - α	南北	5.04 (16.8) - α	4, 4.8, 4, 4		N-2° W	1号溝東側

(櫛
列)

tab. 2 掘立柱建物、櫛列一覧

尺), 衍行全長3.0m (10尺) を測る。柱穴は円形で、直径30cm前後、深さは16~50cmを測る。埋土は黒色土を主体とする。遺物は弥生式土器と思われる細片が2点出土した。

構列 (S A)

3条検出した。いずれも南北方向に主軸を取るが2号構列はやや東へ振れる。

1号構列 (Fig. 16)

5号溝西壁で検出した主軸をN-4°-Wに取る9間以上の構列である。確認長は17.55m以上を測り、柱間間隔は1.50~2.19mを測る。柱穴は略円形で、直径は32~60cm、深さは概ね一定のレベルにある。5号溝完掘後に確認しており、5号溝より古い時期のものである。遺物は土師皿らしきものを含め、3点出土した。

2号構列 (Fig. 16)

2号溝西側で検出した。主軸はN-1°30'-Eに取る。確認長は5.76m以上で、柱間間隔は1.44m (4.6尺) を測る。柱穴はいずれも円形で径30cm前後、深さ20~30cm位である。底面レベルはほぼ一定である。埋土は黒色土にローム混入しており、遺物は土師器や鍋と思われる土質土器の細片が4点出土した。

3号構列 (Fig. 16)

2号構列の東側で検出した。主軸をN-2°-Wに取り、確認全長は5.04m (16.6尺)、各柱間距離は1.2~1.44m (4尺~4.8尺)、直径は24~35cm、深さ20~35cmを測る。遺物は須恵器・土師器を含め4点出土した。(山崎)

溝状遺構 (S D)

全部で8条検出した。3号・4号溝の埋土が黒色土を主体とし、比較的古いと思われる他は中世以降である。2号溝は攪乱で欠番である。

1号溝 (Fig. 23, PL. 11-14)

南北方向の溝で、北側で立ち上る。確認長は5.8m、最大幅1.80m、深さ0.75mを測る。南側は9号溝に切られる。溝断面形は逆台形を呈す。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、底面は暗灰褐色粘土となる。上層には自然礫を混入していた。遺物は弥生式土器・土師器・須恵器、瓦質土器の三足釜支脚・摺鉢・陶器・磁器・瓦・鐵滓などが出土している。

3号溝

西側境界で確認した。南北方向の小溝で、4号溝に切られる。確認長8.60m、幅0.70mを測り、深さは6~18cmと浅いが、北側に向って深くなる。埋土は黒褐色土である。遺物は少なく、弥生式土器や土師器の細片が30点程出土した。

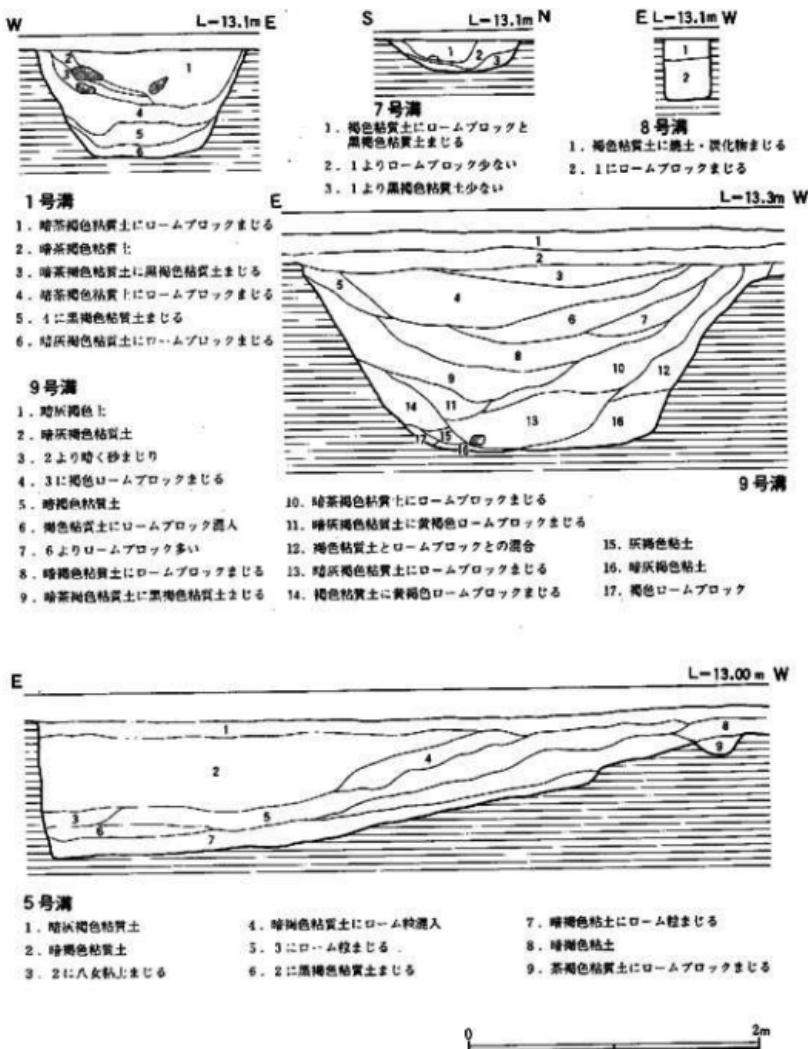


Fig. 17 1 ~ 9号溝土層断面図 (縮尺1/40)

4号溝

2号住居・3号溝を切る。長梢円形状の溝で、最大長3.2m、最大幅0.9mを測り、深さは5~6cmと浅い。埋土は黒褐色粘質土と褐色ローム土の混合である。遺物は弥生式土器、土師器合せて約50点が出土した。

5号溝 (Fig. 17, PL. 11・14)

調査区南東隅で検出した。南北方向の大溝で、確認長10.5m、幅3.5m、深さ0.9mを測る。幅の割には深くない。この周辺で多く検出されている、中世末の濠状遺構の一部と考えられる。埋土は暗褐色粘質土を主体としており、下の方は粘土となり、マンガンを混入する。遺物は少なく、弥生式土器や土師器、土師皿、須恵器、土師質土器などの細片を含む。

6号溝 (PL. 11・14)

5号・7号・8号を切る南北方向に伸びる小溝である。確認長9m、幅0.5m、深さ9~15cmを測る。全体に浅いが、南側に向って深くなる。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は非常に少なく、弥生式土器・土師器・須恵器の細片が5点出土した。

7号溝 (Fig. 17)

5号溝に直交する溝であるが、先後関係は不明で、5号溝に向って深くなる。確認長は7.5m、幅1.3m、深さ10~45cmを測る。埋土は褐色粘質土を主体とし、下層は明褐色ロームブロックを混入する。遺物は弥生式土器、皿を含む土師器・須恵器の細片が75点程出土した。

8号溝 (Fig. 17, PL. 14)

調査区南境界地で検出したL字型に曲がる溝である。溝幅は最大で1.1mを測り、深さは42cmを測る。溝断面は箱形を呈す。埋土は上層が暗褐色粘質土で、炭化物や焼土ブロックを混入、下層が明褐色ロームブロックで、よくしまっていた。遺物は、弥生式土器や土師皿を含む土師器の細片あわせて55点である。形態からして建物の雨落溝的なものであろうか。

9号溝 (Fig. 17, PL. 14)

1号溝を切る溝で、立上りの一部を検出した。確認幅は3.13m、深さは1.30mを測る。溝の断面形は逆台形である。埋土は暗灰褐色から褐色粘質土を主体とし、地山ロームブロックが下層や内壁面を中心に流れ込んでいる。1号溝との土質の差は余りない。遺物は少なく、弥生式土器、土師器、須恵器、土師質土器、滑石片、炭化物等の小片が40数点出土している。(山崎)

3) 出土遺物

1号住居跡出土遺物 (Fig. 18・19, PL. 14)

1号住居跡からは、弥生時代の土器・石器・墨暈石片と古墳時代前期の遺物が出土したが、弥生時代の遺物は小片がほとんどであった。

弥生式土器

高坏 (15) 外にゆるやかに広がる据部片である。据部径は21.0cmを測る。外面には赤色顔料を塗付している。胎土には石英・長石を多く含みやや粗い。調整は磨滅のため不明である。

土師器

壺 (1~8) 小形丸底壺と二重口縁を有する大形のものがある。1・2は小形丸底壺で、ともに口縁部を欠失する。丸い体部に、外に直線的に開く口縁部をもつものと思われる。1は底部も欠失し、胴部最大径12.3cm、推定器高12.5cmを測る。外面にはタテハケ、内面にはナデ調整を施す。2は胴部最大径13.6cm、推定器高12.0cmを測り、調整は不明である。ともに石英・長石粒を含むが、2は特に多く含み、粗い。

3~7は二重口縁の壺であるが、細部の形態がやや異なっている。3・4はほぼ直線的に伸びる口縁部と短かい頸部を持つ。3は器壁が約0.6cmと薄く、口径21.4cmを測る。4は器壁が約1.0cmと厚く、口径19.0cmを測る。5~7はやや曲がりながら外に開く口縁部と、やや長めの頸部を持つ。このうち6は頸部が直接的に立ち、頸部の上下の稜が明瞭で5とは異なっている。5は口径17.7cm、6は19.2cm、7は約16.5cmを測る。8は二重口縁壺の頸部一胴部と思われ、推定胴部最大径27.3cmを測る。胎土はいずれも石英・長石粒を含み、やや粗いものが多いが、5は砂質の胎土で金雲母粒や赤色鉱物を含んでいる。色調は5が灰色系のほかは、淡黄褐色から淡橙色を呈する。調整は磨滅のため不明のものが多いが、明確なものは口縁部が両面ともヨコナデである。

甕 (10~13) 口縁部・頸部の形態から2種類に分けられる。10・12・13はやや内弯ぎみに外に開く口縁部と内面の稜が不明確な頸部を持つ。口縁部先端はやや細くなる。10は口径16.5cm、頸部径12.4cmを測り、頸部に穿孔が施されている。12は口径16.6cm、13は口径17.8cmを測る。11はわずかに外反する口縁部と、内面の稜が明確な頸部を有する。口縁端部はいわゆるつまみ上げ口縁状を呈するが、明確ではない。口径16.4cmを測る。胎土にはいずれも石英・長石粒を含むが、11・12は特に多く含み粗い。色調は11が橙色を呈す他は淡黄褐色を主体とする。調整はいずれも磨滅のためほとんどわからない。

鉢 (14) やや短かめの口縁部と丸い体部に平底ぎみの底部を有する。全体的にかなり作りの粗い土器である。口径16.7cm、器高約12.5cmを測る。調整は口縁部から頸部外側がヨコハケ、外側はタテハケ、内面は主にヨコハケである。ハケの目はかなり粗い。胎土には石英・長石粒を含み、やや粗い。

高坏 (16~18) ほぼ同形態の高坏である。16は口径17.7cmを測る。坏部は途中で段がついて折れまがるもの、全体としては直線的な形態で、口縁部先端に行くほど器壁は薄くなる。17・18は直接的な筒部と、かなり外側に聞く裾部を有する。17は筒部径3.5cm、18は筒部径3.2cm、裾部径12.5cmを測る。18の透かし穴径は0.6cmを測る。色調は3点とも淡橙色を呈する。胎土

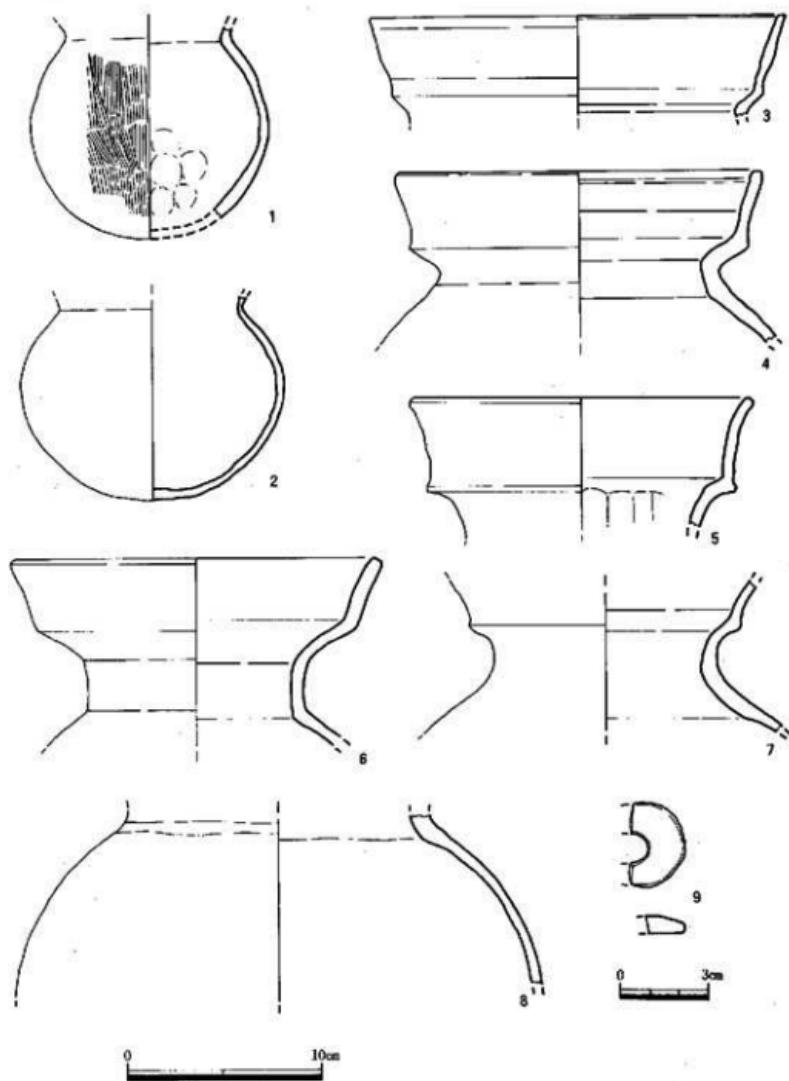


Fig. 18 1号住居跡出土遺物(1) ((縮尺1/3, 1/2)

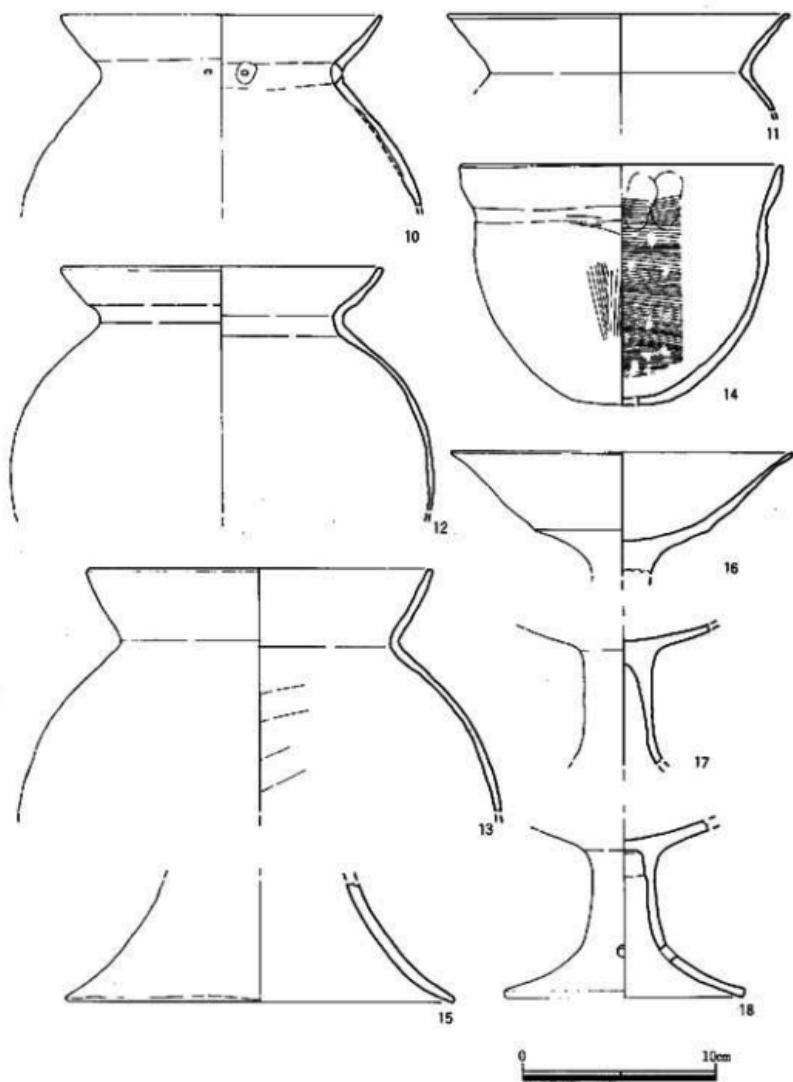


Fig. 19 1号住居跡出土遺物(2) (縮尺1/3)

は16が少量の石英・長石を含み、17・18は砂質の胎土で少量の石英・長石・金雲粒を含む。

土製品(9) 欠損品で、残存部は半円形を呈する。紡錘車かと思われる。径約3cm、厚さ0.6cmを測る。色調は淡橙色を呈し、石英・長石をやや多く含む。全面にナデ調整を施している。

2・4号住居跡出土遺物 (Fig. 20, PL. 15)

両住居跡に明確に伴う遺物はほとんどないが、3号住居跡から出土した古墳時代遺物は、2・4号住居跡に伴なうものと考えられる。ただしどちらの住居跡に伴なうかは不明なものが多いので、一括して掲載した。図示した以外に小玉の小片が1点出土した。

土器

壺(38) ピットNo.131から出土した。器壁は胴部では約0.9cmと厚く、口縁部は先端が肥厚する。口縁部は直線的に外傾し、口唇部は尖りぎみである。口径9.4cm、胴部最大径9.7cm、器高9.3cmを測る。調整は正面ともヨコナデもしくはナデである。色調は橙色を呈し、内面にスス状のものが付着している。胎土には石英・長石・雲母粒などを含む。

壺(34・35) ともにほぼ直線的に外に開く口縁部を有するが、形態がやや異なる。35はわずかに内弯する口縁部と、内面の稜が不明確な頸部を有する。34はいわゆるつまみ上げ口縁に近く、頸部内面の稜は明確である。口径15.4cmを測る。全体で1/3個体近くあるが、遺存度が悪いためあまり接合せず、復元できなかった。34・35ともに淡黄褐色を呈し、胎土には石英・長石粒をやや多く含んでいる。

高杯(36) 小片で、推定口径16cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外傾し、杯部の底はほぼ水平になるものと思われる。ほぼ全面にナデ調整を施している。

手捏ね土器(37) 口径7.0cm、器高3.1cmを測る。ほぼ半球体状の器形を成し、調整は外面が粗いナデ、内面はナメのケズリである。

3号住居跡出土遺物 (Fig. 20・21, PL. 15)

3号住居跡からは、弥生時代前期の土器・石器・黒曜石片と古墳時代の遺物がコンテナ3箱程出土したが、そのほとんどは弥生時代の遺物で、古墳時代の遺物は前項で述べたように、2・4号住居跡に伴なうと考えられる。また弥生時代の土器は細片・小片が多く、出土量が多かった割には図化できたものは少なかった。床面直上の遺物も極めて少ない。

弥生式土器

壺(25~27, 31・32) 25と27は口縁部片である。27は端部が外に開く口縁部片で、口径19.7cmを測る。口縁端部は肥厚する。口唇部にはヨコナデ調整、口縁直下の外面にタテハケ状の調整が認められるが、磨滅のため不明確である。色調は明橙色を呈し、胎土には石英・長石粒を含み粗い。25はかなり外反する口縁部片で、端部ではほぼ水平になる。27のような肥厚はしない。内面にヨコハケ調整を施し、胎土には石英・長石を含み、やや粗い。

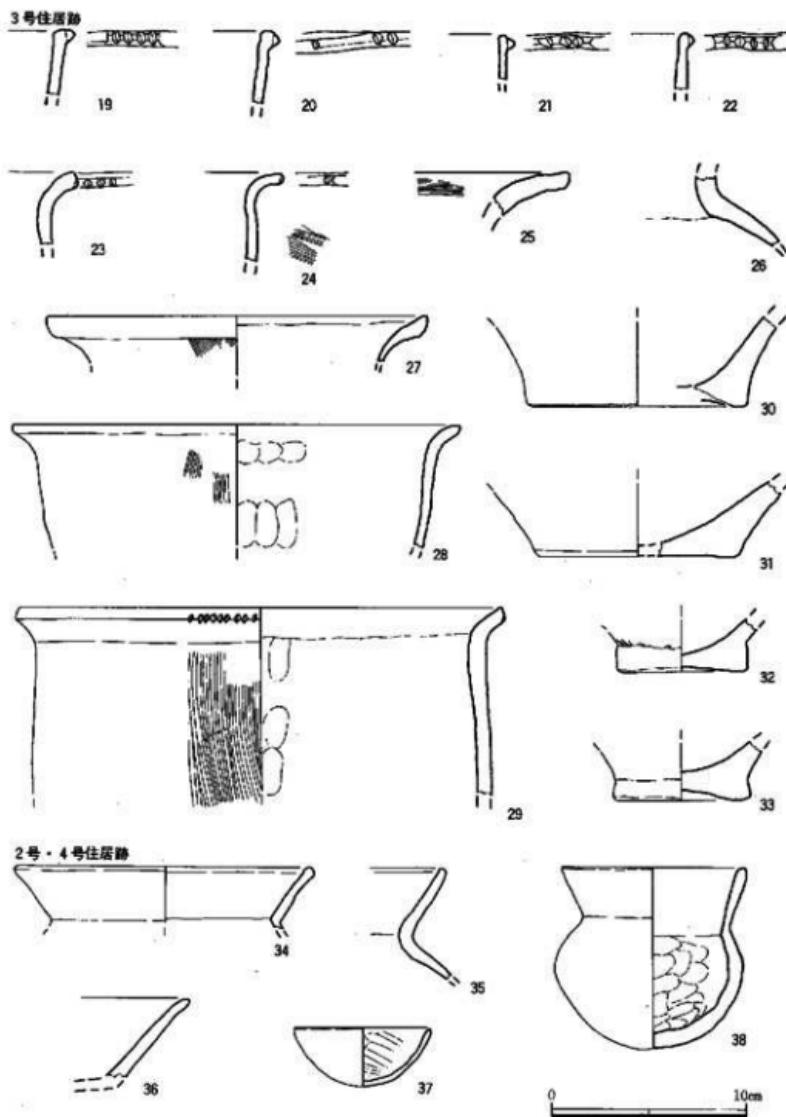


Fig. 20 2～4号住居跡出土遺物（縮尺1/3）

26は頭部片で、頭部内面は折れ曲がる。調整は、頭部内面の下半がケズりぎみの粗いナデの他はナデである。31・32は底部片で、31は平底で、底径10.3cmを測る。調整は磨滅のためわからない。32は上げ底で、柄は直線的に立ち上がり、それから急激に折れ上がる。屈曲点の部分にケズリに近いナデの跡が認められる。それ以外の調整はおおむねナデである。ともに石英・長石を含み胎土がやや粗い。

壺・鉢 (19~24・28・29・30・33) 壺・鉢の口縁部は2タイプに分けられる。Aタイプ (19~22) は直立する口縁部とその端部に刻み目を有する凸帯を貼りつける。色調は淡黄褐色を基調にするか、外面はススのためかやや黒ずんでいる。調整は磨滅のため不明確であるが、外面は条痕、内面はナデと思われる。胎土には石英・長石をやや多く含む。Bタイプ (23・24・28・29) は外反する口縁部を有し、口唇部に刻み目を有するものである。8は図面上刻み目が現れていないが、これは残りが悪く刻み目が明確でないために、刻み状のものがわずかに認められ、磨滅のため調整のわからないものも多いが、口縁部はヨコナデ。頭部以下の外面はタテないしナメのハケ、内面はナデを施している。色調・胎土ともにAタイプに近い。28は口径23.1cm、29は口径25.1cmを測る。

30と33は壺の底部片と思われるものであるが、不明確である。33は底径7.1cmを測る。柄は外に張り出し、底は上げ底である。30は底の大部分が欠失するが、やはり上げ底と思われる。ただし柄の張りは弱い。底径11.4cmを測る。ともに石英・長石粒を含みやや粗い。

石器

石器は石斧3、磨石3、砥石1、石錐1、石剣1、紡錘車1、打製石器5点と、多くの黒曜石のフレイク・チップ及び不定形の石核が出土した。

石斧 (39~41) 39は刃部を欠失する。現存長12.9cm、最大幅6.7cm、最大厚4.2cmを測る。玄武岩製である。剥離痕は頭部などの一部を除いてほとんどなく、敲打痕も大半消えるほど研磨を施している。40は刃部のみの破片で、再利用のため刃部はつぶれている。安山岩系の石材である。41は柱状片刃石斧の頭部片で、現存長7.2cm、最大幅3.9cm、最大厚2.7cmを測る。四辺の稜は明確で、稜の部分に剥離痕が残っている以外はていねいに研磨を施している。頁岩系の石材を使用する。

磨石 (42~44) 42・43は平面形が長指円形を呈する小形の磨石である。42は長さ6.7cm、幅3.7cm、厚さ3.5cmを測る。両端部には敲打痕が認められる。43は長さ5.2cm、幅2.9cm、厚さ2.4cmを測り、ほぼ全面研磨されている。44はやや大型の磨石で、長さ7.7cm、幅7.2cm、厚さ6.8cmを測る。表面中央に径約2.5cmを凹みがあり、それ以外はほぼ全面研磨されている。石材は、玄武岩系のものもある。

砥石 (45) 両端を欠失する。現存長9.8cm、幅5.7cm、最大厚3.8cmを測る。4面とも使用され、使用による磨り減り方はかなり激しい。石材は砂岩である。

第100次調査

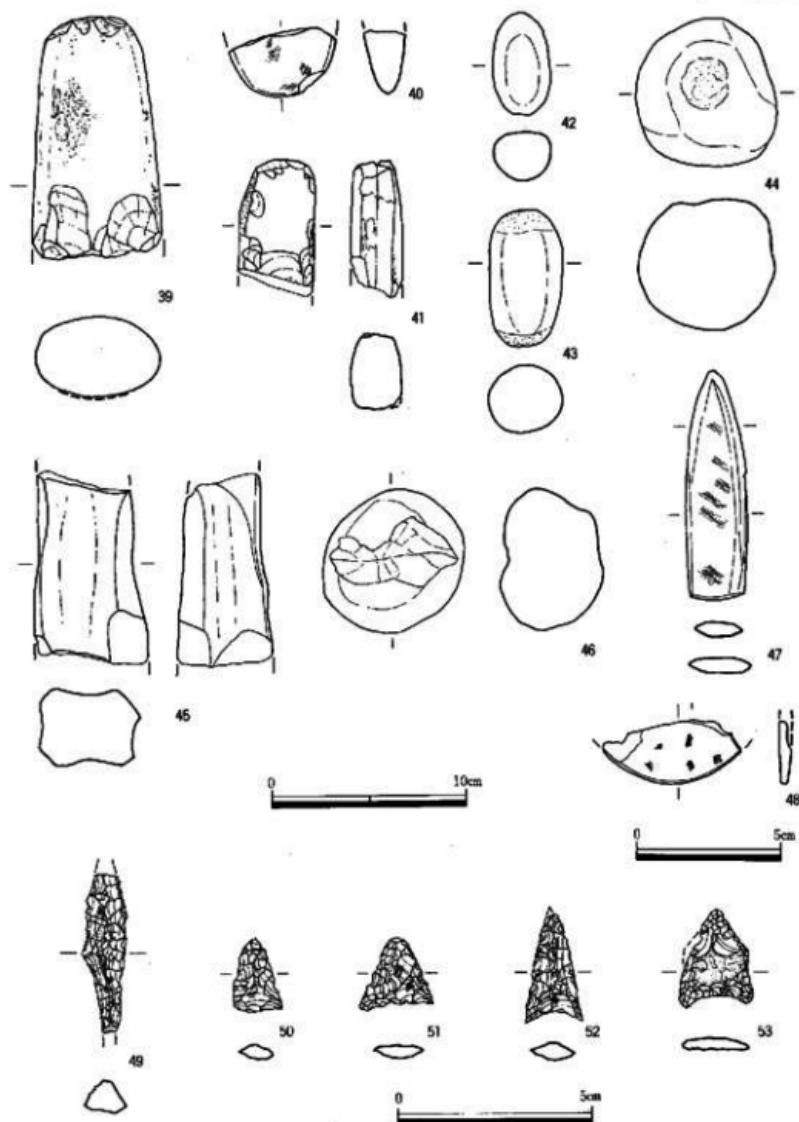


Fig. 21 3号住居跡出土石器 (縮尺1/3, 1/2, 2/3)

石錘(46) わずかに扁平な疊の両端を打ち欠き、その部分に縄ずれがある。長さ7.7cm、幅7.2cm、厚さ5.3cm、重さ425gを測る。石材は玄武岩である。

石劍(47) 基部を欠失する。現存長8.0cm、最大幅2.1、厚さ0.5cm測る。断面形は扁平な六角形を呈する。剣切は磨滅のためやや鈍い。石材は砂岩質である。

紡錘車(48) 小片で、全体の形状は不明、直径約3.5cm、厚さ0.4cmを測る。石材は不明。

打製石錘(49~53) 5点出土しすべて黒曜石製である。50は二等辺三角形を呈し、長さ2.0cm、幅1.2cm、厚さ0.3、重さ0.7gを測る。51は正三角形に近い形を呈し、長さ1.8cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.9gを測る。52はやや長身の凹基錘で、両端を欠失する。現存長2.9cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ1.2gを測る。53は五角形を呈し、一部を欠失する。片面に自然面を残す。長さ2.5cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重さ1.6gを測る。54は有茎錘で両端を欠失する。現存長4.2cm、幅1.1cm、厚さ0.8cm、現存の重さ3.1gを測る。 (米倉)

1号土坑出土遺物 (Fig. 22, PL. 16)

弥生式土器

壺(54) 壺か壺の底部片と思われる。裾はかなり張り出し、底は上げ底である。底径7.2cmを測る。全面ナデ調整で、特に裾部には指頭痕が残る。胎土はやや粗く、焼成は良好である。

2号土坑出土遺物 (Fig. 22, PL. 16)

陶器

摺鉢(55) 底径18.3cmを測る摺鉢の底部で、条痕は8本で目は浅い。器壁が約2cmと厚い。調整はロクロによるナデで、色調は灰褐色を呈する。素地に赤黒色の鉱物を含む。

3号土坑出土遺物 (Fig. 22)

弥生式土器

壺(56) 外反する口縁部の小片で、口唇部を平坦に作り、その先端に刻目を施す。口唇部にヨコナデ、口縁外部にタテハケを施している。

壺(57・58) 57は外反する口縁部の小片で、端部はやや先細りする。二次焼成のため、器面の残りが悪く調整は不明。58も外反する口縁部片であるが、口縁部が肥厚し、頭部と段を有する。ほぼ全面ていねいなナデ調整を施している。

4号土坑出土遺物 (Fig. 22, PL. 16)

石器

石斧(59) 頭部と刃部を欠損する。側刃を中心に敲打痕がかなり残る。現存長12.3cm、最大幅6.5cm、最大厚3.7cmを測る。安山岩系の石材を使用している。

7号土坑出土遺物 (Fig. 22, PL. 16)

弥生式土器

壺(60・61) 60は口縁部片で、3号住居出土遺物のAタイプに属する。調整は磨滅のため不

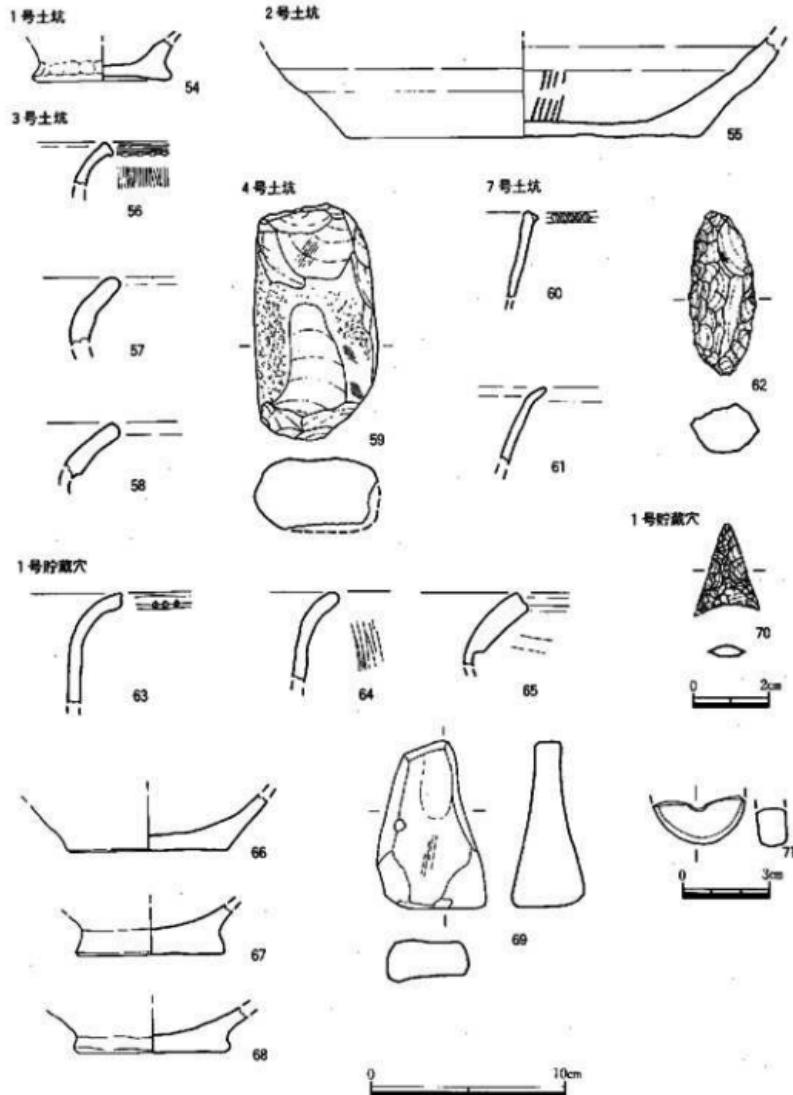


Fig. 22 土坑、1号贮藏穴出土遺物 (縮尺1/3, 1/2, 2/3)

明である。刻目はかなり密に施している。61はやや特異な器形で短い口縁部と直線的な胴部を有する。鉢かもしれない。小片で残りが悪く、擬口縁の可能性もある。

石器

打製石錐 (62) 安山岩製で、未製品かと思われる。長さ4.3cm、幅1.8cm、厚さ1.2cm、重さ9gを測る。剥離はやや粗く、厚味がある。
(米倉)

1号貯蔵穴出土遺物 (Fig. 22, PL. 16)

弥生式土器

壺 (63・64) ともに前述のBタイプに属するもので、外反する口縁部と口唇部に刻み目を施すもので、64は刻み目が磨滅のため不明確である。63は口唇部が凹み、その下部に刻み目を施しているのに対し、64は丸い口唇部を有する。調整は63は不明であるが、64は外面にタテハケがわずかに認められる。

壺 (65-68) 65は外反する口縁部片で、断面形は歯ブラシ状を呈する。口唇部はやや凹んでいる。調整は外面がヨコナデ、内面はヨコハケの後ヨコナデである。全面黒色を呈し、胎上には石英・長石粒を含み粗い。66-68は底部片で、66は壺の可能性もある。66は直線的に外に広がり、底径6.9cmを測る。67・68は据部が外に張り出し、67は底径7.5cm、68は7.7cmを測る。66は内面が黒色、外面が淡黄褐色を呈する。67・68は淡黄褐色を基調とする。

石器

砥石 (69) ほぼ全面、特に両面がかなり研磨を受けておりへっている。全長7.2cm、幅4.3cm、厚さ1.4-4.2cmを測る小形の砥石である。砂岩質の石材を用いる。

打製石錐(70) 凹基式のほぼ左右対象な整った石錐で、押圧剥離はていねいである。長さ2.4cm、幅1.7cm、厚さ0.3cm、重さ0.7gを測る。黒曜石製である。

土製品

紡錘車 (71) 半欠する。直径3.1cm、厚さ0.9cm、孔の直径0.4cmを測る。
(米倉)

1号井戸出土遺物 (Fig. 23, PL. 17)

1号井戸からは、掘り方や井筒内から土器・陶磁器・木器などが出土したが、それらの他に井筒に使った板材が40枚ある。杉系の材質で、完形のもので長さ約30cm、幅約5cmを測る。

瓦質土器

火舍 (72) 口径42.4cm、器厚1.2-1.4cmを測る大形のもので、尺におせば1尺4寸となる。体外面はていねいなナデ、外底面は粗いハケ調整が入る。内面は上部がヨコナデで、接合面が残る。内面は粗いハケ調整である。色調は灰色で、胎土に金雲母粒を含んでいる。

木製品

不明木製品 (73) 現存長11.8cm、幅7.1cm、厚さ4.8cmを測る木片で、直径1cmの方形の穴があけられている。また側辺の一部は削かれている。

蓋 (74) 曲物の蓋と思われ、口径は復元で約18cm、厚さ1.2cmを測る。径約0.5~1.0cmの孔が三ヶ所、円周状にあけられている。

ヘラ状木製品 (75) ヘラ状の板材で、全長24.2cm、幅2.3cm、厚さ0.8cmを測る。側邊上部に二対の抉りが入り、先端は尖っている。

棒状木製品 (76) 全長29.1cm、直径2.5cmの断面形が円形の棒状を呈すもので、上端はカットされ、下端は丸く仕上げている。側邊はケズリを加えている。

漆器椀 (77) 底部片でいたみがひどい。両面に黒漆を塗り、部分的に朱漆を塗っている。推定口径11.5cmを測る。

(山崎)

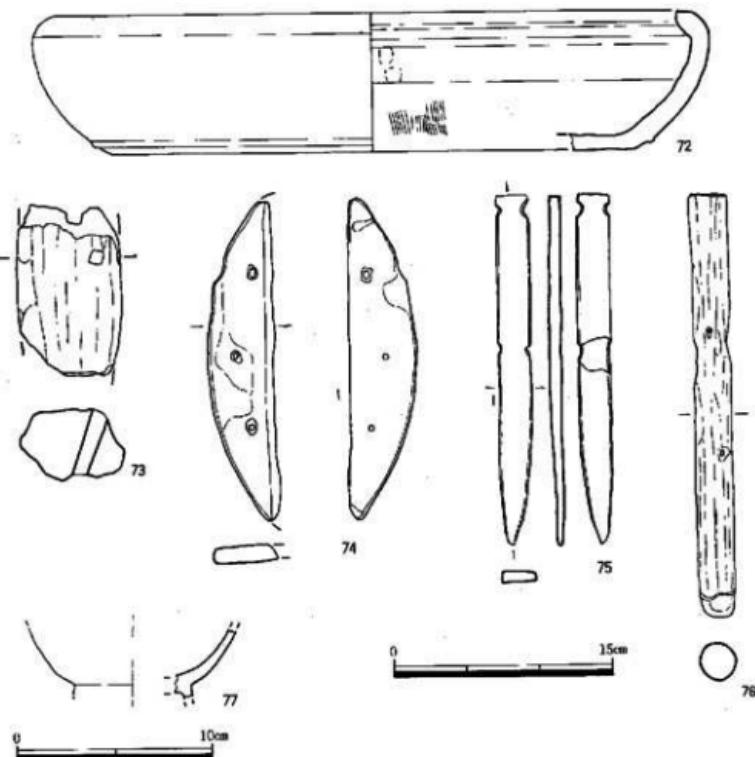


Fig. 23 1号井戸出土遺物 (縮尺1/4, 1/3)

5号建物出土遺物 (Fig. 24, PL. 17)

土師器

皿 (78) 1/3片で口径11.2cm, 器高2.5cmを測る。磨滅がひどいが、底部に板目が残る。

染付

碗 (79) 口縁端部が外反する染付の碗の小片である。外面には濃淡の呉須で、文様を描き、内面には網線を2本描く。釉調は淡青灰色である。

8号建物出土遺物 (Fig. 24, PL. 17)

土師器

杯蓋 (80) 楠宝珠形の鏡である。全体に磨滅はひどい。奈良時代のものであろう。

皿 (81) 1/2片で口径7.4cm, 器高1.3cmを測る。磨滅がひどく調整不明。

13号建物出土遺物 (Fig. 24, PL. 17)

土師器

杯 (82) 底部1/3片で口径9.0cmを測る。全体に磨滅するが底部は糸切である。

土製品

十鍾 (83) 管状の土鍾で、先端の一部を欠失する。長さ3.8cm, 直径1.3cm, 重さ4gを測る。孔径は3mmを測る。

14号建物出土遺物 (Fig. 24, PL. 17)

石製品

小形円形石製品 (86) 莢石状の石製品で、長径2.2cm, 短径2.0cm, 厚さ1.1cm, 重さ2.5gを

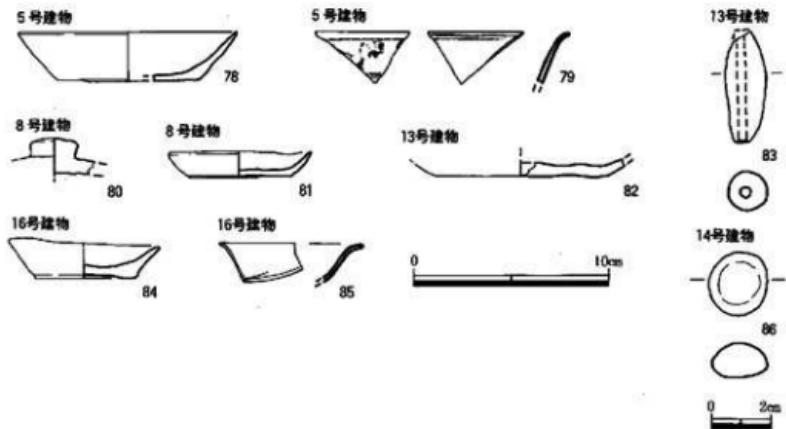


Fig. 24 建物出土遺物 (縮尺1/3, 1/2)

測る。全面研磨を施す。安山岩質である。

16号建物出土遺物 (Fig. 24, PL. 17)

土師器

皿 (84) ほぼ完形で、口径7.8cm、器高2.1cmを測る。表面は磨滅するが、底部は回転糸切りである。内底部は指おさえ痕が残る。

染付

碗 (85) 口縁部の小片で、口縁端部はほぼ水平になる。濃い呉須で内面に線を1条描く。釉は白色の透明釉で、素地は白色を呈する。
(山崎)

1号溝出土遺物 (Fig. 25, PL. 19)

須恵器

器台 (87) 大形器台の1/8片で、脚部径24.4cmを測る。外面に3条の段を有している。

土師器

把手 (88) 牛角形の差し込み式把手で、上面は切り込みが入る。全体に器面が荒れている。

皿 (92~94) いずれも底部糸切りの皿であるが、器面の荒れがひどい。92は底径5.5cm、93は同じく6.2cm、94は口径9.8cm、底径5.9cm、器高2.1cmを測る。体部は途中でわずかに段がつく。

青磁

碗 (89~91) 90は底部片で、底径4.9cmを測る。高台は露胎で、他は暗緑灰色の釉が厚めにかかる。両面に細かい貫入が入る。89は口径16.2cmを測る。口縁部はやや端反り、全体にあまり発色の良くない緑灰色釉がかかる。91は口縁部片で、口径14.0cmを測る。外面には錦蓮弁、内面には、ヘラ描文を施す。いずれも明代であろう。

瓦質土器

摺鉢 (95) 底部1/2片で、底径12.0cmを測る。器表面は荒れるが、両面に粗いハケ目を施す。

土師質土器

鍋 (96・97) 96は1/2片で、口径27.4cmを測る。口唇部は平坦で、底部は丸底気味と思われる。外面はナナメハケで、下半は工具によるナデで煤が厚く付着する。内面は下半がナナメの粗いハケを施す。97は口縁部1/8片で、口径27.0cmを測る。外面は指押さえ痕が残り、煤が付着する。内面は磨滅がひどいが、ヨコナデが認められる。

石器

岩石 (98) 長さ11.3cm、幅10.5cm、厚さ4.5cmを測る。ほぼ全面に研磨が及んでいる。砂岩系の石材を使用する。

5号溝出土遺物 (Fig. 26, PL. 19)

青磁

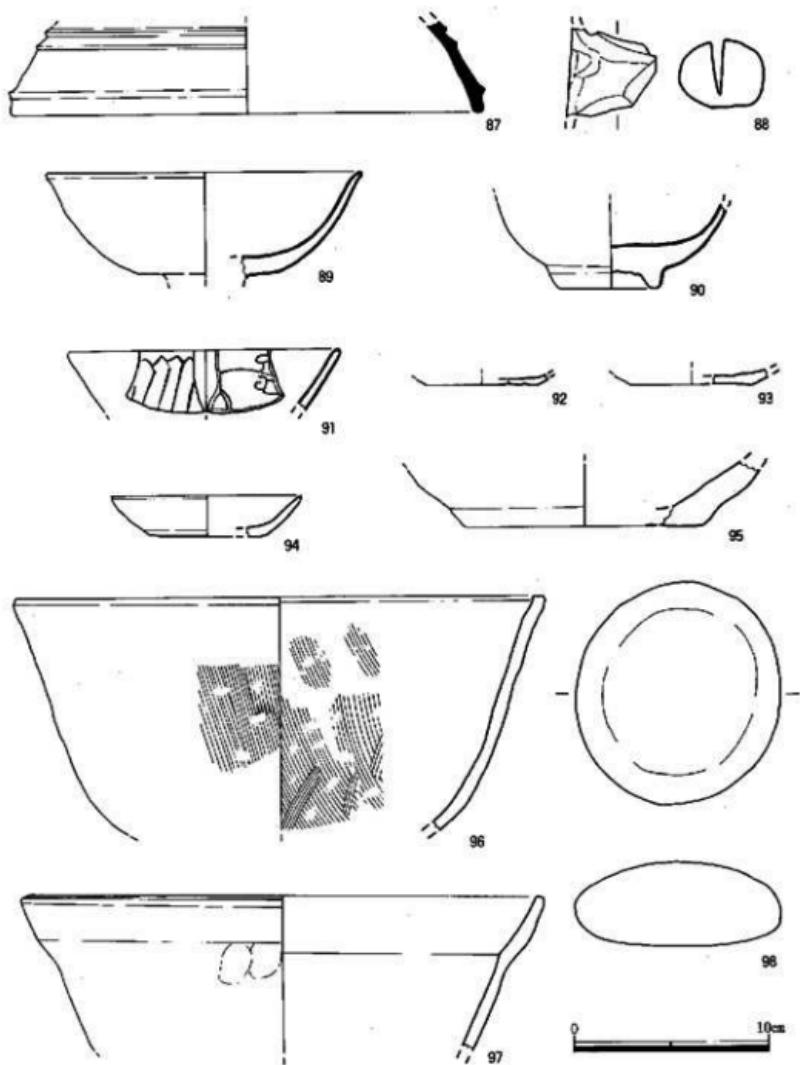


Fig. 25 1号清出土遺物 (縮尺1/3)

碗 (99・100) 99は口縁部1/6片で、口径12.4cmを測る。緑灰色釉が厚めにかかり、外面は鏽薙弁を施す。100は底部片で、緑灰色釉がかかる。

白磁

水注 (101) 玉縁の口縁部1/10片で、口径14.4cmを測る。明茶灰色釉がかかる。

土師器

皿 (102~104) 102は1/2片で、口径11.8cm、器高3.4cmを測る。底部の割に口縁が大きく開く器形で、こちらでは頸を見ないものである。内底部に同心円状のあて具痕が残る。103は1/2片で、口径6.2cm、器高1.2cmを測る。底部に糸切り痕がかすかに残る。104は1/8片で、口径7.8cm、器高1.4cmを測る。器壁は全体に荒れるが、底部は回転糸切り痕が残る。

土師質土器

鍋 (105・106) 105は口縁部の小片で、外面はタテ方向の工具ナデ、内面はヨコ方向の粗く深いハケ目が入る。色調は暗灰褐色を呈す。106は大型の鍋の1/10片で、口径34.8cmを測る。口縁部が体部から移をもって開く器形である。外面はナデ調整で煤が付着する。内面はヨコ方向のハケ目を全体に施す。

8号溝出土遺物 (Fig. 26, PL. 19)

土師器

壺 (107~109) 107は底部1/4片で、底径11.0cmを測る。全体に磨滅がひどい。108は1/8片で、口径12.0cm、器高2.1cmを測る。109は底部片で、底径11.1cmを測る。いずれも回転糸切りである。

9号溝出土遺物 (Fig. 26, PL. 19)

土師器

壺 (112) 1/3片で口径12.9cm、器高2.5cmを測る。全体に磨滅がひどく、調整は不明。

皿 (110・111) 110は2/3片で口径7.5cm、器高1.5cm、111はほぼ完形で口径8.1cm、器高1.5cmを測る。いずれも調整はナデで、底部は回転糸切りである。 (山崎)

ピット出土遺物 (Fig. 27・28, PL. 20)

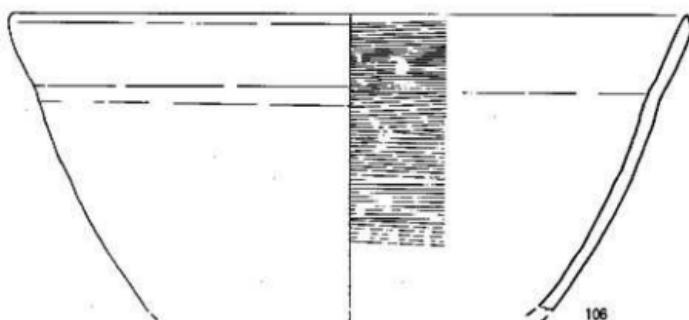
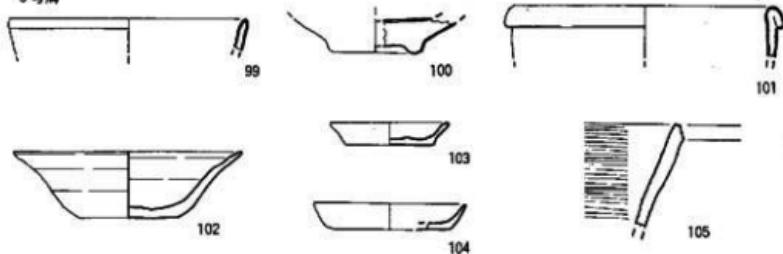
ピットからの出土遺物のうち、固化できたものはさほど多くなかった。その内ピット No. 125は3号住居跡内にあり、3号住居に伴なうと考えられる弥生式土器が出土したが、ピット内から青磁が出土していることから、一括してここで掲載した。

弥生式土器

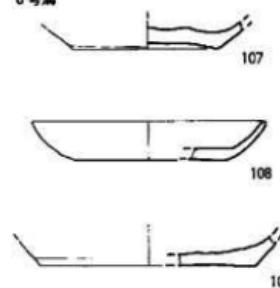
甕 (117) ゆるやかに外反する口縁部を持ち、口唇部は丸味を帯びる。口径20.1cmを測る。調整は外面がタテハケ、内面は口縁部がヨコハケの後ヨコナデ、胸部はナデである。

壺 (118) 外反する口縁部片で、口縁端部の外反は特に強い。頸部外面に段がつく。頸部以下の内面には粘土ひもの痕跡が残る。口径13.4cmを測り、ほぼ全面ナデ調整を施している。

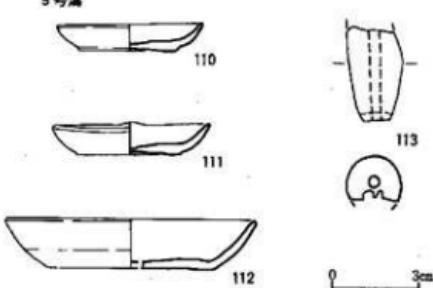
5号洞



8号洞



9号洞



0 3cm

Fig. 26 5·8·9号洞出土物 (縮尺1/3, 1/2)

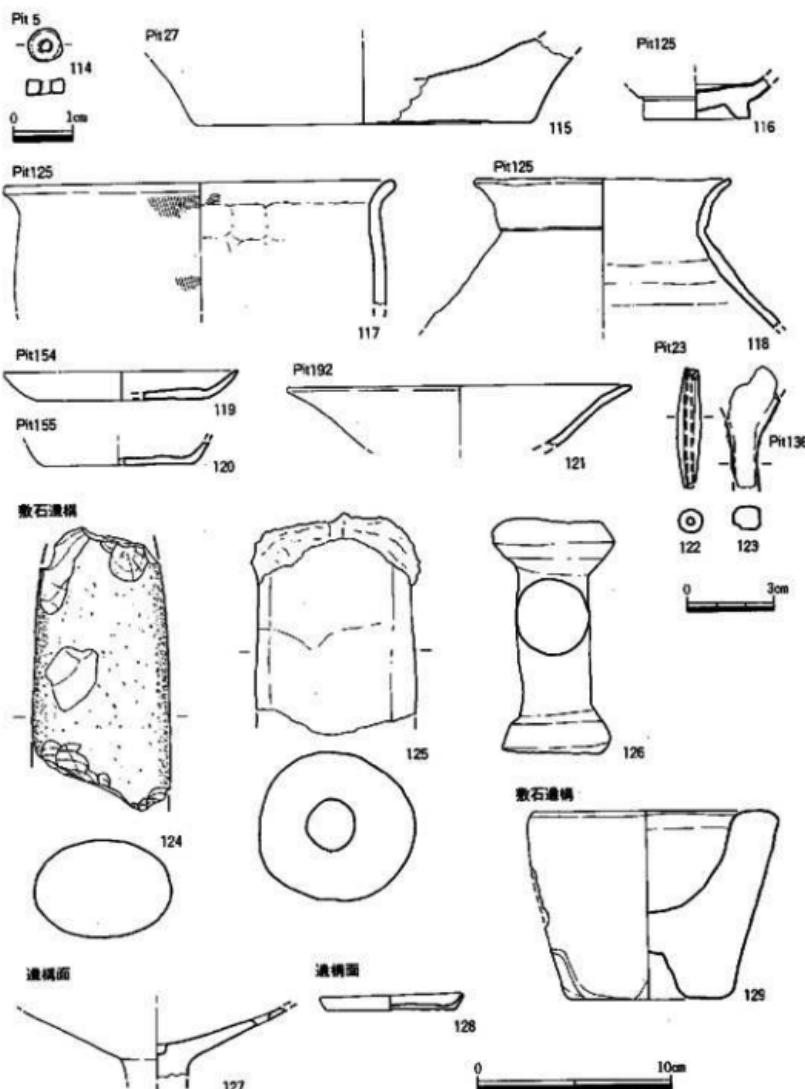


Fig. 27 ピット・敷石造構・造構面出土遺物 (縮尺1/3, 1/2)

113・114とともにピット No. 125の出土で、3号住居に伴うものであろう。

土器

高杯 (121) 口径17.7cmを測る口縁部片で、ほぼ直線的に外に向く。調整は不明で、胎土に長石・石英粒を含む。ピット No. 192の出土である。

皿 (119・120) 119は口径12.1cm、器高1.5cmを測る。体部と底部の境はやや不明確で、調整は不明である。120は口縁部を欠失し、底径7.7cm、推定器高1.4cmを測る。体部と底部の境の稜は明確である。調整は磨滅のためわからない。119はピット No. 154、120はピット No. 155から出土した。

瓦器

鉢 (115) 底部のみの破片で、全形はわからないが、鉢か甕であろう。器壁は約2.5cmと厚い。底径17.2cmを測り、調整は不明である。ピット No. 27の出土。

青磁

碗 (116) 碗の高台部片で、底径5.5cmを測る。外底部は露胎で、見込みに緑がかった灰白色の透明釉を施す。ピット No. 125の出土がある。

土製品

土鍤 (122) 両端の一部を欠失している。長さ4.1cm、幅0.8cmを測る。ピット No. 23の出土である。

鉄器

鉄鎌 (123) 全形は不明。現存長4.2cm、革の幅0.4cmを測る。ピット No. 136の出土。

玉

小玉 (114) 直径0.6cm、孔径0.15cm、厚さ0.25cmを測るガラス小玉である。色調はコバルトブルーを呈する。ピット No. 7の出土である。

石器

台形様石器 (130) 下部を欠失する。全体の調整はやや粗い。現存長2.2cm、最大幅2.8cm、厚さ0.5cmを測る。黒曜石製である。ピット No. 018の出土。(米倉)

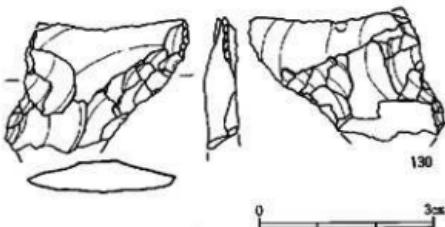


Fig. 28 ピット No. 018出土遺物 (縮尺1/1)

敷石造構・造構面出土遺物 (Fig. 27, PL. 20)

土器

高杯 (127) 壺部下半から筒部上端にかけての破片である。壺部は直線的に伸び、焼成後の穿孔が1ヶ所施される。また、壺の中心部分にも貫通しない。穿孔が施されている。

皿 (128) 口径7.5cm, 底径6.6cm, 器高0.8cmを測る。体部と底部の境は明瞭である。調整は磨滅のためわからない。高坏とともに遺構面の出土である。

土製品

ふいごの羽口 (126) 空体に取りつける部分の破片で、端部に鉄滓が付着している。径7.8cm, 孔径2.6cmを測る。敷石内から出土した。

窯道具

とちん (126) 陶製で、高さ12.3cm、受け部の直径6.3cm、軸部の直径3.8cmを測る。胎土はかなり粗い。敷石遺構からの出土である。

石器

石斧 (124) 刃部と頭部の一部を欠失する。ていねいに全面を敲打し、剝離痕は一部に残るだけである。最大幅7.1cm, 最大厚5.1cmを測る。玄武岩製で、敷石内の出土。

石製容器(129) 三足を持つ安山岩製の容器で、るっぽかと思われる。器高9.8cm, 最大幅14.4cm, 足の高さ2.3~2.6cmを測る。敷石遺構から出土した。
(米倉)

4) まとめ

検出した遺構は弥生時代の前期、古墳時代前期、中世後半に大別できるが、土坑の多くと3・4号溝などについては、所属年代が不明なものが多い。以下時期の明確なものについて各時代別に成果をまとめて述べていく。

弥生時代前期の遺構と環溝集落について

この時期の遺構は3号住居、1号貯蔵穴、1・3・7・15号土坑である。土坑はあと数基この時期に属する可能性がある。3号住居は径約7mの大形のものであるが、前述のように立て替えの可能性がある。中央に上坑とそのまわりに(4つの?)ピットを有し、柱穴を円周状に配する。第78次調査で検出した住居とはほぼ同形態を呈する。中間研志氏の分類によると、前期後半から中期に位置付けられる「発展松葉里型住居」に属する。

出土土器は小片が多く明確な分類をするまでに至らなかったが、堺で分類したように夜臼式(A類)、板付式(B類)に分けられる。板付式には、I式、II式の両者を含んでいる。いずれも小片がほとんどで分類できないものが多いため、量的な割合は把握しがたいが、特に傑出するものはなさそうである。ただし、大きめの破片は板付II式のものが多いことから、少くともこの時期以降に埋没したと考えられる。1号貯蔵穴と各土坑についても小片の土器ばかりのため明確ではないが、板付II式を含んでいることからほぼ同時期と考えてよいであろう。なお出土石器には、図示した以外にも多くの黒曜石製フレイク・チップ・不定形の石核があったが十分な整理ができなかったことを付記する。

有田遺跡における弥生時代前期の遺構は、第100次調査周辺と、小田部地区で3カ所検出されているが、100次周辺では以前から知られているように、夜臼式・板付Ⅰ式が共伴する環溝が存在する。しかし近年の調査状況や山崎純男氏の言うように、単に共伴というよりは、夜臼式単純期と板付Ⅰ式との共伴期に分かれる可能性が高そうである。またこの環溝からは板付Ⅱ式以降の土器は検出されていない。環溝の規模は300×200mと推定されている。

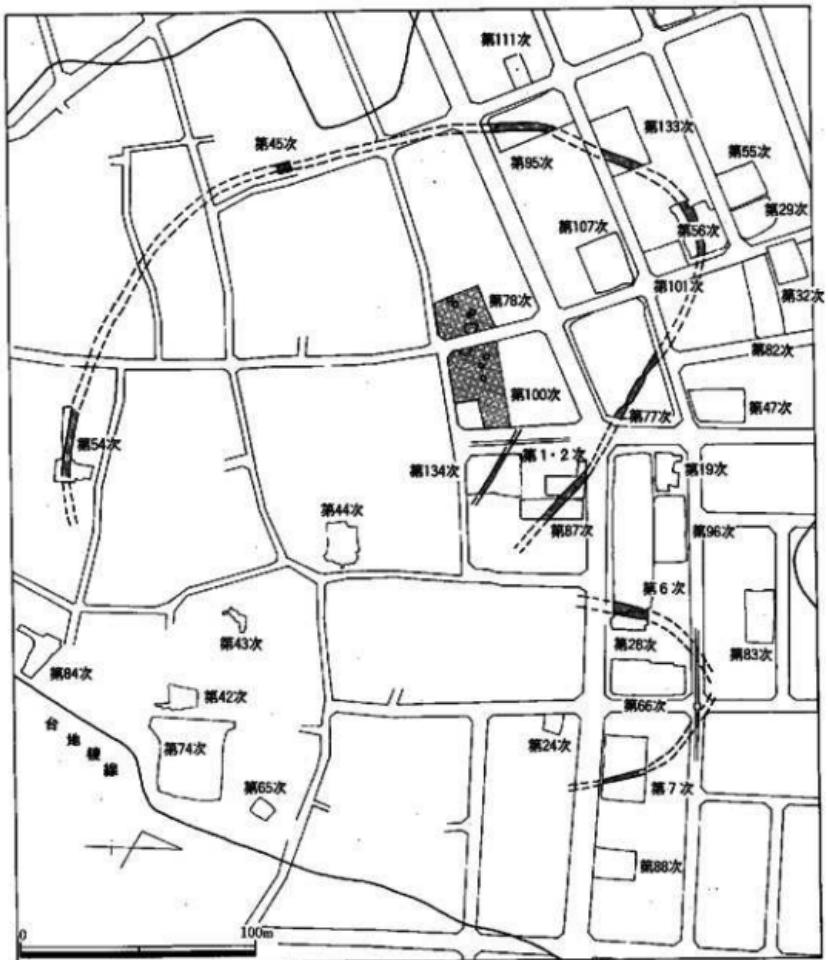


Fig. 29 環溝周辺の弥生時代遺構配置図（縮尺1/2,500）

この環溝（A溝とする）とは別に、さらに2本の環溝らしきものが検出されている。1つは第6・28次調査と第119次調査（下水道）で検出されているもので、A溝の東側に位置するものである（B溝とする）。長椭円形を呈すると思われ、長径は不明であるが、短径65~70mを測る。溝の断面形はV字形を呈する。出土土器は板付II式土器で、第28次・第119次では上層に終末から古墳時代初頭頃の遺物が出土した。もう1本は第123次（下水道）と第134次（本書掲載）で検出した溝で、A溝の内側に位置する（C溝とする）。まだ一部分の調査なので、全体の形状はわからない。断面形はやはりV字形を呈する。134次では板付II式が出土しているが、上層では後期以降に出上する石錘が出土している。つまり2本の溝とも板付II式の溝で、完全に埋没したのは弥生時代終末頃になる可能性がある。第78次・100次で検出した遺構群は、板付II式土器を含むことから、A溝ではなく、C溝に伴う可能性が強い。

各溝や集落の存続期間について単純に考えれば、A溝が廃絶された後、規模を小さくした2つの環溝集落に分かれたか、さらに途中で移ったかのどちらかであろう。各遺構の出土土器の検討で明らかになろうが、134次の溝の遺物量が少なく、今後の調査を待ちたい。ただし、小田部地区の弥生前期の遺構群が板付II式の時期であることと、環溝を掘るという作業量を考えれば1形式内で集落を移るということがかなり大変なことから、前者の方が理解しやすい。また前期以降についても、現在のところ環溝内では遺構がほとんどなく、集落自体が第3次調査地点に移ったのか、現時点では全く不明である。

(米倉)

古墳時代前前期の住居跡について

古墳時代の住居は3軒検出した。いずれも全形はわからなかったが、少なくとも、ベッド状遺構とが持ち、主柱穴は2本であるのはまちがいなかろう。このうち2号住居は炉・主柱穴・壁溝の約半分、入り口部と思われる土坑があるため復元可能で、有田遺跡における時期別の住居形態の変遷を考慮すると、壁溝の東側にある小土坑が入り口で、ベッドが入り口部を除いて四周するタイプであろう。時期的には、1号住居は布留式中段階併行期に含まれ、2・4号住居も前後する時期のものであろう。

(米倉)

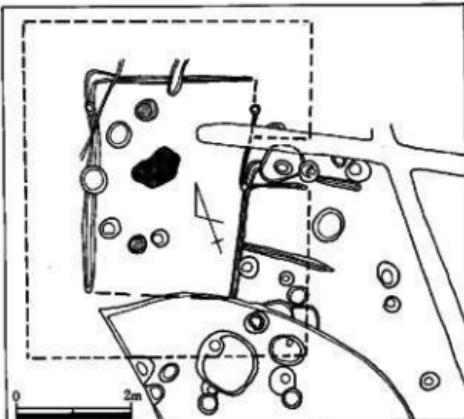
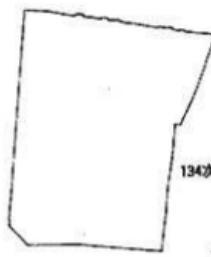
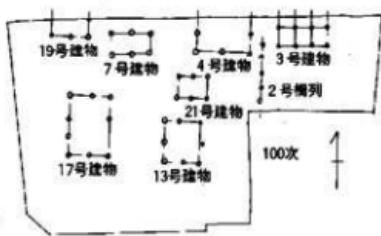
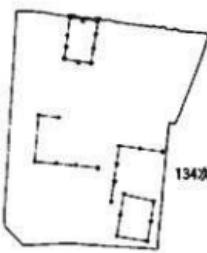
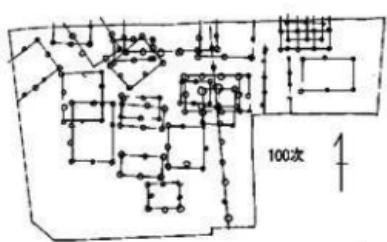
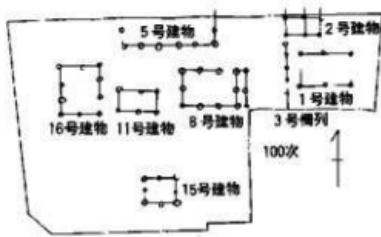


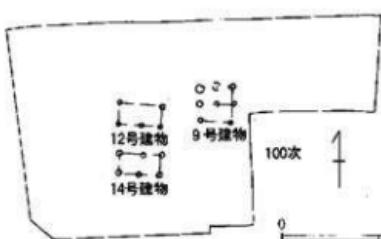
Fig. 30 2号住居推定復元図 (縮尺1/80)



I類



II類



III類

Fig. 31 第100次・134次建物類型図(1) (縮尺1/600)

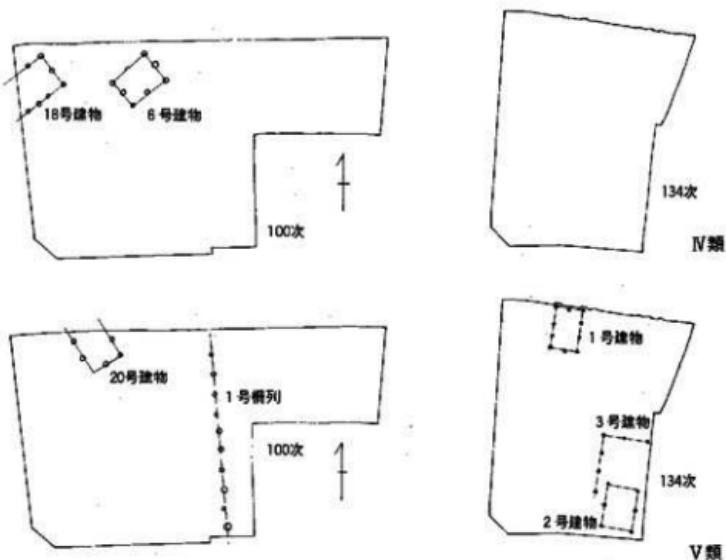


Fig. 32 第100次・134次建物類型図(2) (縮尺1/600)

中世の掘立柱建物について

中世の遺構は、2・10号土坑など土坑の一部、井戸1基、溝の大半、建物群がある。溝のうち、3・4号溝はさらに古い時期のものであるが、明確な時期は不明である。1・5・9号溝は小田辺城の濠で、時期的には15世紀後半から16世紀前半に収まる。井戸は直径3m弱の大きなもので、桶巻きの井筒が遺存していた。もっとも数の多い掘立柱建物は100次・134次調査地点で合せて24棟と柵列3条を検出した。100次調査地点では20棟の建物を確認したが、建物にはならないものの一列に並ぶ柱穴があり、実際にはもっと建物が建つと思われる。24棟の建物と3条の柵列を主軸方向、重複切り合い関係から整理すると5類型に分ける事が出来る。I類は2号柵列と4号・17号・13号・3号建物のようなやや大型の南北棟を主体とし、それに小さな1×2間の東西棟が伴う。II類は3号柵列と5号建物・8号建物のような大型の東西棟を中心とし、16号建物のような南北棟が伴う。III類は小屋の1×2間の東西棟と2×2間の南北棟の組合せである。IV類は主軸を北東から南西に取るもの。V類はその他の建物である。134次の建物は100次の建物より一般的に主軸を東へやや東へ振るか、全体にまとまりを持っている。各類型に属する遺構は以下のとおりである。

I類……2号柵列・3号建物・4号建物・7号建物・13号建物・17号建物・19号建物・21号

建物

II類……3号櫛列・1号建物・5号建物・8号建物・11号建物・15号建物・16号建物

III類……9号建物・12号建物・14号建物・134次4号建物

IV類……6号建物・18号建物

V類……1号櫛列・20号建物・134次1号建物～3号建物

これらの建物の時期は、柱穴からの遺物の出土が少ないので、決めかねる所があるが、各類の建物からそれぞれ中世の糸切の土器器皿、土師質土器・瓦質土器・15～16世紀頃の中国産青磁・白磁・染付片などが出土しており古くとも12世紀後半から15・16世紀頃の時期のものと考えられる。他遺構との関連を見れば15世紀頃の溝である1号溝と主軸方向がほぼ同じであり、何らかの関連があるかもしれない。各類それぞれの前後関係については、重複しているものの、切合い関係にあるものが少なく、6号建物が5号建物を、1号櫛列が9号建物を切っているのみであり遺物もほぼ同じ頃のものを含んでいる事から判断は難かしい。ただ以上の事からIV類はII類より新しく、1号櫛列と9号建物については1号櫛列が新しいと思われる。また1号建物・4号建物・6号建物・11号建物の柱穴から焼土ブロック、炭化物などが出土しており、火災に会っているかもしれない。当地域における建物群の詳しい検討については、周辺隣接地の今後の調査の結果に託し、今回は建物群の一応の傾向のみを述べておく

(山崎)

註

1. 中間研志「松荷里型住居」『東アジアの考古と歴史』岡崎敬先生退官記念事業会 1987
2. 山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究」「古文化論叢」鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会 1980
3. 福岡市教育委員会「第95次調査一小粘一」「有田・小田部」第7集 1986
4. 福岡市教育委員会「第64次調査一小粘一」「有田・小田部」第8集 1987

2. 第103次調査 (調査番号 8513)

1) 調査地区の地形と概要

申請地は福岡市早良区小田部3丁目3-14である。申請地はもともとの小田部の村中にあり、小田部地区台地で最も平坦面をもつ地域で、その標高は11~12mを測る。周辺では南側の第117次、西側の第14次、41次、東側の第105次調査などが行われ、中世から近世にかけての集落遺構が確認されている。

今回の調査は専用住宅の建て替えに先立って行った。調査対象面積は501m²で、実施面積は280m²で、調査は昭和60年10月4日から10月22日迄実施した。

遺構面は表上下20cmの鳥栖ローム層であり、その面に遺構が確認された。以前家屋が建っていた為か攪乱・削平がひどく遺構の残りは悪い。主な検出遺構は江戸時代と考えられる溝2条、土坑6基、井戸2基、掘立柱建物である。遺物は各遺構から近世以降の日常雑器が出上した。

2) 検出遺構

掘立柱建物 (S B)

図上で復元した。何棟かの建物が存在した可能性があるが、一番確実な1棟を図示する。

1号建物 (Fig. 34)

主軸をN-4°-Wに取る2×2間の掘立柱建物である。桁行全長3.15m、梁間全長2.65mを測る。四隅の柱穴は大きく、深くしっかりしている。柱穴埋土は黒褐色土でロームブロックを混入する。遺物は白磁の小皿などが少量出土した。倉庫または納屋のようなものか。

欄列 (S A)

1号欄列 (Fig. 34)

東西方向から南にL字形に延びる1×3間の欄列で、掘立柱建物の可能性もある。確認長は長辺で全長5.1m(17尺)を測る。柱穴径は24~36cm、深さは17~28であるが、一つだけ72cmと深い。柱穴埋土は黒褐色粘質土にロームブロックを混入。出土遺物はない。

2号欄列 (Fig. 34)

主軸をN-2°-Wに取る南北方向から西にL字型に延びる1×4間の欄列。確認全長は8.10m(27尺)を測る。1号建物と同一方向で、1号建物の目隠塀とも考えられる。柱穴径は38~45cm、深さは28~55cmである。柱穴埋土は黒褐色土に黄褐色ロームブロックを混入。遺物は白磁の碗(29)と小壺(30)が出土した。



Fig. 33 第103次調査遺構配図図 (縮尺1/300)

3号横列 (Fig. 34, PL. 21)

2号横列と平行し、南側の第117次調査区へ連なる。北側には門と思われる方形の柱穴があり、その一つから門礎と思われる長辺50cm短辺35cmの方形の礎石を検出した。横列の確認長は第117次分も合わせ30mを測る。門柱間は1.5m (5尺) である。門の柱穴は大きく門の柱穴以外は小さく、直径20cm、深さ5~25cmと浅い。出土遺物はない。

土 坑 (SK)

6基検出した。他に近・現代の擾乱穴も多い。

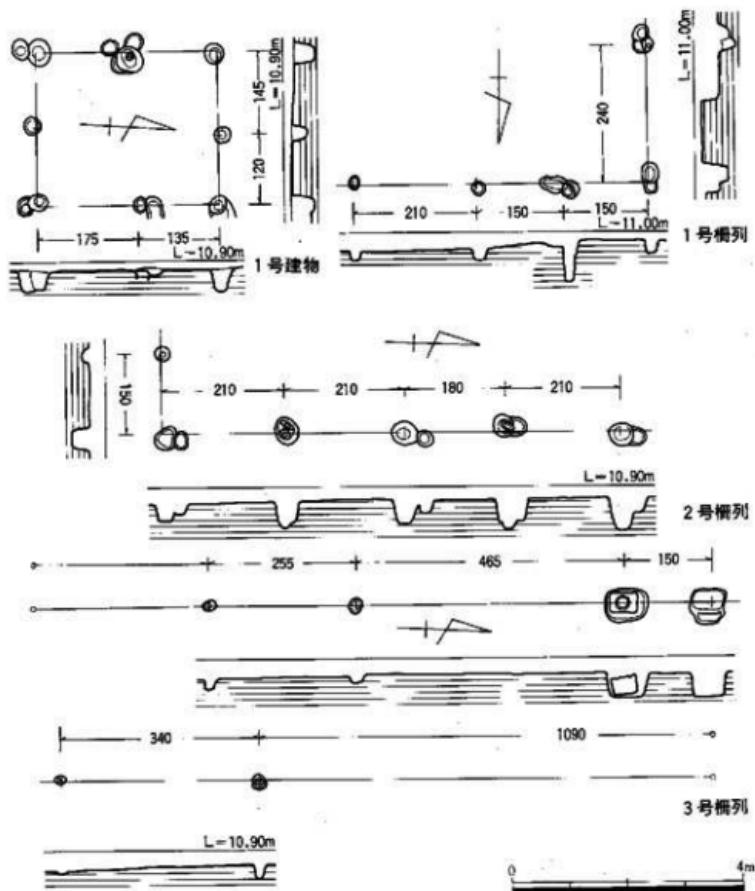


Fig. 34 1号建物, 1~3号横列 (縮尺1/100)

1号土坑 (Fig. 35)

直徑1.76mを測る不定形土坑である。削平により遺存が悪く、深さは4cm程度である。覆土は黒褐色土にロームブロックを混入。出土遺物はない。

2号土坑 (Fig. 35)

東西方向に主軸を取る平面形が略方形の土坑。床面は北側が一段深くなる。長辺0.8m、深

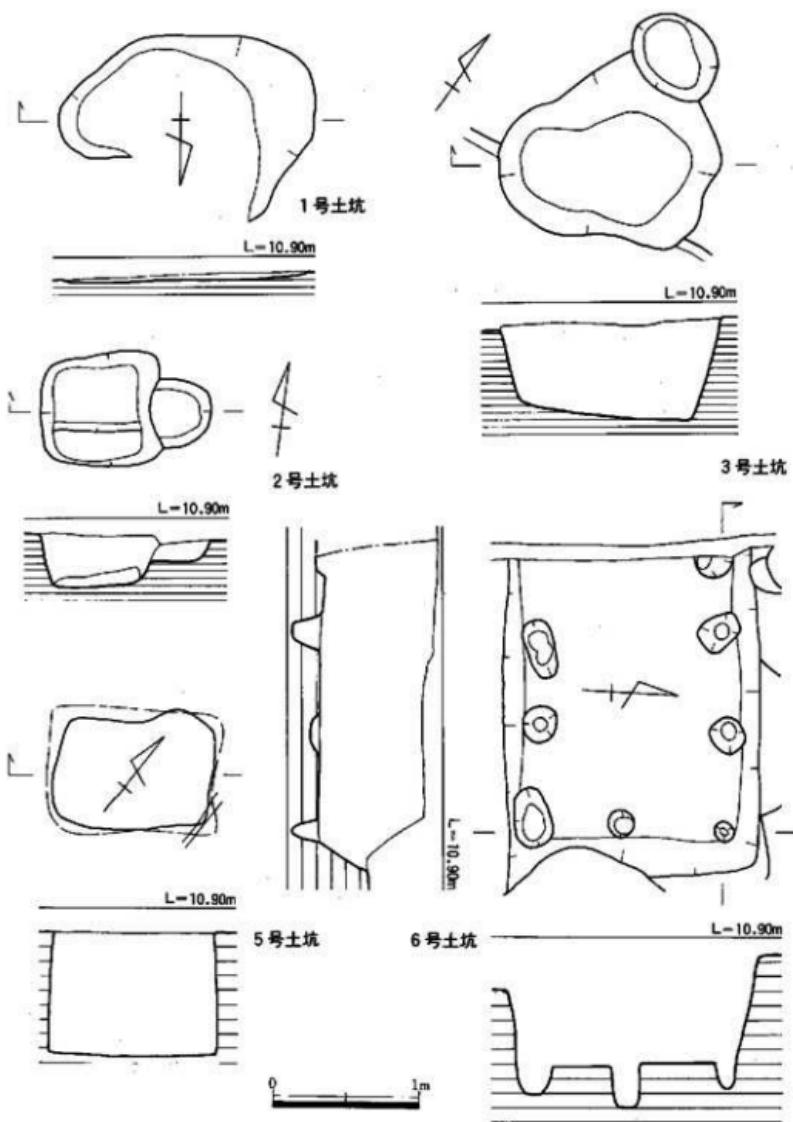


Fig. 35 1~3号, 5·6号土坑 (缩尺1/40)

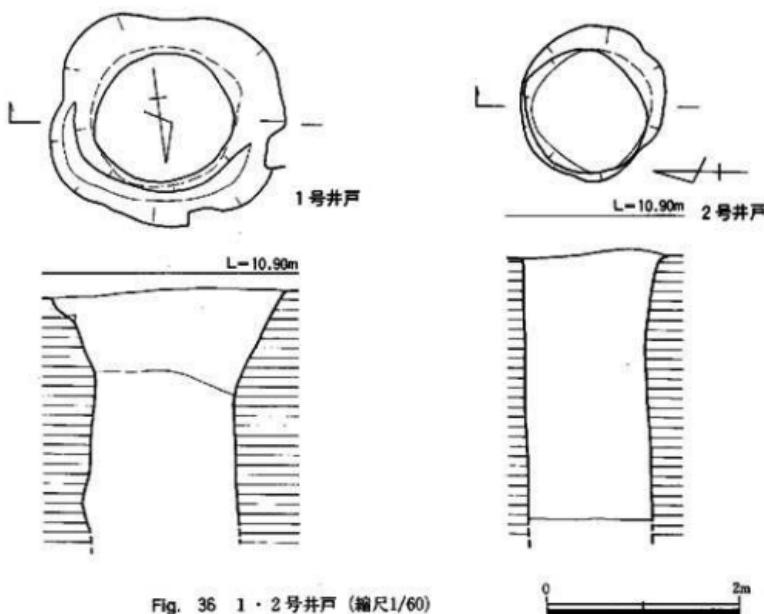


Fig. 36 1・2号井戸 (縮尺1/60)

さ0.38mを測る。遺物は関西系と思われる陶器細片が2点、瓦質土器、土師器細片が各1点出土した。

3号土坑 (Fig. 35)

主軸を北東に取る不定形の土坑。長辺1.52m、短辺1.38m、深さ0.72mを測る。断面は逆台形である。覆土は黒褐色粘質土に褐色ロームブロックを混入。19世紀以降の型紙刷の染付碗、摺鉢、高取焼の瓶、平瓦片などが少量出土した。

4号土坑

図示していないが3号横列に切られる楕円形の土坑で、直径0.8m、深さ0.36mを測る。覆土はローム混りの黒褐色土。遺物は関西系の片口鉢片が1点出土した。

5号土坑 (Fig. 35, PL. 22)

東側境界地で検出した。主軸を北東に取り、壁がやや袋状を呈す隅丸長方形の土坑。長辺1.1m、短辺0.82m、深さ0.86mを測る。覆土は柔らかい黒色土の單一層で、出土遺物はない。

6号土坑 (Fig. 35, PL. 22)

西側境界地で検出した長方形の土坑。確認長2.30m、最大幅1.78m、深さ0.82mを測り、逆

台形の断面を呈す。北壁沿に4ヶ所、南壁に3ヶ所、東壁中央に1ヶ所、深さ20~30cmのピットがあり、各壁沿に柱が立っていたと思われる。遺物は当初攪乱で遺構を取扱った為混乱し不明。しかし攪乱の遺物が江戸時代中期以降が中心である事から、それに近い時期と思われる。

井戸 (S E)

1号井戸 (Fig. 36, PL. 22)

調査区北側で検出した略円形の井戸である。上面で長径2.38m、下面で1.48m、深さ2.5m以上を測る。若しい湧水や、危険防止の為、完掘していない。2段掘りで、北側に狭いテラスを持つ。覆土は暗褐色や暗灰褐色粘質土を主体とし、各層にロームブロックが含まれていた。遺物は弥生時代の磨製石斧や明の染付、江戸時代の中頃にかけての陶磁器類が出土した。

2号井戸 (Fig. 36, PL. 22)

西側6号土坑と切合う円形の井戸である。直徑は上面で1.60m、下面で1.26m、深さ2.70m以上を測る。1号井戸と同様若しい湧水と安全対策の為完掘していない。壁はほぼ直立し、素掘りである。遺物は江戸時代中期から後期にかけての陶磁器、擂鉢、火舎、瓦などがあり、一部明治時代以降のクロム青磁などを含む。

溝 (S D)

3条検出した。3号溝は2号溝の一部と考え欠番とする。

1号溝 (Fig. 37, PL. 21)

調査区北側で検出した東西方向から南へ直に曲る小溝で、1号井戸あたりで消滅する。幅30~60cm、深さ20cm前後を測る。2号溝を切っている。覆土は暗茶褐色粘質土。遺物は比較的多

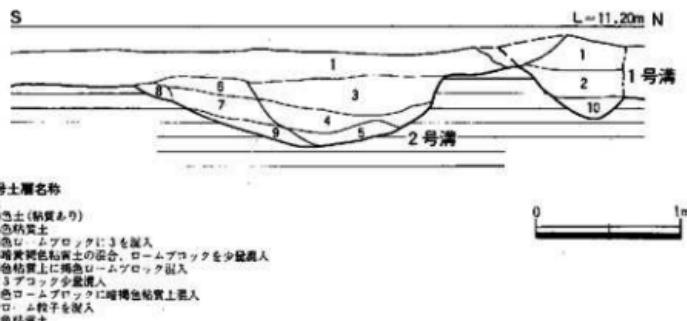


Fig. 37 1・2号溝西壁土層図 (縮尺1/40)

く江戸時代中～後期の染付磁器・陶器類が出土した。

2号溝 (Fig. 37, PL. 21)

調査区北側東西に貫流するが、西側境界地で少し南へ曲がる。幅1～1.8m、深さ40cm前後の溝である。調査区西壁の土層観察によれば一度埋没した後、再度掘り直されている。覆度は上層が黒褐色粘質土、下層は更にロームブロックを混入する。遺物は江戸時代中期位の陶磁器類を含むが、1号溝より量は少ない。

4号溝

東西方向の長さ2.8m、最大幅0.4m、深さ8cmを測る浅い小溝である。遺物はPit. 9出土の溝縁皿と同一個体と思われる唐津の溝縁皿片、陶器片が数点出土した。

3) 出土遺物

1号建物出土遺物 (Fig. 42)

白磁

皿 (28) 唐津系の白磁の溝縁皿で、口径は11.8cmを測る。色調は灰白色、焼成は良好。

2号溝出土遺物 (Fig. 42)

白磁

碗 (29) 復元口径7.2cmを測る、光沢を持つ白磁で、器壁は薄くシャープ。焼成は良好。

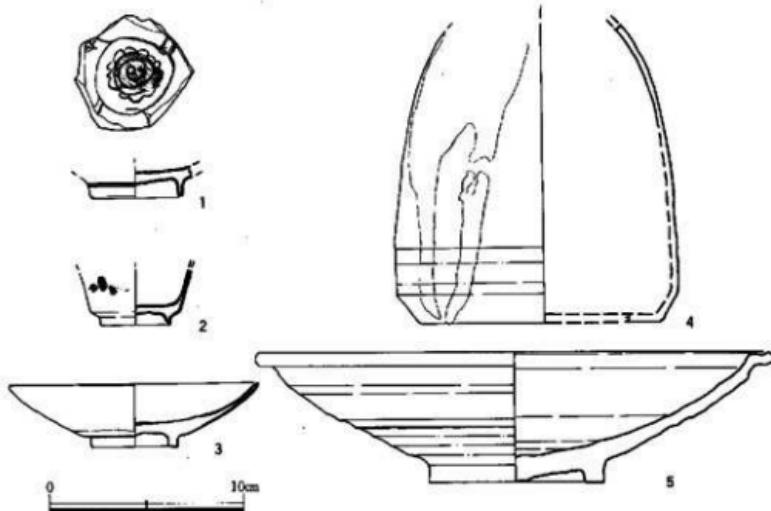


Fig. 38 1分井戸出土遺物 (縮尺1/3)

小坏 (30) 底径1.8cmを測り、高台は削り出す。青白色を呈す。

3号土坑出土遺物 (Fig. 42, PL. 24)

染付

碗 (31) 型紙摺によるもので、龍と草花を描く。口径は9.8cmを測る。

陶器

瓶 (32) 地元産で高取系と思われる。外面の色調は暗い黄緑褐色を呈し、内面に鉄火を塗る。

1号井戸出土遺物 (Fig. 38, PL. 23)

染付

碗 (1) 明代末頃の染付の底部片である。見込みにデフォルメされた花が呉須で描かれる。

小坏 (2) 肥前磁器で体外面に呉須で秋草 (?) を描く。焼成は良好。

白磁

皿 (3) 復元口径12.8cm、器高3.3cmを測る。高台部は削り出す。見込内面は蛇ノ目状の釉のかき取りを行う。色調は淡青色を呈す肥前磁器である。

陶器

瓶 (4) 高取系で、体下半から底部はヘラケズリ調整。灰釉の上に緑灰色の薺灰釉がかかる。

皿 (5) 高取系の大型皿で、口径26.6cm、器高6.7cmを測る。口縁部は溝縁を呈し、高台は削り出す。外面に桃褐色釉がかかる。17世紀前半頃である。

銅錢

寛永通寶 (42) 上層より出土。直径2.2cmを測る。

2号井戸出土遺物 (Fig. 39, PL. 23)

白磁

瓶 (6) 徳利の可能性もある。肥前磁器で、底径6.8cmを測る。器壁はうすく、外底部に「七ト」と読める墨書があり、1ヶ所穿孔されている。

青磁

小坏 (7) 濱戸のクロム青磁の猪口で、新しく明治時代から大正時代にかけてのもの。

陶器

鉢 (8) 片口鉢と思われる。口径21.2cm、器高10.6cmを測る。高台から外底部は露胎。それ以外は淡黄緑色釉が薄くかかる。見込内面にかま道具痕が残る。高取系のものであろう。

油壺 (9) 下膨れの徳利形で、体部上面に把手がつく。口縁下に受皿がつく。褐色釉がかかり、全体に光沢がある。

急須瓶 (10) 注口を持つ、急須瓶の体下半部片である。体外部上面は飛びカンナで光沢を持った淡黄色の釉が薄くかかる。外面は煤か厚く付着する。

壺 (11) 口縁部片で復元口径は24.2cm。口縁部に2条の太い凹線があり、明褐色釉がかかる。

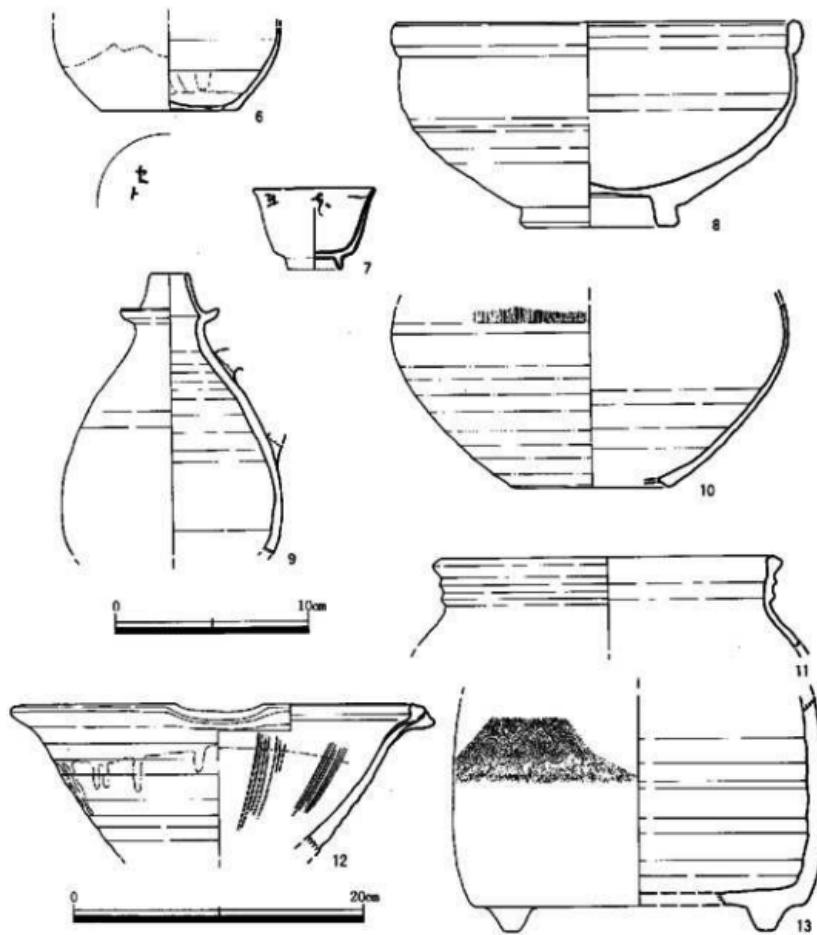


Fig. 39 2号井戸出土遺物（縮尺1/3, 1/4）

摺鉢（12） 1/3片で口径28.4cmを測る。片口で内面に7本単位の条線が入るが、使用により著しく磨滅している。口縁部内外面に黒褐色の鉄突がかかる。体外面には自然釉がかかる。唐津焼である。



Fig. 40 1号溝出土遺物 (縮尺1/2, 1/3, 1/4)

瓦質土器

火舎 (13) 1/4片で復元底径22.6cmを測る。底部には高さ1.7cmの足が1ヶ所残るが、全体では3ヶ足がつくと考えられる。外面は灰黒色、内面は黄灰色を呈し、使用により熱変化を受けている。体外面上部には雲文がスタンプされる。

1号溝出土遺物 (Fig. 40, PL. 23)

染付

碗 (14・15) いずれも肥前系で、内底見込みに昆虫文が入る。15は広東碗である。

薺麦猪口 (16) 口径6.1cmを測る。内底見込みに荒穢文が、体外面に山水が描かれる。底部は蛇ノ目高台である。焼成はやや不良、肥前磁器である。

陶器

瓶 (17) 高取焼の口縁部片で、口径5.4cmを測る。黄緑色の薺灰釉がかかる。

徳利 (18) 唐津焼の徳利の底部が抉り込んでいる底部片である。底径7.6cmを測る。

摺鉢 (19) 口縁部は丸く折り直され、玉縁状を呈す。復元口径28.6cmを測る。9本の条線があり、内外面褐色の光沢を持つ釉がかかる。上野焼と思われる。

壺 (21) 大型壺の1/2片で、復元口径31.8cmを測る。褐色釉の上に青白色を呈する薺灰釉がかかる。口縁直下に1条の沈線と麻手状の2条の沈線が廻る。高取系と思われる。

土製品

土玉 (20) 直径2.8cmを測る素焼の丸玉で、直径0.5cm、深さ1.4cmの丸い穴が1ヶ所穿孔されている。色調は淡桃色を呈し、固く焼成は良好。

土師質土器

壺 (22) 頸部復元径24.6cmを測る大形壺で、壁厚も1.2cmと厚い。内外面横又は斜めの刷毛目調整、色調は暗褐色を呈し、胎土はわずかに砂粒を含む。

2号溝出土遺物 (Fig. 41, PL. 24)

白磁

小皿 (24) 肥前磁器で紅皿と思われるもの。復元口径6.2cmを測る。色調は青白色を呈す。

染付

碗 (23) 肥前のくらわんか茶碗である。体外面に草花文、見込みに花文を描く。

皿 (25~27) 25は深皿というべきもので、口径19.0cm、器高6.6cmを測る。体外面は唐草、内面見込みは菊花と笹を配した草花文を描く。高台内に「渦巻字銘」が入る。色調は青白色を呈す。26は口径12.8cm、器高3.3cmを測る。体外面は唐草、見込みに笹と雪輪のような文様を描く。27は型打成形による輪花の大皿で、体外面は唐草、見込みは唐草文様と窓絵を描く。高台内面には「大明成化年製」銘が入り、ハリ支えである。いずれも肥前磁器である。

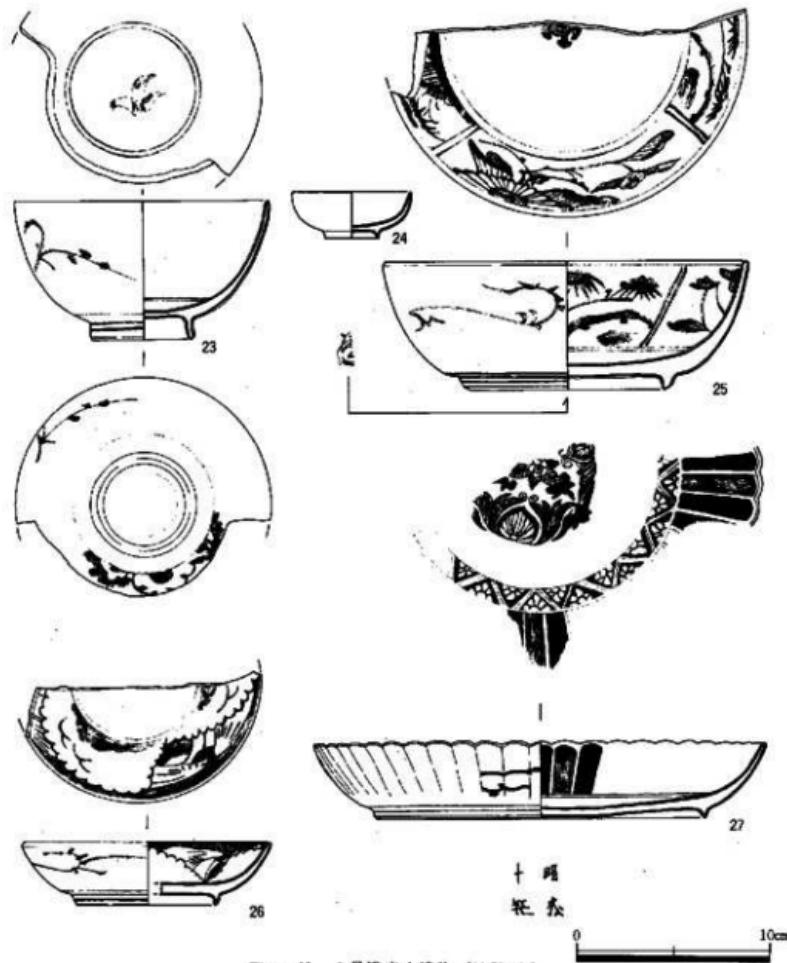


Fig. 41 2号清出土遺物 (縮尺1/3)

Pit 及び表土・攢乱出土遺物 (Fig. 42・43, PL. 24)

33・36はPit 2, 35はPit 10, 34・37-39はPit 11, 40・44・45は表土・攢乱出土である。
なお他に表土から蹄鉄の出土もある。

第103次調査

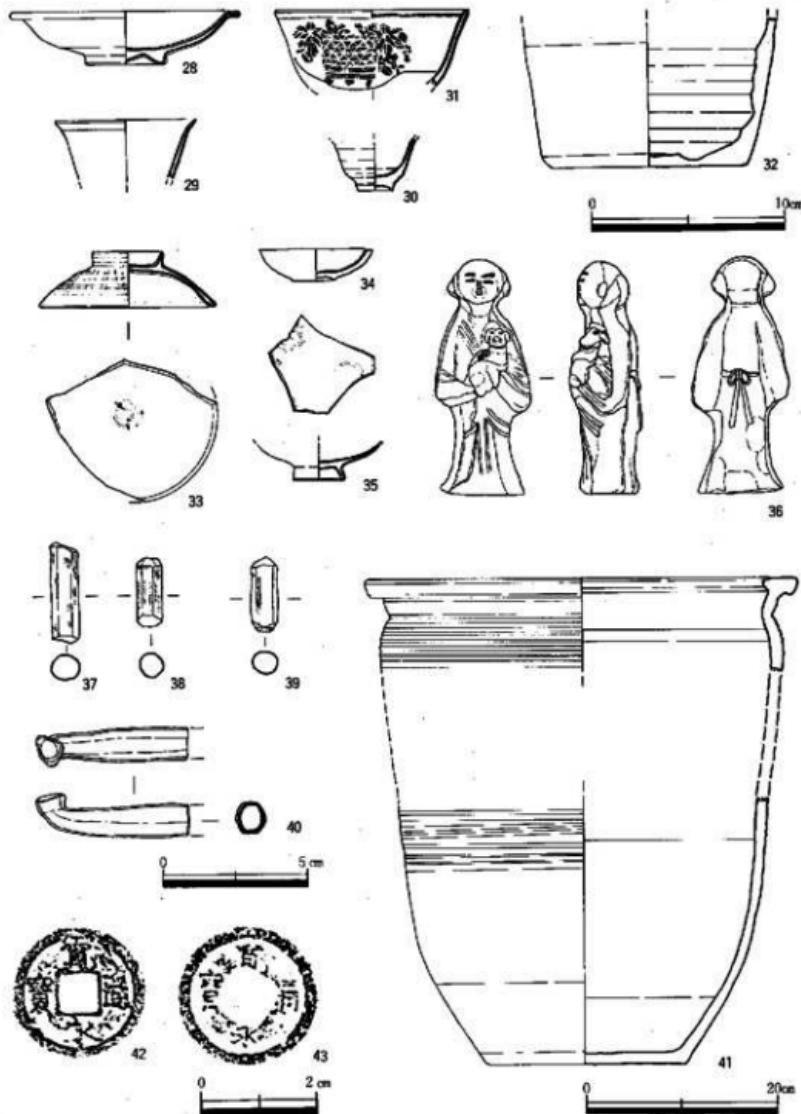


Fig. 42 1号建物・2号横列・3号土坑・ピット・表土・機乱出土遺物
(縮尺1/5, 1/3, 1/2, 1/1)

染付

蓋 (33) 口径9.0cmを測る。内面見込みに3弁の花文、外面は格子目文様である。

白磁

小杯 (35) 内面に金色で三ヶ月、青と金色で花を描く。焼成は良好。

紅皿 (34) 外面はタコ唐草文様風に凹凸が入る。完形で口径5.8cmを測る。灰白色を呈す。

土師質土器

壺 (41) 大型の素焼の壺で、口径44.8cm、器高は推定で50cmである。口縁部は鋸先状を呈し、

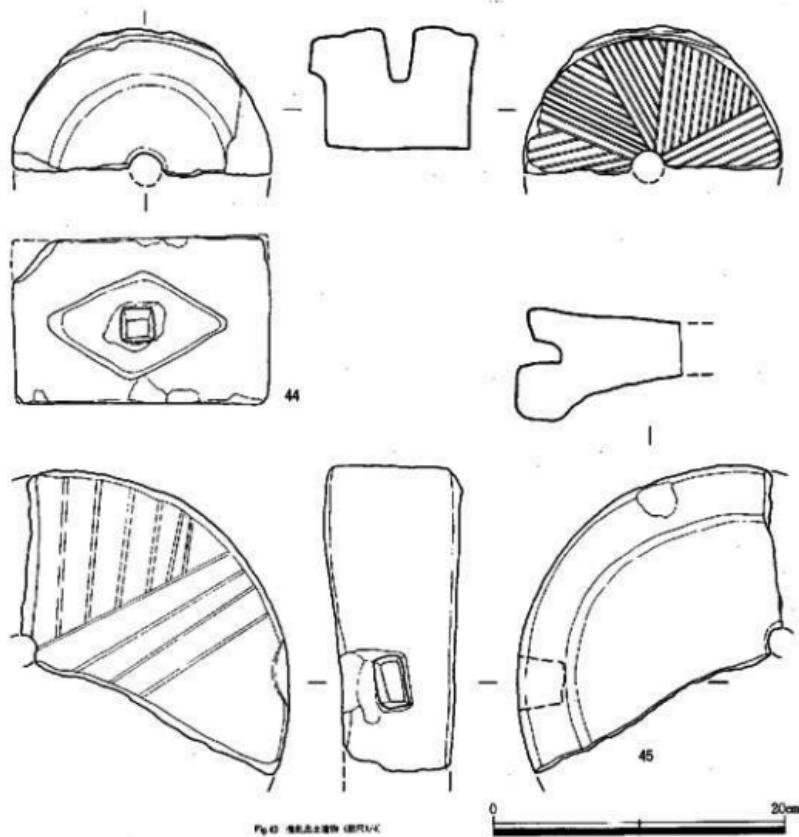


Fig. 43 掘出出土遺物 (縮尺1/4)

肩部には粗い沈線が何条も廻る。近世の埋甕であろう。

土製品

人形 (36) 軟質で色調は灰白色を呈し、やや風化する。和装で胸に耳の長い洋犬らしき犬を抱いている。茶・緑・黒色などが部分的に残る。底に台に固定する為の穴があいている。胎土・焼成は良好。器高は8.1cmを測る。土人形の一種であろう。

石製品

石墨 (37~39) 滑石製で略円形の断面を呈する。各側面は削りのち研磨で、面取りする。37は全長3.5cm、直径0.9cm、38は全長2.4cm、直径0.8cm、35は全長2.5cm、直径0.8cmである。

石臼 (44・45) 44は茶白の上白片で、8分画8主溝、副溝の数は8~11本とばらつく。直径17.1cm。器高11.6cmを測る。芯棒孔径は2.2cm、挽木装着孔の周辺は菱形状に浮彫りする。45は6分画6主溝の上白片1/3片である。復元直徑は30cm、上面に受け皿がつき、供給口がある。側面には挽木装着孔がやや斜めに穿たれている。溝は使用により磨滅が著しい。いずれも凝灰岩製。

銅製品

煙管 (40) 頂部部分で、残存長5.2cmを測る。管内に木質の柄が残る。

銅鏡

寛永通寶 (43) 直径2.3cmを測る。銘はやや細く弱い。包含層出土。この外にPit 2より図示していないが1点出土している。

4) 小 結

以上調査の概要について述べた。ここでは調査区が狭いため、充分な検討は出来ないが、隣接する第117次調査区の成果と考え合わせてまとめとしたい。

さて今回の調査で検出された遺構はFig. 44に示しているが、その時代は江戸時代中期18世紀以降である。各遺構の中では1号井戸と2号溝が一番占く遺物から見て、18世紀中頃と考えられる。聞くところによると調査区には明治初め頃迄家が建っており、2~3度火災を受け、その後南側の第117次調査区に家を建て替えたという事である。このことからすれば、2号井戸は明治時代に埋立てられており、その家に伴っていた可能性がある。現在、第103次調査区西側は別の家の敷地になっているが、明治初め頃の2~3代前、江戸時代後期(18世紀末~19世紀初頃)には西側隣地を合わせて一つの大きな屋敷があったという事である。ただ北側の境界はその頃から変わらず、別の屋敷地があったという。また、調査区の東側には第117次調査で検出したが、南側の谷に向って流れる排水溝が昭和の初め頃迄あり、その後埋立てられたという。このことから調査区の北側で検出した2号溝は北側隣地との境界を示す溝であり、第117次調査区の1・2号溝へ連なる事が考えられ、一つの屋敷地の区画が想像出来る。調査区

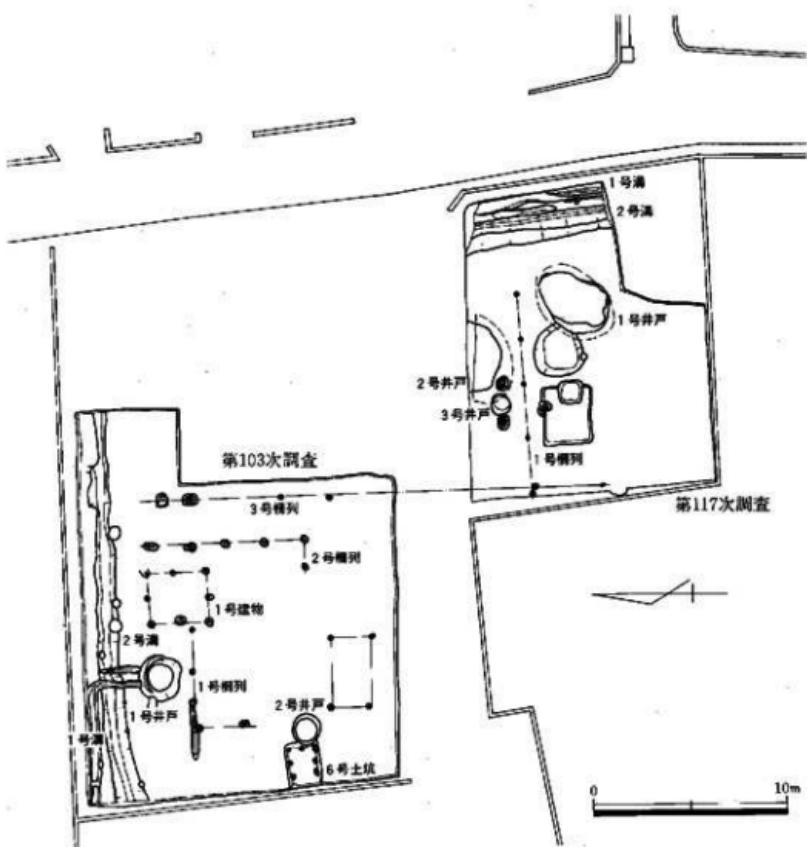


Fig. 44 第103・117次調査主要遺構配図図 (縮尺1/300)

の東側で検出された3号構列の礎石は、屋敷の東側入口だと思われる。江戸時代小田部地区は福岡城近郊の純農村であるが、当地点検出の遺構や遺物から見て、比較的経済的にゆたかな農民層の住居であったと思われる。今回は紙面の都合もあって、はなはだ不充分なまとめとなつたが、今後の調査例の増加を行って再度検討を行いたい。そして、今後の調査については近世・近代の遺構についても注意する必要がある。

3. 第130次調査 (調査番号 8739)

1) 調査地区の地形と概要

申請地は福岡市早良区小田部2丁目185-2番地にある。調査対象面積は345m²、調査実施面積は293m²である。調査区周辺は北西側と北東側から谷が切り込んでおり、台地の幅は100m余と有田・小田部地区で最も狭くなっている。調査前は空地であるが、昭和50年ごろ迄昭和初めに建られた家屋があったという。標高は11~12mを測る。今回の調査は専用住宅建設に先立ったもので、昭和62年11月28日から12月26日迄実施した。

調査区周辺では昭和56年に第52次、60年に第105次、62年に第122次調査が実施され、古墳時代後期を中心とする遺構・遺物が検出されている。当地点は以前民家が建てられていた為か、擾乱が著しかった。遺構は40~50cmの表土・擾乱層の下に検出された。遺構面は明褐色ローム層である。各遺構の時代は主に中世から近世にかけてで、中世より古い遺構は遺物からわずかPit 11, 14だけである。恐らく中世以降の度重なる造成で消滅したものと考えられる。主な検出遺構は中世溝1条、近世焼土坑3基、井戸2基、土坑、太平洋戦争時の防空壕3基である。遺物は擾乱や近世、近代の土坑からレンガ、瓦などコンテナ10箱程出土した。

2) 遺構各説

焼土坑

いずれも調査区のはば中央で検出した。調査では上坑として取扱い、その番号は1号焼土坑がSK 03、2号焼土坑がSK 04、3号焼土坑がSK 05である。

1号焼土坑 (Fig. 46)

略北に主軸を取り、平面形は北側がふくれた洋梨形を呈す。最大長63cm、最大幅43cm、最大深26cmを測る。断面は逆台形を呈す。覆土は明黄褐色ロームブロックで、底に炭化物が見られた。北・東西壁は赤く焼けてはいたが、固くしまってない。唐津系と思われる陶器細片や、染付磁器の小片が各1点出土した。

2号焼土坑 (Fig. 46)

南東に主軸を取り、平面形は不整格円形を呈す。最大長75cm、最大幅54cm、深さ11cmを測る。覆土は焼土ブロックで炭化物を多く混入する。西側半分に特に炭化物・焼土が厚く堆積していた。遺物の出土はない。

3号焼土坑 (Fig. 46)

主軸を略北に取り、平面形はやや俵形の梢円形を呈す。最大長68cm、最大幅40cm、最大深11cmを測る。覆土は暗灰褐色土である。北側半分に灰層が見られ、その下は部分的に壁面が焼けて

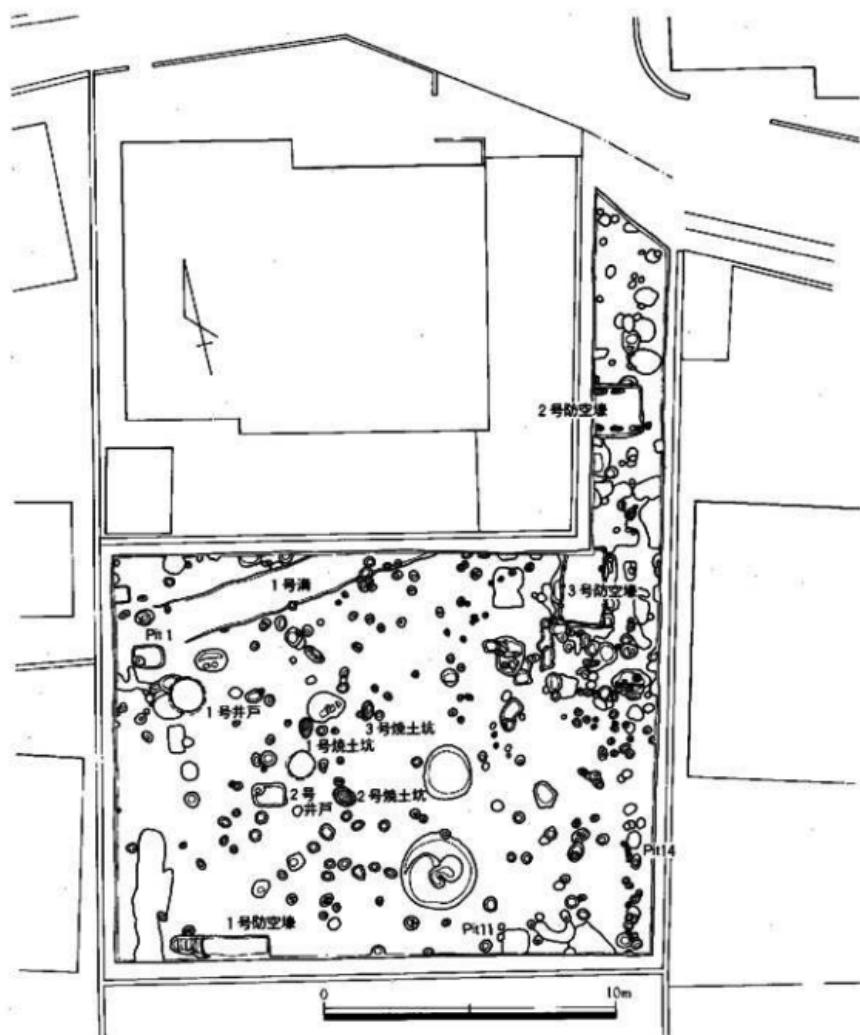


Fig. 45 第130次調査遺構配置図 (縮尺1/200)

いる。遺物は陶器の細片が1点出土した。

溝 (SD)

1号溝 (PL. 26)

北側境界地で検出した東西方向の浅く、残りの悪い溝である。この溝の延長上の通路部分ではこの溝の続きを確認しておらず、溝が消滅するのが北へ曲って行く事が考えられる。調査区での確認長は10m、幅1.3m、深さは10cmで、覆土は淡黒色土である。遺物は糸切りの土解剖の繊片、砥石小片などが22点出土した。

土坑 (SK)

すべて近代のもので、今回は報告しない。

井戸 (SE)

いずれも調査区西側で検出した。著しい湧水と危険防止の為完掘は出来ず、井筒の構造は不明である。

1号井戸 (PL. 27)

円形で直径は1.2mを測る。素掘りで、完掘していないが深さは3m以上ある。埋土は上層が黄褐色ロームブロック、下層が褐色粘質土である。遺物は近代の半瓦や土管などが出土した。

2号井戸 (PL. 22)

円形で直径1mを測る。素掘りで、深さ2mのところで内側に抉り込み、そのあたりが涌水点と考えられる。埋土は1号井戸とは同じ。遺物は近代の瓦や常滑産の土管などがある。

防空壕 (SX)

3基確認した。しかしいずれも調査区外に一部がかかり、全体が明らかではない。1号防空壕はSX 01、2号防空壕はSX 07、3号防空壕はSX 08である。

1号防空壕 (Fig. 47, PL. 26)

調査区南側境界地で検出した。確認長3.40m、確認幅0.76m、深さ1.26mを測る。北西隅に

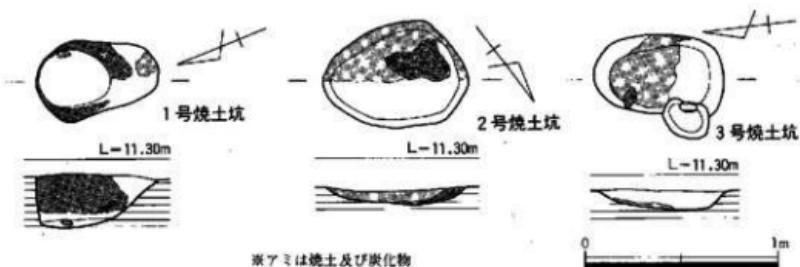


Fig. 46 1~3号焼土坑 (縮尺1/30)

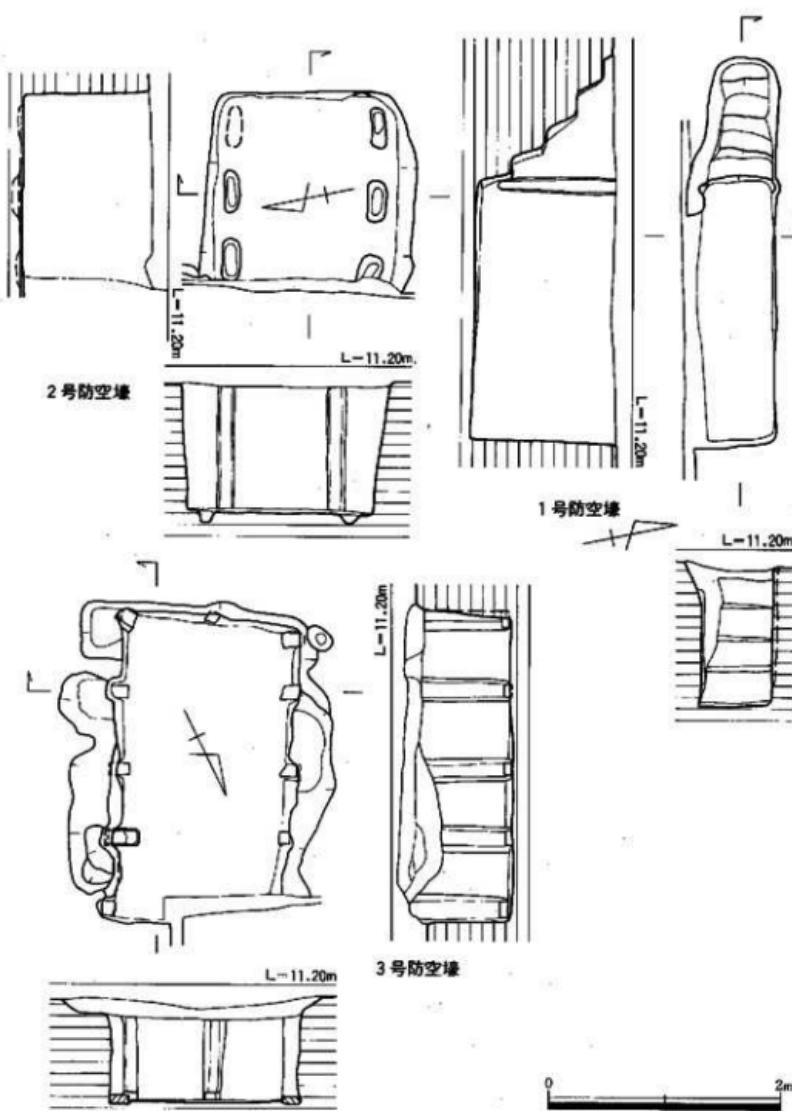


Fig. 47 1~3号防空壕 (縮尺1/50)

入口部と思われる階段がつく。躍上22~26cm、踏面14~20cm、幅40~56cmと狭く急な階段である。階段は5段分確認した。最終段部分の両側に幅約10cmの柱を建てた痕跡が残る。覆土は黄色褐色ロームブロックを主体とし、一時期に埋没した状況を示す。遺物の出土はない。

2号防空壕 (Fig. 47, PL. 26)

通路部で検出した。西側は調査区外であるが、現状では隅丸方形を呈す。現存長1.74m、現存幅1.82m、深さ1.12mを測る。床面の南北両壁沿いに深さ5~8cmの細長い梢円形のビットが3対検出された。また東壁に幅約10cmの柱材を立てた痕跡が残る。遺物は瓦や常滑産土管、ガラスビン、磁器類などがある。

3号防空壕 (Fig. 47, PL. 26)

調査区北側で検出した。最大確認長2.70m、最大幅1.70m、深さ0.90mを測る。東西両壁に5ヶ所ずつ幅10~12cm柱を立てた掘込みが残り、その下に長さ10~16cmの赤レンガを基礎として敷している。出入口は北からと思われる。埋土は暗褐色土と黒褐色の混合土である。遺物は瓦や染付磁器の細片をわずかに含む。

3) 出土遺物

1号焼土坑出土遺物 (Fig. 49)

磁器

皿(9) 復元口径9.6cmを測る。染付の小皿の小片である。見込みに舟彫による3条の圓線が入り、蛇の目状に釉をかき取る。胎土は白色で精良、焼成もよい。

2号井戸出土遺物 (Fig. 49, PL. 27)

染付

皿(10) 角形の小皿で、口径8.0cmを測る。型打成形により、見込み中央に梅花が打上される。凹んだ部分に濃紺のコバルト釉がかかり、明治時代以降の所産と思われる。

2号防空壕出土遺物 (Fig. 48, PL. 27)

磁器

碗(1~3) 1は口径8.2cm、2は口径8.3cmを測る小型の湯呑み碗である。いずれもコバルト釉による型紙刷りである。3は口径11.2cmを測り飯碗と思われる。山と桜(?)がコバルト釉で描かれる。

皿(4) 口径13.6cmを測る。波間に日の出、天に兎が跳ねる日出たい絵柄である。波と日の出は型紙刷り、兎は筆書きである。波は水色、太陽は淡桃色、日の輝きと兎は淡緑色である。

瓶(5) 仏花瓶で器高11.6cmを測る。肩部に2頭の狛犬がつき、体部に菊花が描かれる。かなり色あせているが、黄色、緑色、銀色、青色など色彩は豊かである。

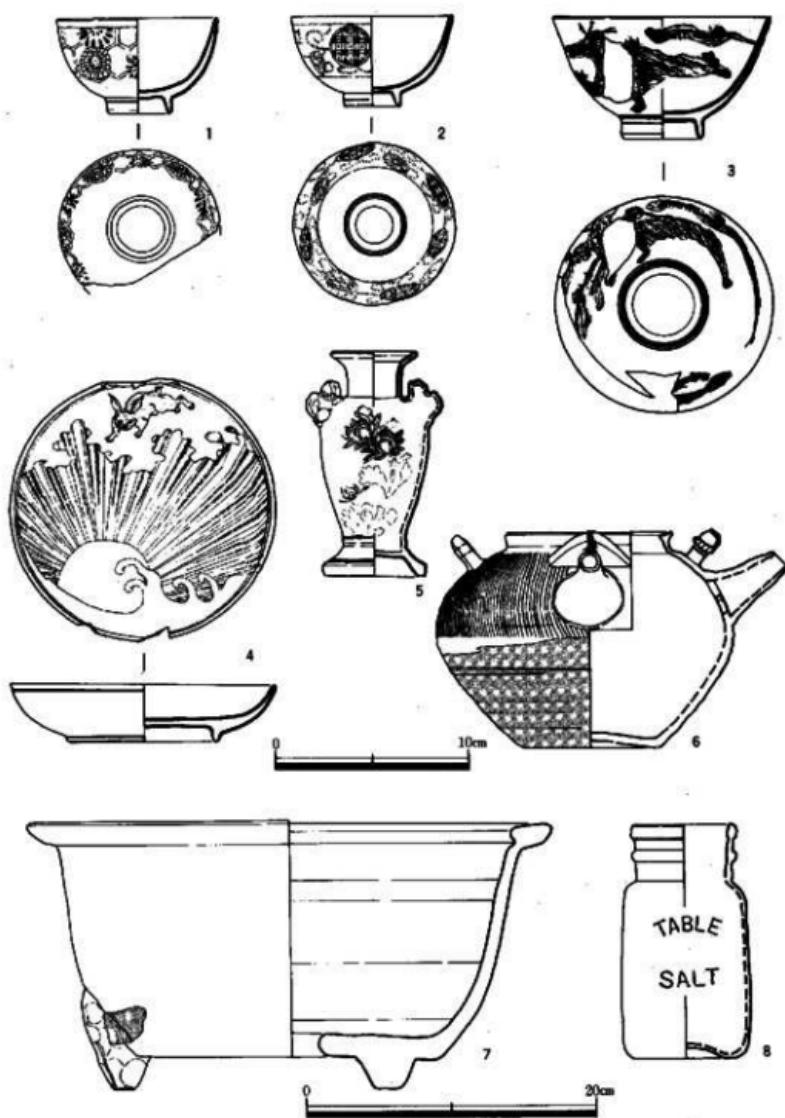


Fig. 48 2号防空壕出土遺物 (縮尺1/4, 1/3)

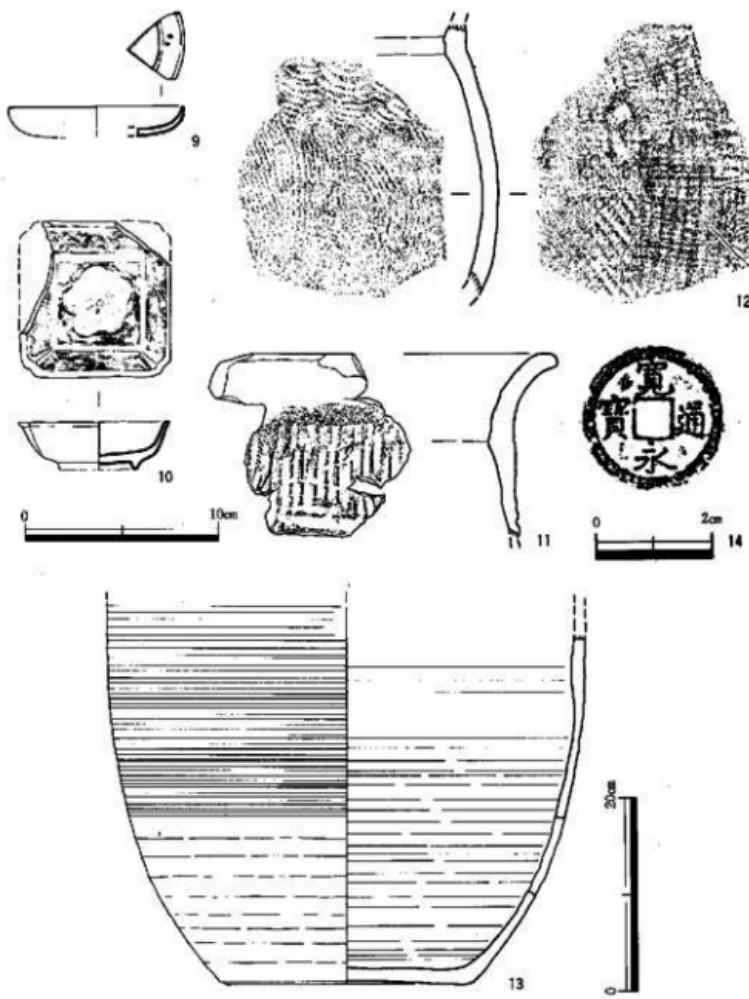


Fig. 49 1号焼土坑・2号井戸・ピット・遺構面出土遺物（縮尺1/6, 1/3, 1/1）

陶器

急須瓶（6） 口径8.4cm、器高11.0cmを測り、口縁下に1対の耳とその下に1ヶ所注口がつく。体部上半には光沢を持った黄褐色の釉がかかり飛カンナが入る。体部下半は煤が厚く付着し、

底部は剥落している。

土師質土器

横木鉢（7） 口径36.0cm、器高18.5cmを測り、ほぼ完形である。底部中央に直径4.7cmの孔がある。底部には3ヶの支脚がつく。一部支脚に鉄片が接着している。焼成は良好。

ガラス製品

ビン（8） 食卓壇の角ビンであり、底部が上底となる。

ピット・遺構面出土遺物 (Fig. 49, PL. 27)

土師器

壺（11・12） 11は口縁部小片で、直立気味の体部から大きく外反し、肥厚する口縁部を持つ。体部外面はタテ方向の粗い平行叩き、内面は摩滅が著しい。色調は暗褐色、胎土は砂粒を多く混入。ややもろい。口縁の形態から奈良時代頃のものであろう。12は長胴気味の胴部片である。外面は不整方向の木目直交の叩き、内外は木目直交の叩きや同心円状の叩きを加える。内面はあて痕が残る。色調は赤褐色を呈す。11はPit 11, 12はPit 14出土。

陶器

壺（13） 大形の壺で、現存高39.2cmを測る。内外面にくすんだオリーブ色の灰釉がかかる。内外底面に目アトが残る。体部下半に直径8.0cmの穿孔がある。Pit 1出土。

銅鏡

寛永通寶（14） 直径2.4cmを測り、背面に「文」の字が入る。寛文8年（1668）江戸所鑄鏡と思われる。

4) 小 結

以上調査の概要を述べた。ここではそれらについて若干のまとめを行いたい。当地点において遺構は、Pit 11, 16を除けば大きく2期に分ける事が出来る。I期は1号溝に代表される中世の時期。II期は溝以外の大部分の遺構の時期、近世から近代に至る時期である。I期の溝について遺物が少なく、時期を決定しうるものもなく、断定出来ないが、糸切りの土師皿細片を含むから、12世紀以降が考えられる。しかし近世陶磁器片を含まずそれ程新しくはないようである。II期は井戸、焼土坑、防空壕、土坑などの近世から近代の時期である。焼土坑については遺物がほとんどなく時期決定はむずかしいが、埋土が他遺構と似ており、またしまっていないうことから、近い時期のものと思われる。井戸については未完掘の為、掘開時期は不明である。しかし埋土に常滑の土管や、レンガブロック、瓦などが含まれており、埋立てられた時期は明治以降が考えられる。

最後に当地点において特記すべき事は太平洋戦争時の防空壕が3基検出された事である。それぞれ形態が異なっているが、深さはいずれも1m前後と比較的浅く、平面形は長方形を呈す

る。また周壁には天井を支えた柱の痕跡が残り、特に3号防空壕には基礎にレンガブロック片が置かれている。地元の人の話によれば、戦時中、各家々それぞれ1~2ヶ所の防空壕が掘られ、家具収納用と緊急避難用に使われたという。調査区の元地主の話によれば、最初2号防空壕を掘ったが、少し小さかったので埋戻し、改めて3号防空壕を掘り直したという事である。昭和20年6月19日の福岡大空襲時には3号防空壕は既にあったという。しかし南側の1号防空壕については記憶がないということである。恐らく南側隣接地の屋敷に伴うものと考えられる。また防空壕の構造は、深さが1m前後と浅い事から、地上に直接穴を掘り、半地下式の構造で、柱の上にトタンや、竹や板で屋根を作り、その上に土をかぶせた程度のもので、ただ目につくのを防ぎ、身を隠す程度のものと考えられる。直撃弾を受けたらひとたまりもなく、本格的な防空壕は集落より少し離れたところに共同のものを作っていたという。また3号防空壕のレンガは、戦前迄小田部地区にレンガ工場があり、そこで製造されたレンガを用いたものであろう。防空壕の埋立て時期は2号については昭和19年から20年の初め頃迄であり、出土した遺物は、昭和10年代後半に使われていたものである。3号については戦後まもなく、家財道具などの物置になっていたが、翌年の梅雨頃に大雨で浸水し、その時に埋め立てたという。1号については遺物もなく不明であるが、戦後間もなく埋め立てられたものであろう。これらは激動の昭和前半期の庶民生活の一端を示す資料となろう。

4. 第134次調査 (調査番号 8753)

1) 調査地区の地形と概要

申請地は福岡市早良区有田2丁目12-3, 12-4番地にあり、調査対象面積は433m²である。現況は松林であった。

申請地がある有田1丁目、2丁目は有田・小田部台地で最も標高が高く（標高12-14m）、かつ広い平坦面を持つ地域である。この地域は最も調査が行なわれている部分で、九州大学による調査以来、現在迄にすでに50ヶ所近く調査が行なわれている。

今回の調査は昭和62年に提出された個人住宅建設の為の事前調査願を受けて行った。調査は

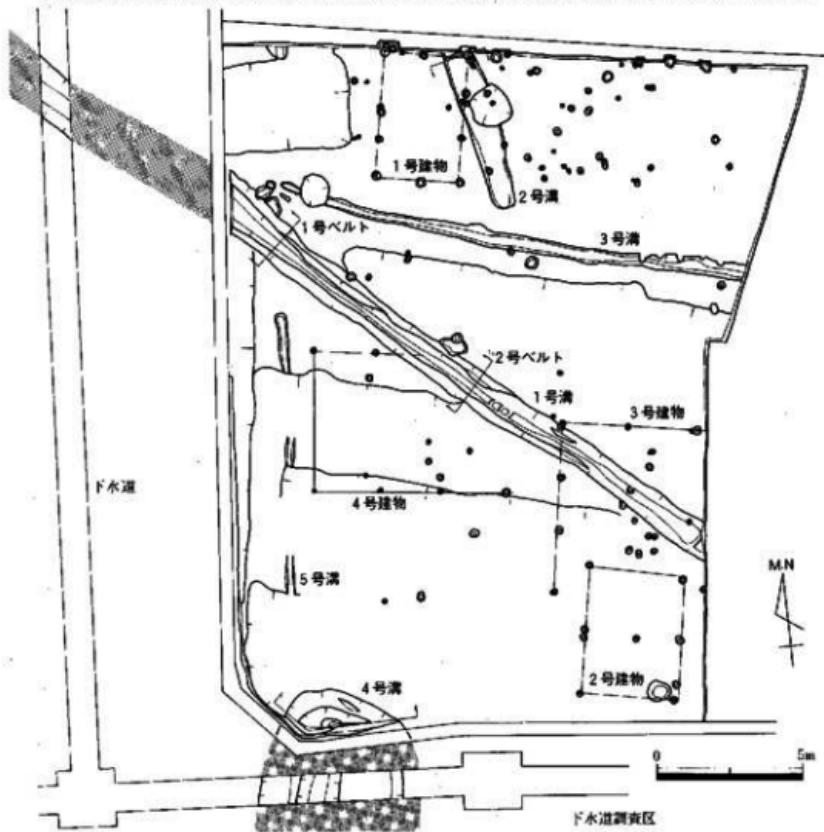


Fig. 50 第134次調査構造配置図 (縮尺1/200)

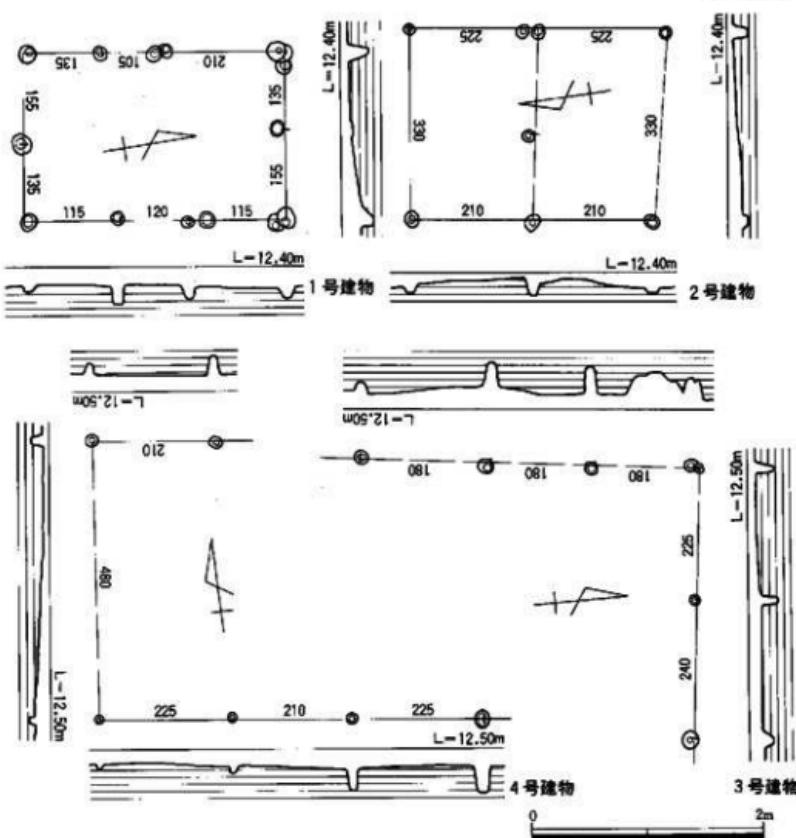


Fig. 51 1～4号建物 (縮尺1/100)

昭和63年3月3日～3月24日迄実施した。調査実面積は406m²である。

調査地点は第87次調査地点の南側、第100次調査地点の道路を隔てて東側に位置する。遺構の存在が確実であったため、試掘調査は行なわず、直接本調査を実施した。遺構面は表土下20～30cmで浅く、黄褐色ローム土である。松林があった為か、木の根子などで搅乱が著しく、遺構状況は余り良くない。検出した遺構は溝状遺構5条、掘立柱建物4棟である。出土遺物は非常に少なく、合せてコンテナ2箱である。

2) 検出遺構

据立柱建物

削平が著しい為、やや疑問の残る所もある。全部で4棟検出した。

1号建物 (Fig. 51, PL. 28)

北側で検出した。主軸をN-8°30'-Eに取る2×3間の建物である。梁間全長2.90m(9.7尺), 衍行全長4.50m(15尺)を測る。柱穴は円形で、直径20~40cm, 深さは10~40cmを測る。埋土は黒褐色土や暗褐色土、暗灰褐色土と様々である。遺物の出土は少なく2柱穴から須恵器小片が各1点出土した。

2号建物 (Fig. 51)

調査区南東隅で確認した主軸をN-8°-Eに取る1×2間の建物である。梁間全長3.30m(11尺), 衍行全長4.20又は4.50m(14尺, 15尺)を測る。中央に床束らしきものがある。柱穴は円形で直径は20~30cmと小さい。深さも10~30cmと浅いが、衍行中央の柱が比較的深い。埋土は暗褐色から暗灰褐色土。遺物の出土はない。

3号建物 (Fig. 51)

2号建物の北で検出した主軸をN-7°-Eに取る2×3間(?)の建物と思われる。削平、擾乱等によって対応する柱穴が見つからず、L字に曲る構列の可能性もある。柱穴径は15~30cm, 深さは15~45cmを測る。埋土は黒褐色土又は暗褐色土である。遺物は瓦質土器、染付のそば猪口底部片が出土した。

4号建物 (Fig. 51)

調査区中央で検出した主軸をN-84°30'-Wに取る1(?)×3間の建物と思われる。著しい擾乱によって柱穴は全て確認出来なかった。梁間全長4.80m(16尺), 衍行全長6.60m(22尺)を測る。柱穴は円形で、直径は15~30cmと小さい。また深さも10~40cmとバラツキがある。埋土は黒褐色又は暗褐色土である。遺物は土師器細片が1点出土した。

tab. 3 第134次調査据立柱建物一覧表

建物番号	規模	方向	梁間		衍行		方位	床面積(m ²)	備考
			実長(m)	柱間寸法(尺)	実長(m)	柱間寸法(尺)			
1号建物	2×3	南北	2.90	5.2・3.5	4.50	7・3.5・4.5 5.5・4・5.5	N-8°30'-E	13.05	2号溝を切る
2号建物	1×2	南北	3.30	11 5・6	4.20 4.50	7・7 7.5・7.5	N-8°-E	14.35	中央に床束を持つ(?)
3号建物	2×3(?)	南北	4.65(?)	7.5・8	5.85	6.6・7.5	N-7°-E		
4号建物	1×3(?)	東西	4.80	16	6.6	7.5・7・7.5	N-84°30'-W		

溝状遺構 (SD)

5条検出した。弥生時代1条、古墳時代1条、中世から近世3条である。

1号溝 (Fig. 52, PL. 28)

調査区は斜方向に横断する断面V字形又はじ字形の溝である。主軸方向はN-49°30'-Wに取る。溝幅は1.3m、深さは最大で0.8mを測る。溝の残りは東側の方が攪乱や、削平によって悪い。溝埋土は大きく上下両層に別れる。上層の方は暗褐色、黒褐色粘質土を主体とし、下層は上層土に黄褐色ないしは明褐色のロームブロックを多く混入している。この溝の連がりは今のところ西側の下水道調査区以外検出されていない。出土遺物は上層より多く出土し、コンテナ1箱弱である。弥生式土器、黒曜石片、石斧、焼土ブロックなどが出土した。

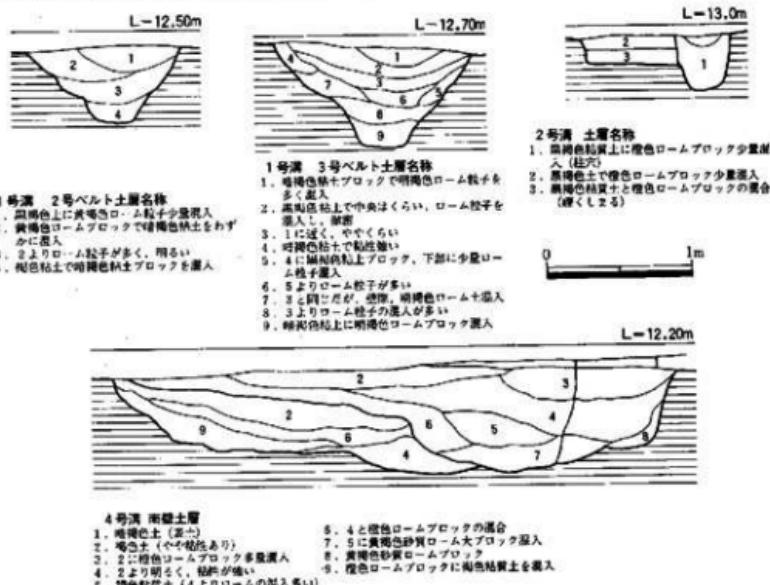


Fig. 52 1・2・4号溝土層図 (縮尺1/40)

2号溝 (Fig. 52, PL. 29)

調査区北側で検出した主軸をN-12°-Wに取る溝である。確認長は6.0m、幅は1.2mを測り、深さは8-17cmと浅い。断面形は逆台形を呈する。埋土は上下2層で、上層は黒褐色粘質土と下層は黒褐色粘質土と橙色ロームブロックを混入する。1号建物より古い。遺物は少なく、弥

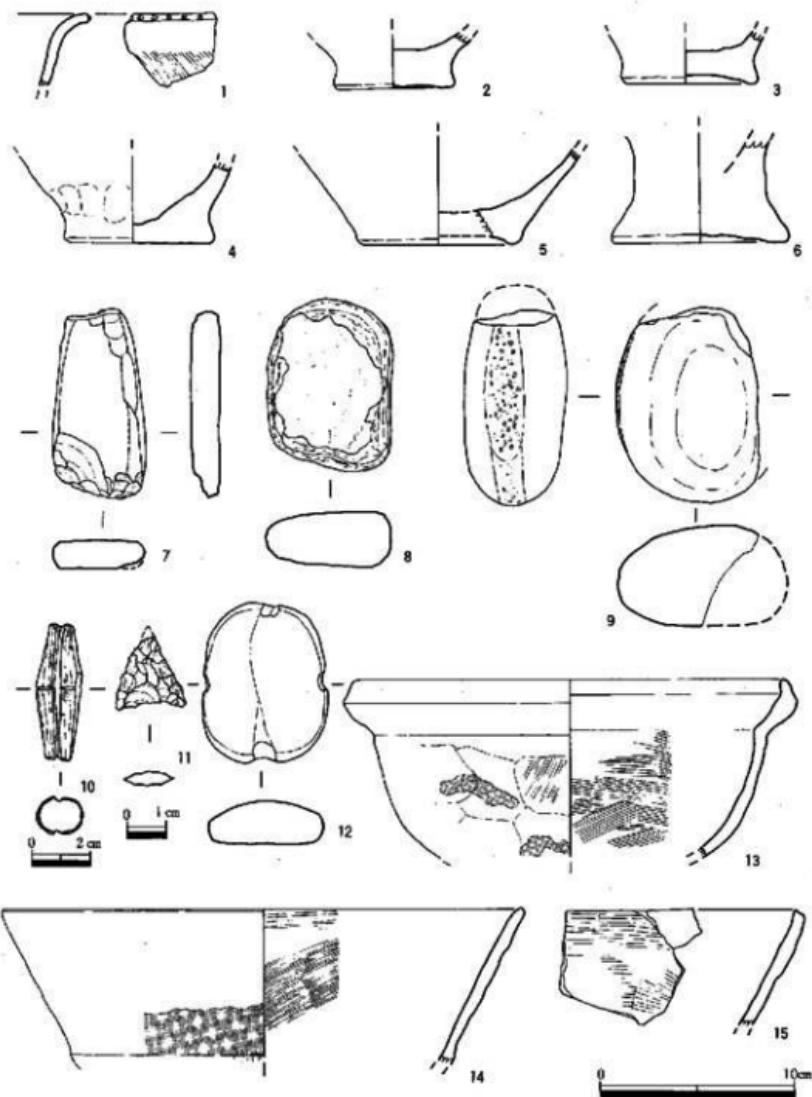


Fig. 53 出土遺物 (縮尺1/3, 1/2, 2/3)

生式土器、土師器、須恵器の細片、黒曜石、鉄滓、焼土ブロックなど40数点ある。

3号溝 (Fig. 52)

2号溝の南側の東西方向に延びる浅い小溝である。西側で途切れ消滅する。確認長16.3m、幅0.5m、深さ4~9cmを測る。埋土はしまりのない暗灰色土である。遺物に黒曜石の石片、石核などがある。畠の地割溝のようなものであろうか。

4号溝 (Fig. 52, Pl. 29)

調査区南西隅で検出した。半円形で土坑状を呈すが、南側道路における下水道調査の際この続きを確認しており、溝と断定した。確認規模は最大幅4.0m、長さ1.5m、深さ0.75mを測り、比較的大きい溝である。埋土は褐色粘質土を主体とし、底に近い方はロームブロックを混入する。底面から湧水が少量あった。遺物はそれ程多くないが、弥生式土器、土師器、須恵器、瓦質土器の足蓋、土師質土器の摺鉢、黒曜石片などが出土した。

5号溝 (Fig. 52)

調査区西側で南北方向に延びる小溝である。擾乱、削平などによってかろうじて残り、断片的に連続する溝である。確認長9.7m、幅0.3m、深さは最大で10cmを測る。埋土は暗褐色土である。遺物の出土はない。

3) 出土遺物

1号溝出土遺物 (Fig. 53, Pl. 29)

弥生式土器

壺（1~6） 1は如意形の口縁部小片で、口唇部に刻目を持つ。胎土は石英粒を多く含み、色調は灰橙色。2~6はいずれも壺の底部と思われる。底径は2が6.4cm、3が7.0cm、4が7.4cm、5が復元で8.6cm、6が復元で9.2cmを測る。4を除いて底部は上げ底であるが、程度は3・5・6が強い。5は底の底部の可能性がある。弥生時代前期後半から中期初頭のものであろう。

石器

石斧（7） 最大長9.8cm、最大幅4.8cm、最大厚1.5cmを測る。全体に丁寧な研磨を施すが、刃部は使用による欠損が著しい。石質は火成岩系である。上層出土。

磨石（8・9） 8は最大長9.0cm、最大幅6.4cm、最大高2.9cmを測る。上面は使用により磨滅する。各側辺と裏面は火を受けた為か、赤変し、表面の剥落が著しい。9は最大長10.2cm、最大幅7.4cm、最大高5.4cmを測る。上端部右側辺が欠損する。表裏両面はすべすべに磨滅しており、両側辺は敲打使用痕が残る。いずれも花崗岩である。

石錘（10・12） 10は滑石製の沈子で全長4.7m、重さ11gを測る。断面形は梢円形で、長径1.5cm、短径1.2cmを測る。十字に紐かけの溝が切ってある。ケズリ仕上げで、紐ずれ痕がある。12は

玄武岩製の平坦な円盤の各側辺中央を打欠いているものである。裏面は平坦で、断面形は蒲鉾形を呈す。最大長8.4cm、最大幅6.5cm、最大高2.6cm、重さ170gを測る。

石鏃（11） 石質はサメカイトと思われる。平面形は三角形を呈し、全体にやや磨滅する。先端部は欠損する。最大長1.9cm、最大幅1.8cm、重さ1gを測る。

4号溝出土遺物 (Fig. 52, PL. 29)

瓦質土器

足釜（13） 三足の支脚を持つ足釜の口縁部片で、復元口径22.4cmを測る。口縁部は内弯気味に外反し、端部を内側へ長くつまみ出して内傾させている。頭部に明確な稜線を有す。体部外面はナナメハケが残り、煤が厚く付着する。内面はヨコ又はナナメハケを施す。色調は黒灰色を呈す。

土師質土器

鍋（14・15） 14は口縁部1/4片で、復元口径は27.2cmを測る。口縁部は底部から斜め外方にまっすぐ開き、端部を丸くおさめる。底部は体部からかるく稜を持って屈折し、平底気味の丸底を呈すと考えられる。体外面はナデで、下半は使用による煤が付着する。内面はナナメの細かいハケ目を施す。15は口縁部小片で、口縁部は平坦を呈し、中央かナデによってやくばむ。外面はナデで煤が付着する。内面はヨコ又はナナメハケを施す。1~3mmの石英粒を含み、色調は14が浅黄橙色、15が明赤橙色を呈す。

4) まとめ

削平が著しい為、遺構はそれ程多く検出されなかったが、遺構の時期は大きく3時期にかけ事が出来る。

I期は1号溝の時期で、弥生時代前期後半頃の甕の口縁部片や底部片が出土している。しかし、上層から滑石製の石錘12が出土しており、この石錘と同型のものが福岡市の野方中原遺跡、湯納遺跡、宮ノ前遺跡などから出土しており、その時期は弥生時代後期から古墳時代初め頃に位置づけられている。このことから時期は弥生時代前期後半から後期位の時期と考えておく。II期は2号溝の時期で、遺物から古墳時代から古代の範囲が考えられる。極端な推論ではあるが、第47次調査の奈良時代の溝と連続する可能性がある。III期は4号溝の時期で16世紀前半代の時期である。この周辺一帯で検出されている、中世後半代の漆状遺構の一部と考えられる。掘立柱建物については、東西、南北方向を基準とするが、西隣する第100次調査区の建物とは、若干振れ方が異なっている。柱穴規模も削平の為もあるが、全体に小さく、中世以降と考えられる。

註

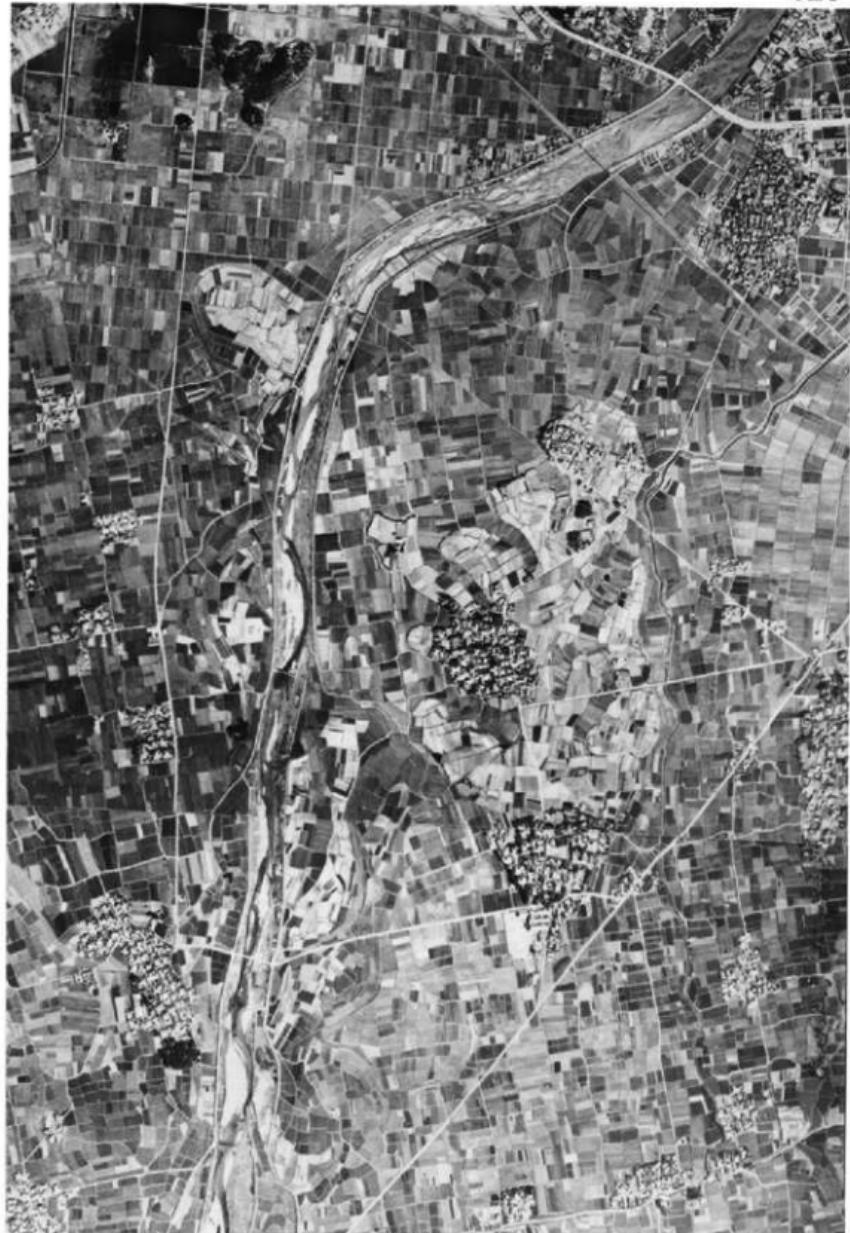
1. 福岡市教育委員会「野方中原遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集 1974
2. 福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 1970 同 第4集 1976 同 第5集 1977
3. 福岡県教育委員会「宮の前遺跡E地点」「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 1970
福岡県労働者住宅生活協同組合「宮の前遺跡A~D地点」1971
- 福岡市教育委員会「宮の前遺跡F地点」福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集 1971

図 版

PLATES



有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）



有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）



(1)調査区全景（北から）



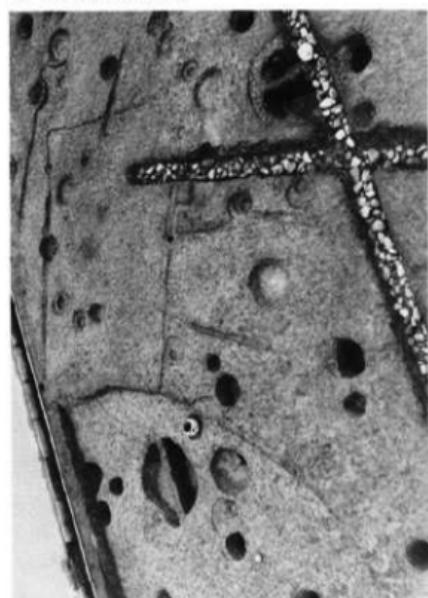
(2)調査区全景（東から）



(1) 1号住居跡（南から）



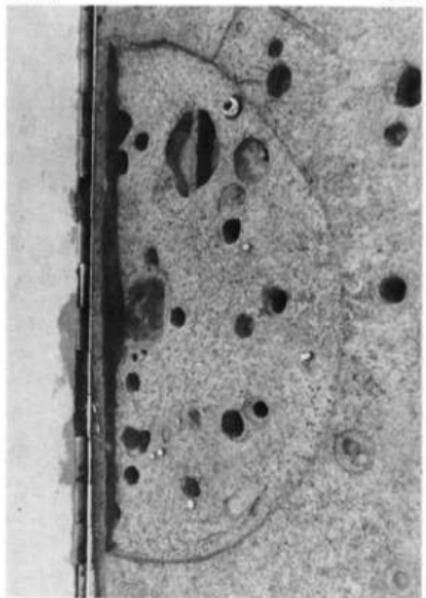
(2) 1号住居跡遺物出土状況



(3) 2・4号住居跡（東から）



(4) 2・4号住居跡遺物出土状況



(1) 3号住居跡(東から)



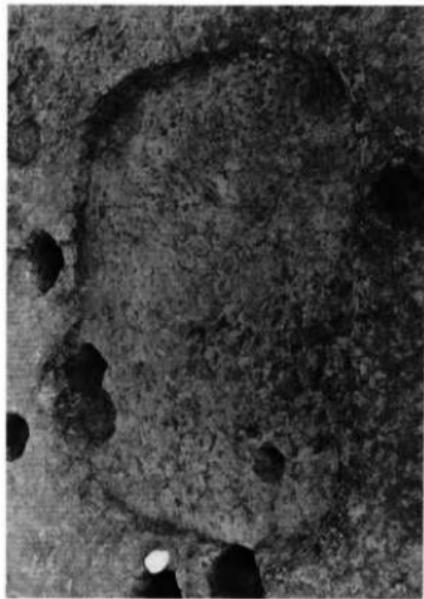
(2) 3号住居跡中央土坑(東から)



(3) 3号住居跡遺物出土状況



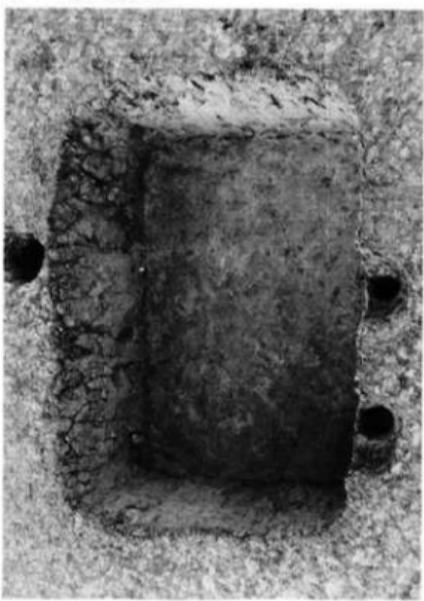
(4) 3号住居跡遺物出土状況



(1) 1号土坑（西から）



(2) 2号土坑（東から）



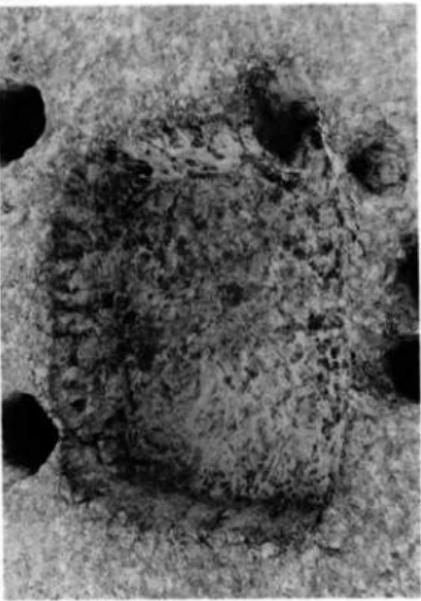
(3) 3号土坑（南東から）



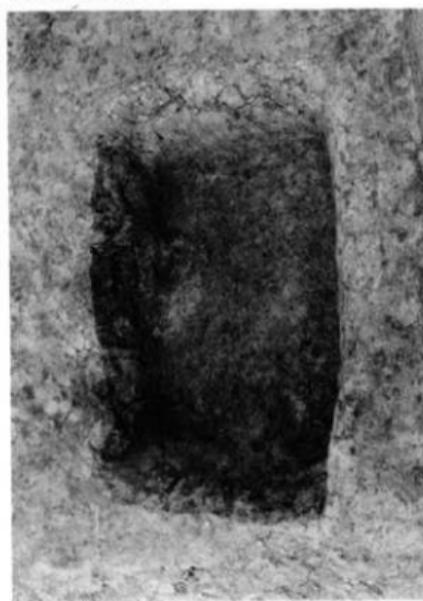
(4) 4号土坑（南から）



(1) 6号土坑(北から)



(2) 7号土坑(東から)



(3) 8号土坑(南から)



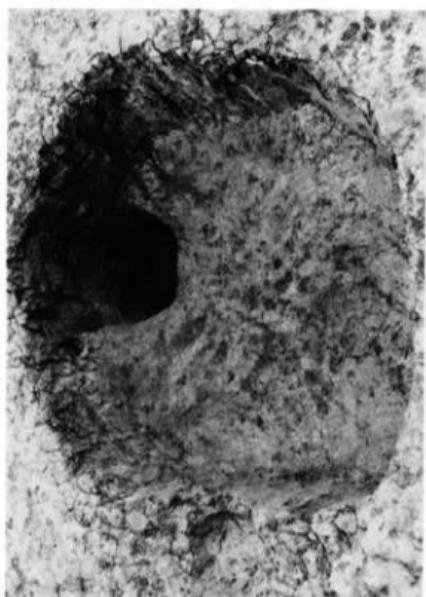
(4) 9号土坑(南から)



(1) 10号土坑（南から）



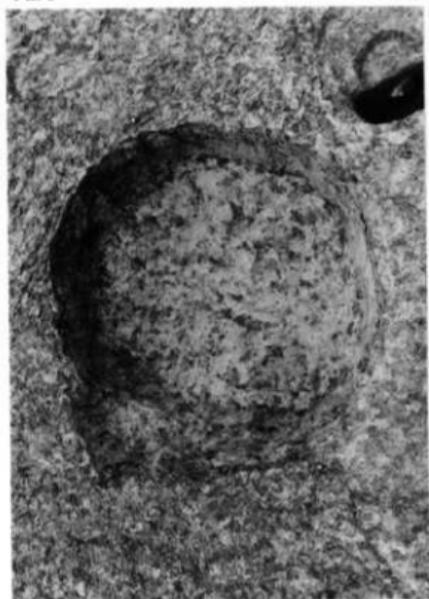
(2) 12号土坑（東から）



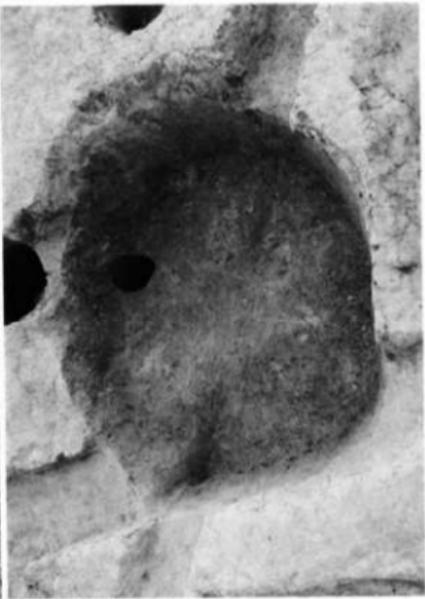
(3) 16号土坑（南東から）



(4) 17号土坑（南西から）



(1) 19 岩土坑 (西から)



(2) 22 岩土坑 (東から)



(3) 1 号前壁穴 (西から)



(4) 1 号前壁穴 断ち割り状況



(1) 1号井戸（西から）



(2) 1号井戸土層断面



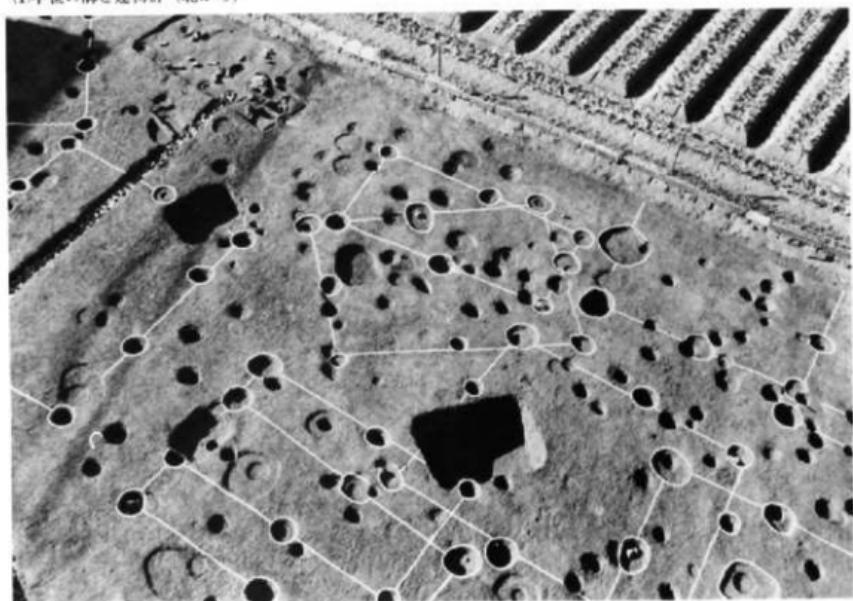
(3) 1号井戸井筒（南から）



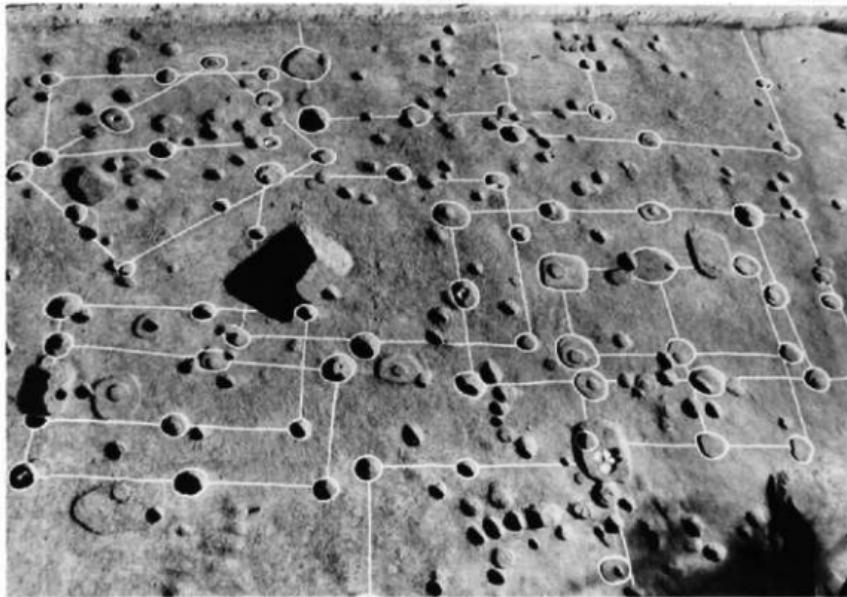
(4) 1号井戸井筒内の状況



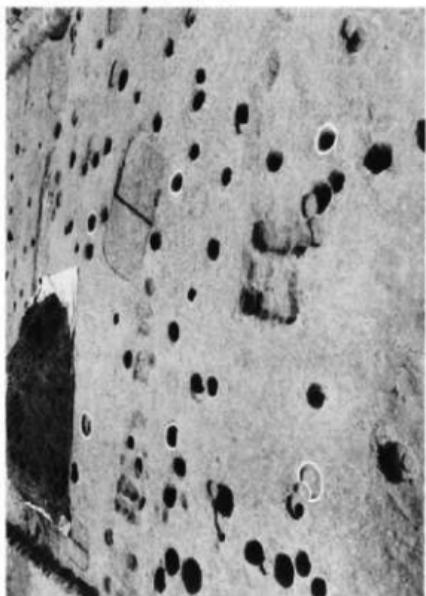
(1)中世の溝と建物群（北から）



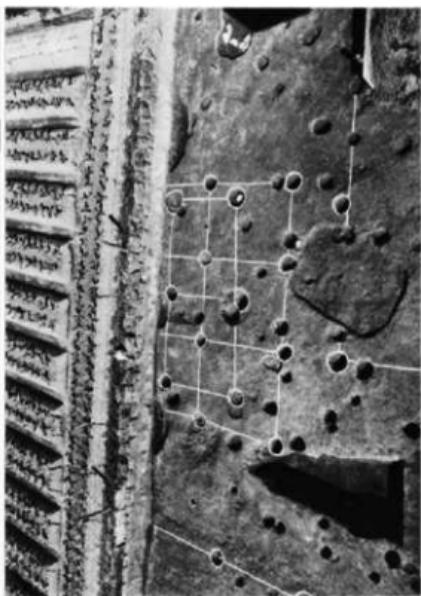
(2)調査区北西側建物群（南東から）



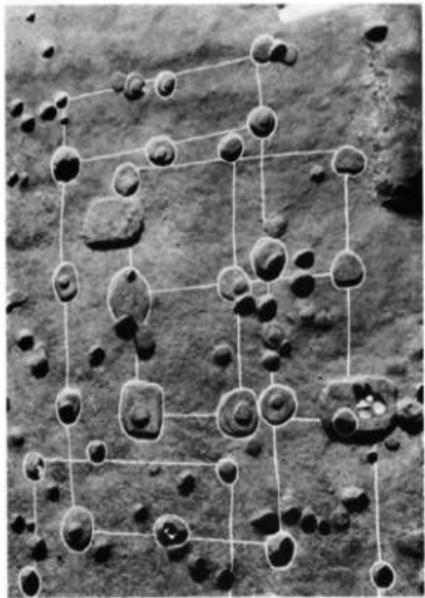
(1)調査区中央建物群（南から）



(2)調査区北端部（北から）



(3)調査区南端部（南から）



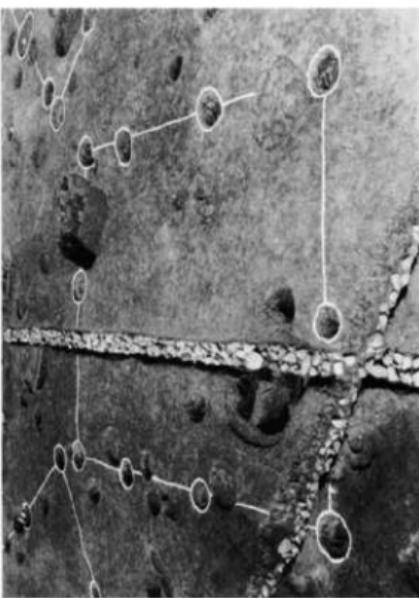
(1) 8月・9月植物(構造)



(2) 13月植物



(3) 14月・15月植物



(4) 16月植物



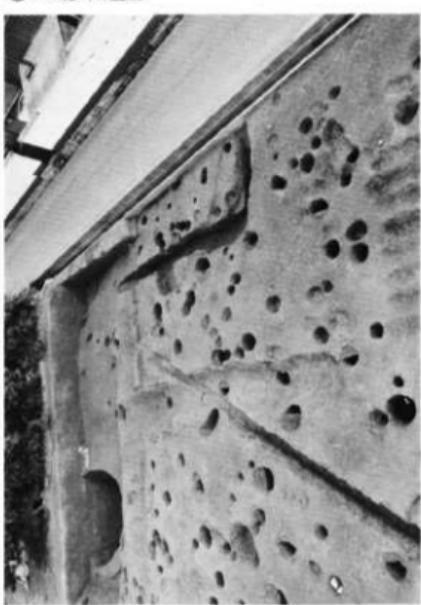
(1) 5号・6号・8号標 (床から)



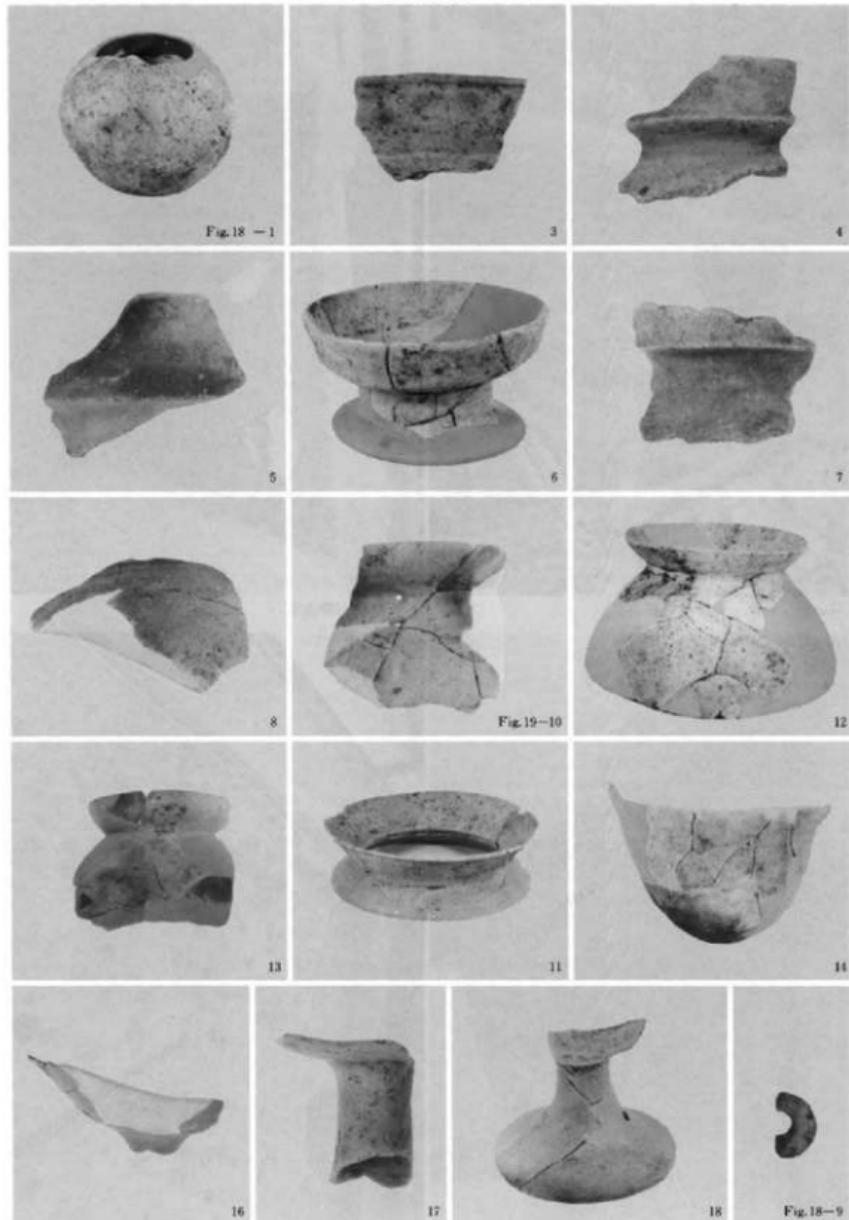
(2) 1号測定器底面



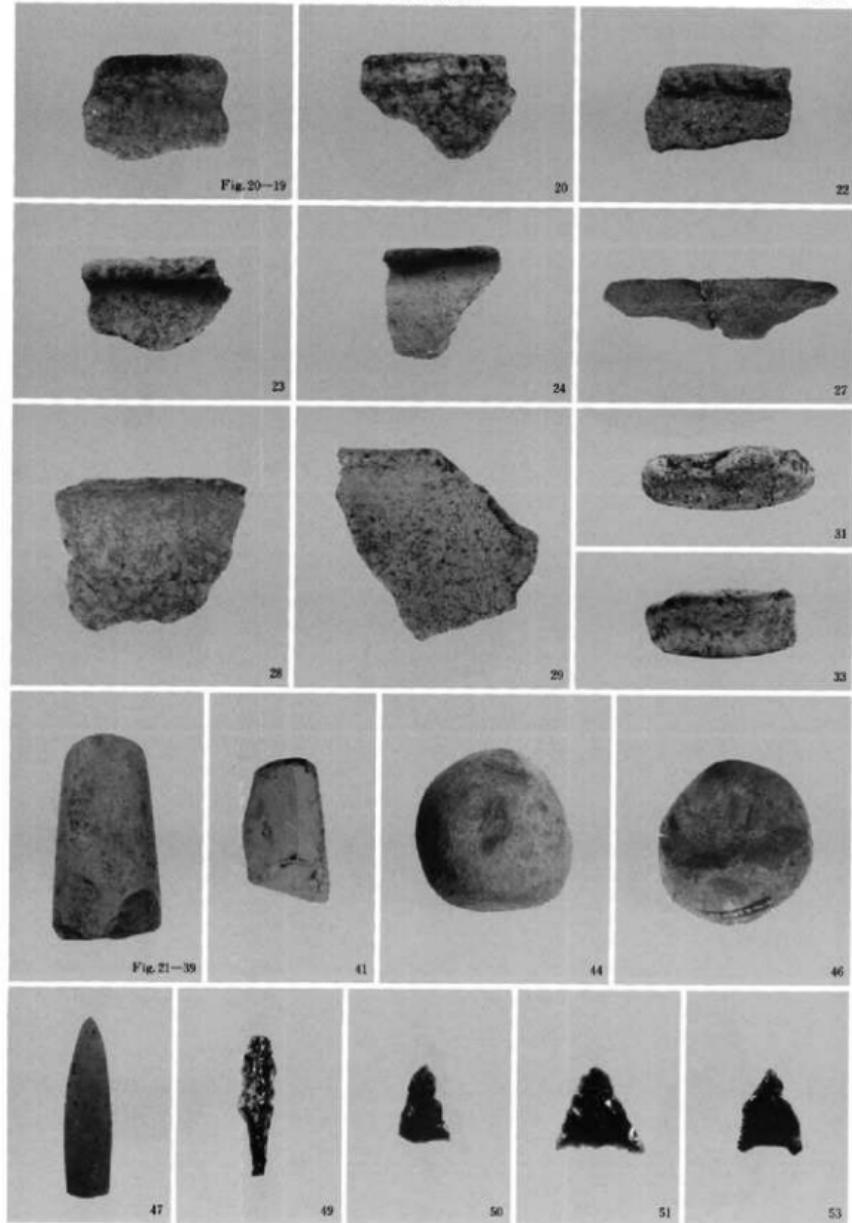
(3) 9号標 (床から)



(4) 7号・8号標 (床から)



1 号住居跡出土遺物



3号住居跡出土遺物

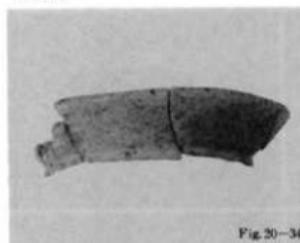


Fig. 20-34



38



Fig. 22-59



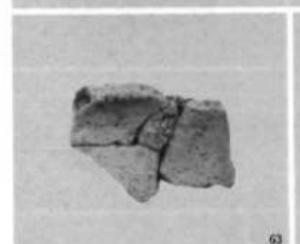
55



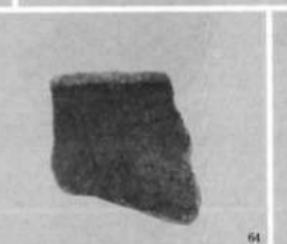
60



62



63



64



65



66



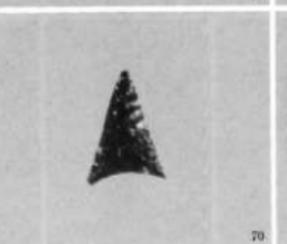
67



68



69



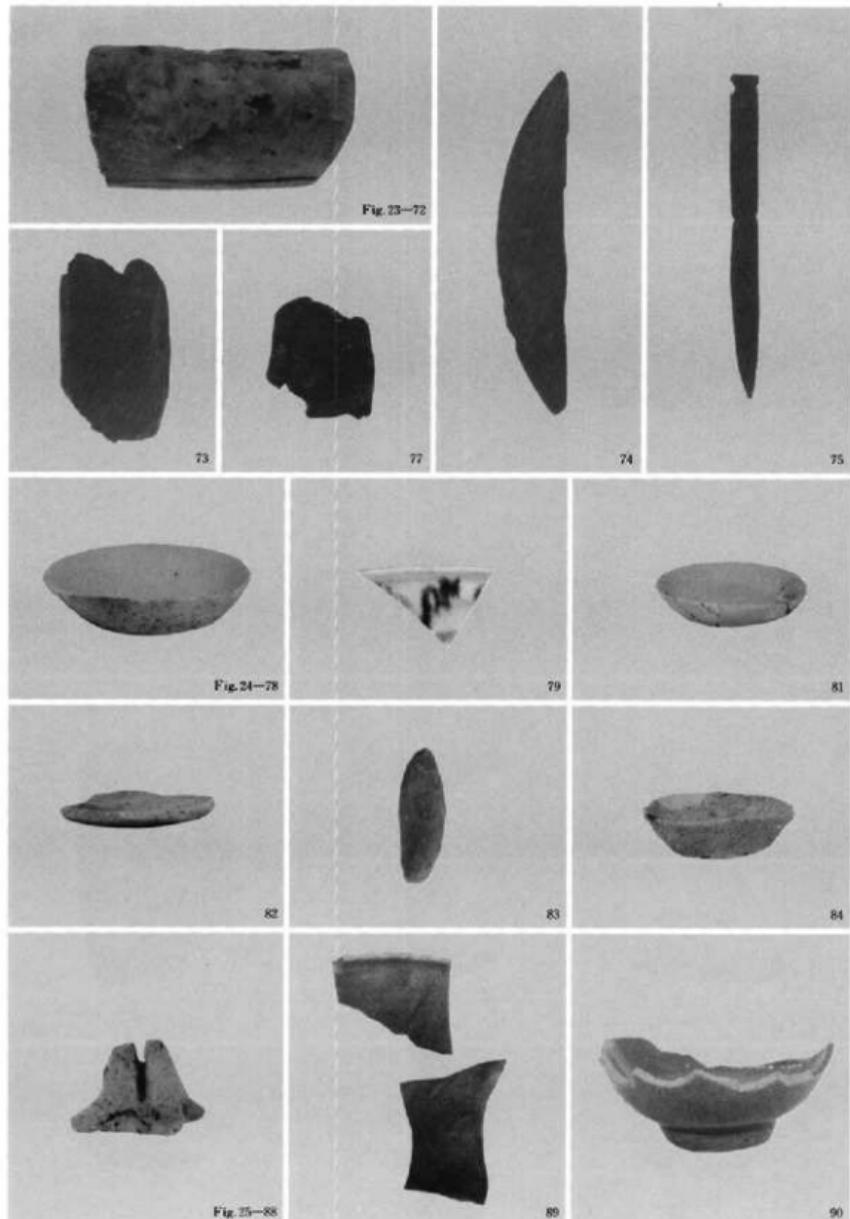
70



71

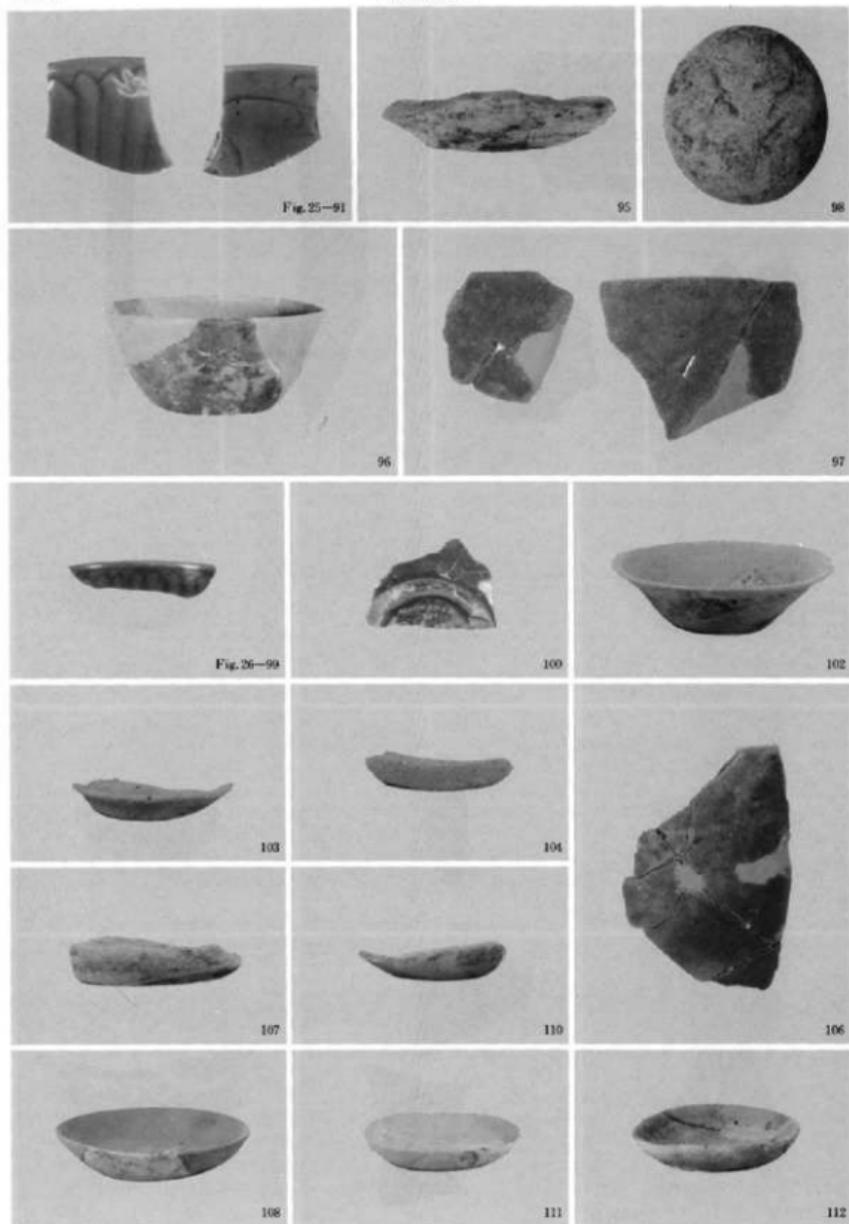
2・4号住居跡・土坑・貯蔵穴出土遺物

34・38±2・4号住居跡
55±2号土坑, 59±4号土坑
60・62±7号土坑, 63~71±1号貯蔵穴



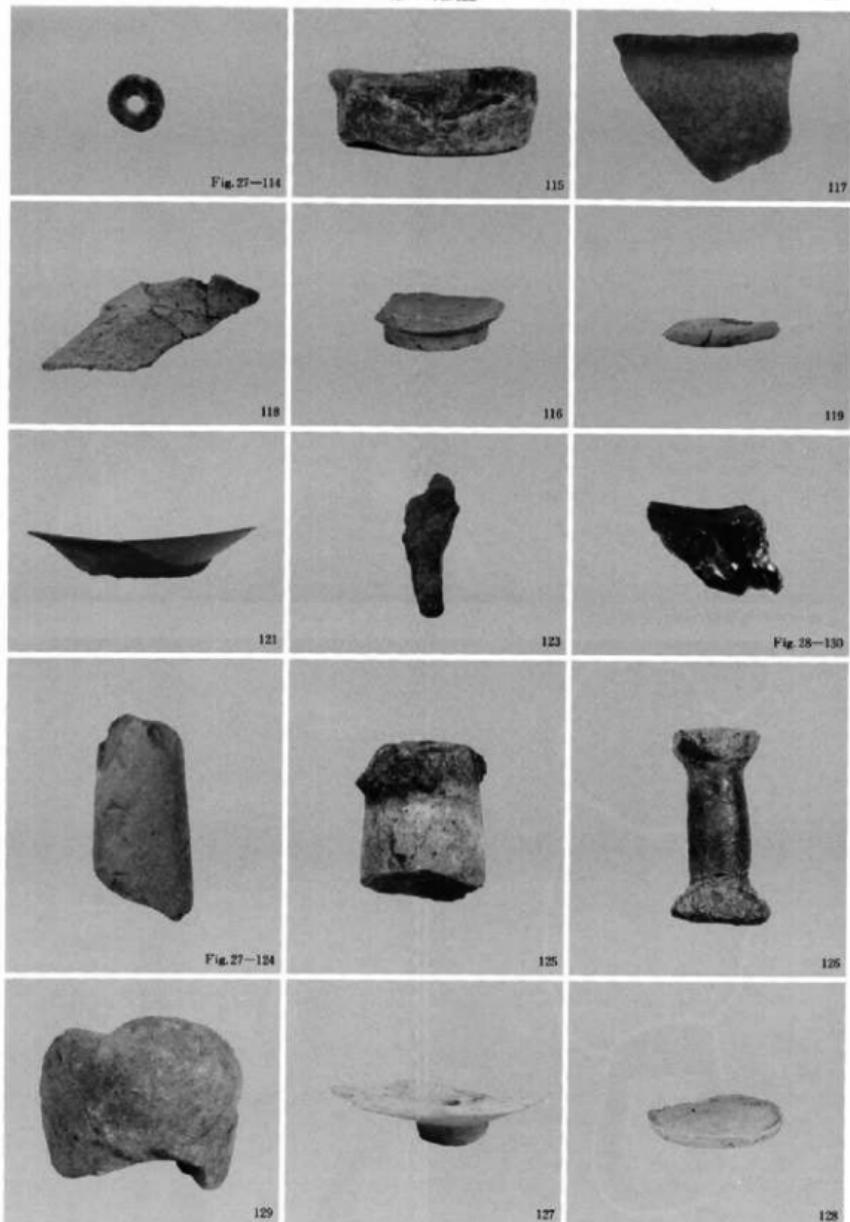
1号井戸、建物、1号溝出土遺物

72~77は1号井戸、78~79は5号建物
81は8号建物、82・83は13号建物
84は16号建物、88~90は1号溝



1～9号溝出土遺物

91～98は1号溝、99～106は5号溝
107・108は8号溝、110～112は9号溝

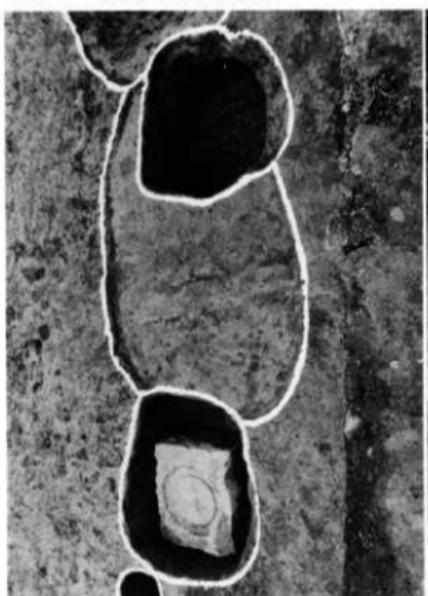


ビット・敷石造構・造構面出土遺物

114~123・130はビット
124~126・129は敷石造構
127・128は造構面



(1) 第103次調査全景(南東から)



(2) 3号椭圆地石(東から)



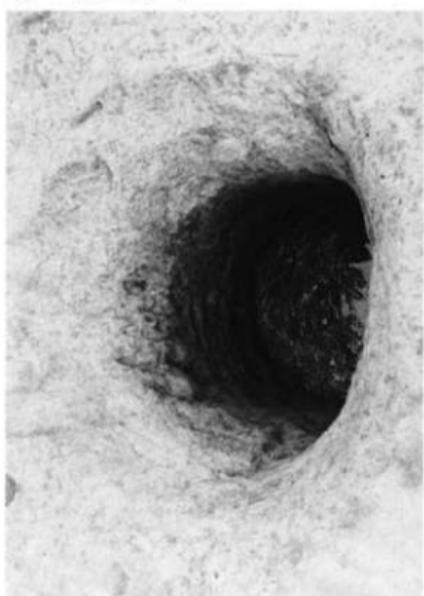
(3) 1・2号椭圆(東から)



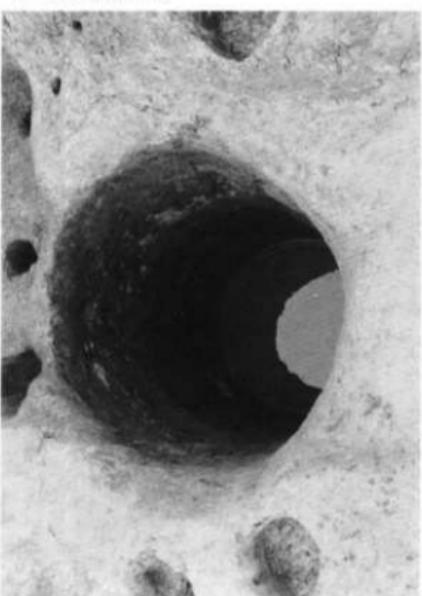
(1) 5号土坑(南西から)



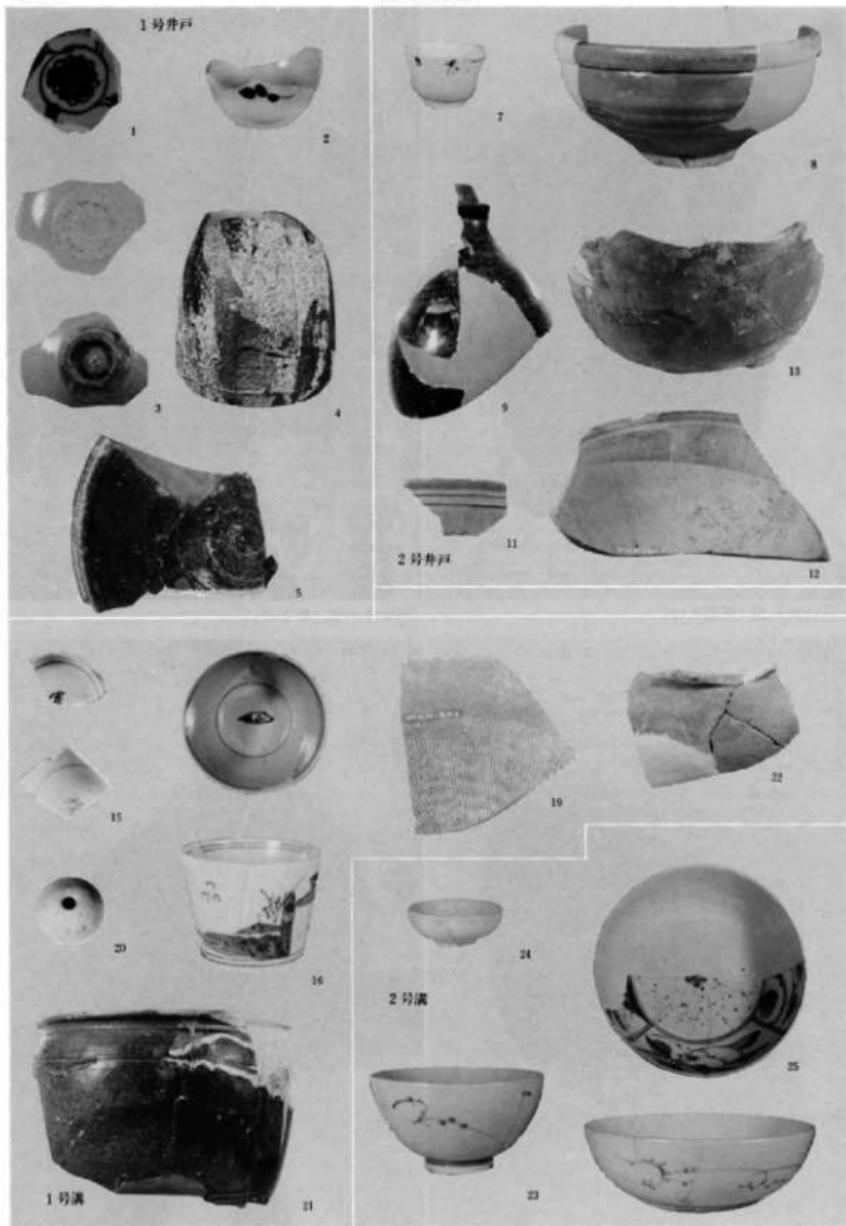
(2) 6号土坑(東から)

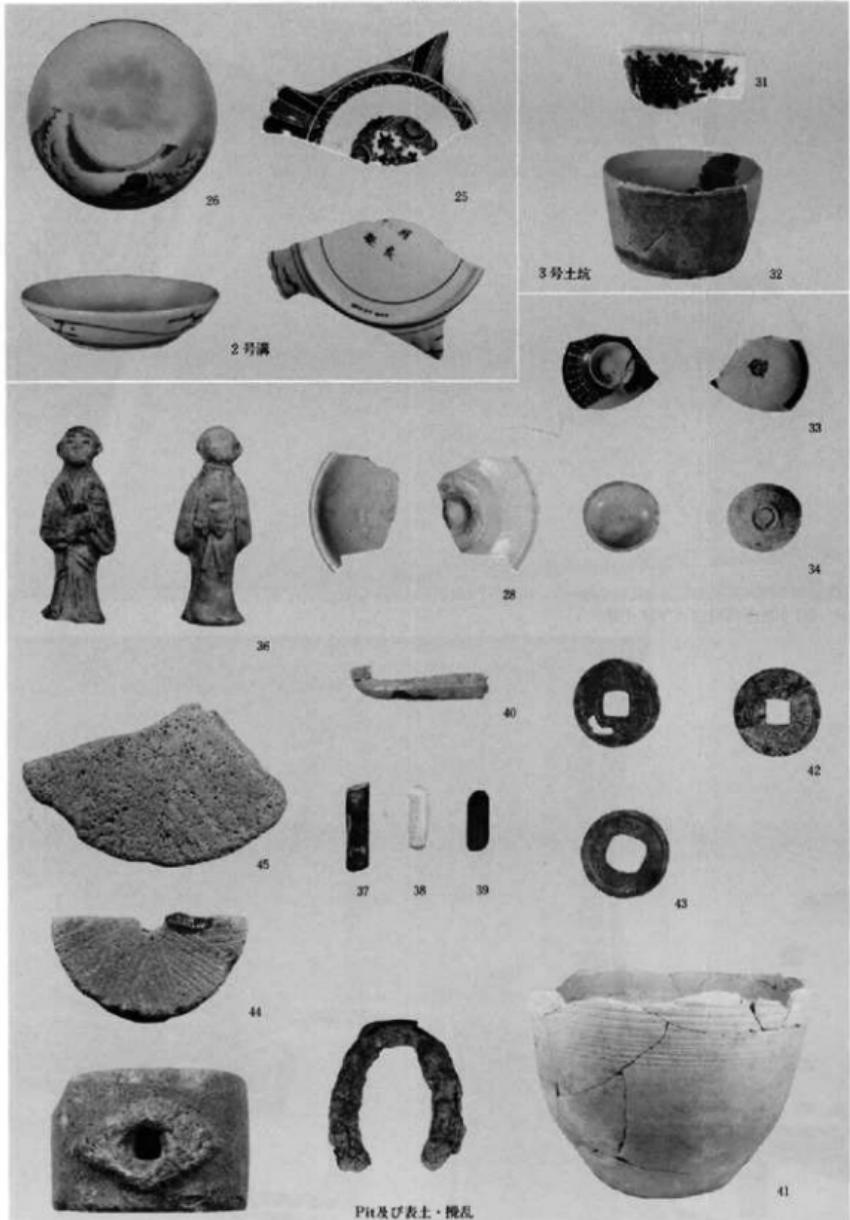


(3) 1号井口



(4) 2号井口(東から)







(1) 第130次西側調査区全景（東から）



(2) 第130次東側調査区全景（北から）



(1) 1号掩体（東から）



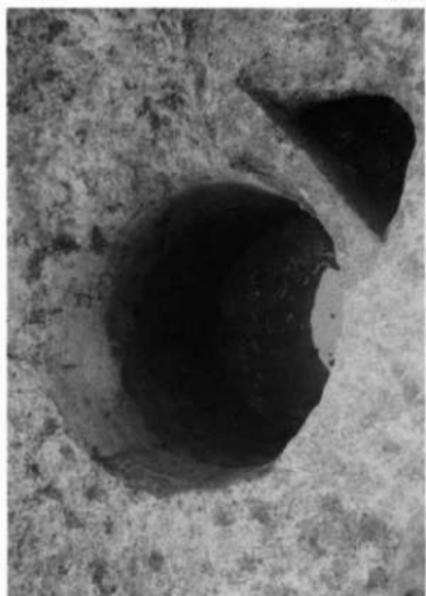
(2) 1号防空壕（東から）



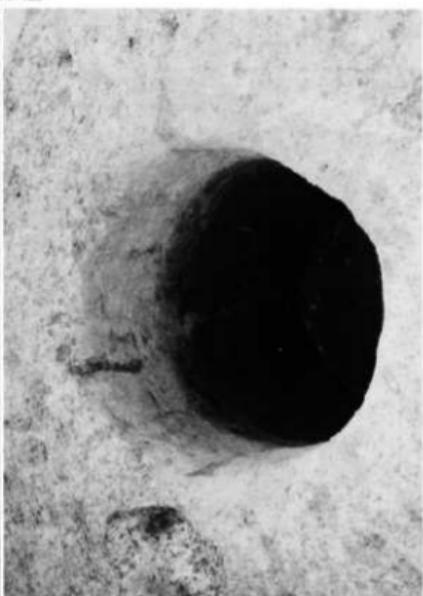
(3) 2号防空壕（東から）



(4) 3号防空壕（南から）



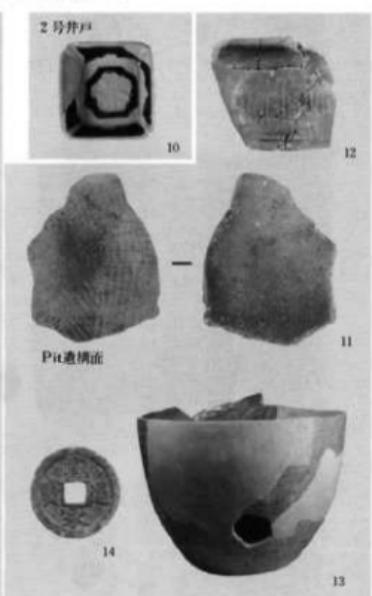
(1) 1号井戸 (北から)

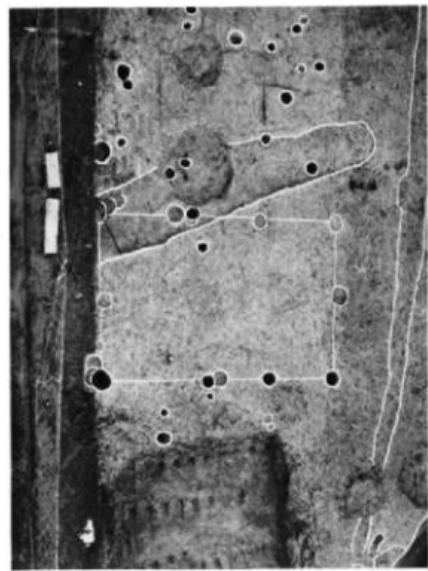


(2) 2号井戸 (東から)



(3)出土遺物





(2)



(3)

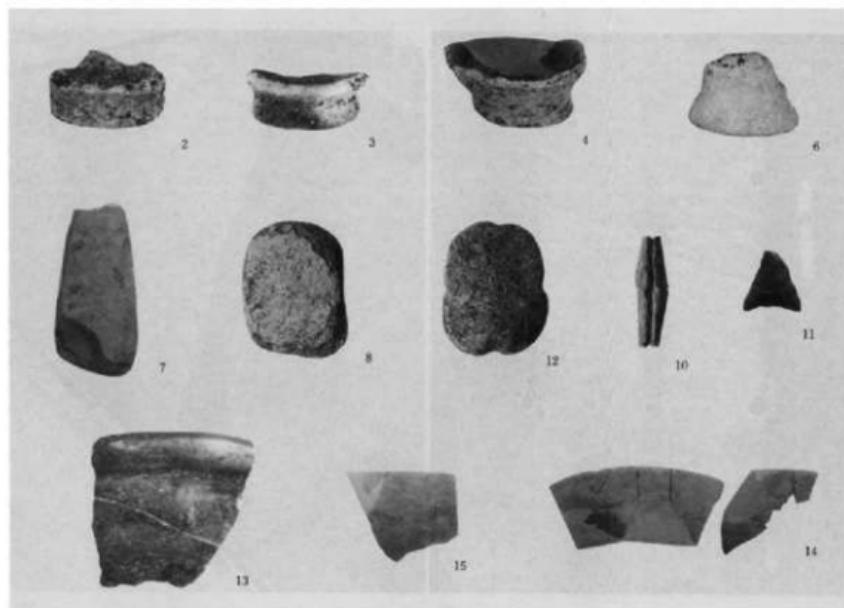
(1)調査区全景（西から） (2)1号建物（北から） (3)1号溝（北西から）



(1)



(2)



(1) 2号溝（北から） (2) 4号溝（北から） (3) 出土遺物

有田・小田部 第10集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第212集

1989年 (平成元年) 3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 博巧印刷株式会社

